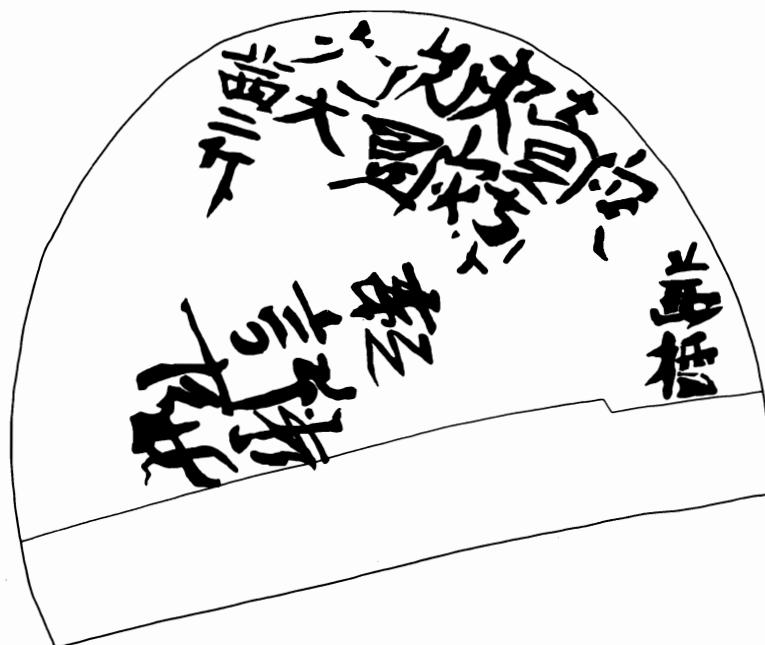


第 20 回
神奈川県遺跡調査・研究発表会
発 表 要 旨

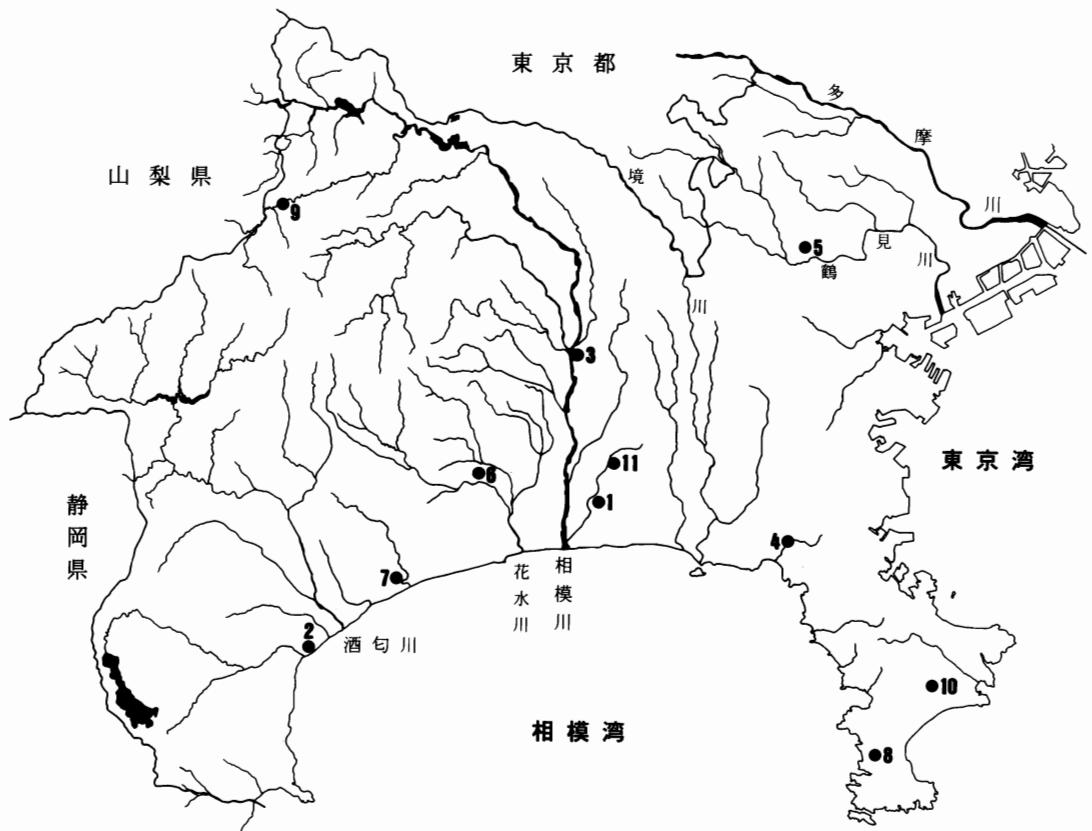


1996(平成8)年9月23日(月)

於 茅ヶ崎市民文化会館

主 催 神 奈 川 県 考 古 学 会
茅ヶ崎市教育委員会

後 援 神 奈 川 県 教 育 委 員 会
財団法人茅ヶ崎市文化振興財団



目 次

1. 茅ヶ崎市西久保遺跡群	富永富士雄・大村浩司・宮下秀之・藤井秀男	1
2. 小田原城下・欄干橋町遺跡第IV地点		山口剛志
3. 海老名市No47遺跡		瀬田哲夫
4. 鎌倉市北条小町邸跡（泰時・時頼邸）		馬渕和雄

記念講演 古代文字資料の現状について～古代の相模を中心として～	平川 南	27
--	------	----

5. 横浜市戸根不動原遺跡	横山太郎	29
6. 平塚市沢狭遺跡	戸田哲也・小林義典・香川達郎	35
7. 小田原市羽根尾横穴墓群	田村良照	39
8. 三浦市赤坂遺跡	中村 勉	44
9. 津久井町青根馬渡遺跡群No.4 遺跡	河野喜映・池田 治	50
10. 横須賀市大塚東遺跡	大坪宣雄・北爪一行	54
11. 茅ヶ崎市臼久保A遺跡	松田光太郎・田村裕司・井辺一徳・阿部友寿	57

神奈川県遺跡調査・研究発表会のあゆみ	61
--------------------	----

にしきぼ 1. 茅ヶ崎市西久保遺跡群

富永富士雄・大村浩司・宮下秀之・藤井秀男

西久保地域は、茅ヶ崎市南西部に形成された自然堤防地形にその多くが位置する。近年開発が進み、これらに伴う調査が数多く行われており、次第に低地、自然堤防上における様相が明らかになってきている。ここでは3つの調査例をもとに西久保遺跡群の状況を説明する。

上ノ町・広町遺跡第3次調査（第1図1）

所在地 茅ヶ崎市西久保1526番地ほか

調査主体 茅ヶ崎市埋蔵文化財調査会

（会長 渡邊二郎）

調査担当者 大村浩司・藤井秀男・石倉澄子
寺岡早苗

調査目的 県道丸子・中山・茅ヶ崎線拡幅工事
に伴う事前調柀

調査期間 1991年2月1日～1995年12月26日

調査面積 4,250m²

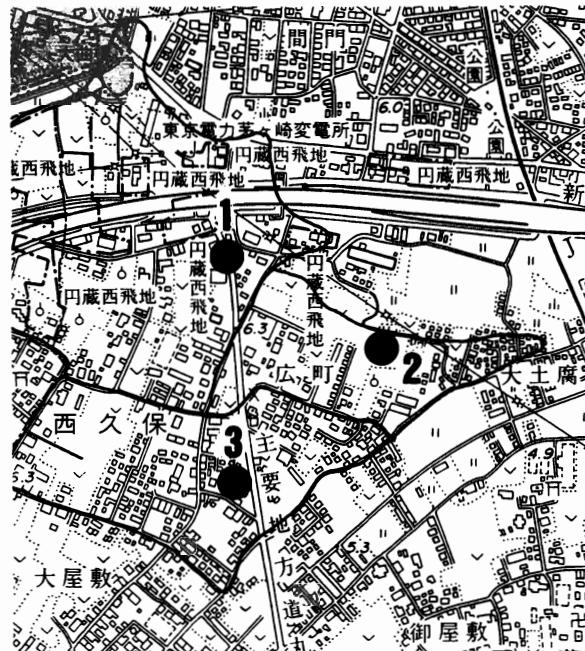
調査の概要

1990年度から断続的に行われている県道拡幅に伴う調査で、上ノ町遺跡と広町遺跡両遺跡にまたがっている。拡幅部と現道下を調査対象として行ったが、調査原因の性格上、狭隘な調査地区の積み重ねとなっている。

調査の結果、古代においては、古墳時代末期から奈良・平安時代の竪穴住居址が確認され、集落が形成されていたことが明らかになった。竪穴住居は、7世紀末から8世紀前半のもの、そして9世紀後半から10世紀のものに中心が見られる。また、掘立柱建物址も確認されており、集落内での竪穴住居址との位置関係を検討する必要がある。

さらに、現道下より発見された井戸は、四隅に支柱をもつ一辺約1mの木枠を有する方形のものであった。縦板は合計で約50枚を数え、その検出状況から補修しながら一定期間使用していたと思われる、本址が集落の共同井戸であった可能性もある。

中世では、土坑、竪穴状遺構、溝状遺構などが数多く発見されているが、なかでも溝状遺構の数が多く、これらは区画や排水等の性格を有するも



第1図 遺跡位置図

のと考えられる。また、円形を呈した集石墓も確認されており、当地区の墓制を考える上で重要である。

近世以降のものとして、土坑、溝状遺構、畝状遺構などが確認されている。溝状遺構のなかには、多量の陶磁器が一括廃棄されているものもある。これらは近世後半から近代にかけてのもので、なかには「焼き継ぎ」資料も確認できる。また、こうした陶磁器に混じって、キセル、ジンボトル、焜炉などの遺物も出土しており、当地区の近世遺物の様相を知る手がかりとなろう。

〈発見された遺構〉

竪穴住居址	43軒（古墳時代末期～平安時代）
掘立柱建物址	13棟（奈良・平安時代）
井戸址	22基（奈良・平安時代、中近世）
竪穴状遺構	12基（中世）
土坑	131基（奈良・平安時代、中近世）
溝状遺構	95条（古代、中近世、近代）
集石墓	1基（中世）
ピット	1,574ヶ所（古代、中近世）
道状遺構	2条（近世）
畝状遺構	6ヶ所（近世、近代）

柵列遺構 1ヶ所（近世）

〈出土した遺物〉

土師器、須恵器、灰釉陶器、陶器、磁器、かわらけ。土製品（管状土錘、泥面）。鉄製品（紡錘車、刀子、釘、鎌、その他）。銅製品。石製品（砥石、硯、紡錘車、石帶、石塔、石臼、温石、その他）。木製品（漆器、曲げ物、箸、桶底、その他）。ガラス製品。動植物遺存体（獸骨、昆虫、種子）。

（大村）

広町遺跡第4次調査（第1図2）

所 在 地 茅ヶ崎市西久保996番地ほか

調査主体 茅ヶ崎市埋蔵文化財調査会

（会長 渡邊二郎）

（財）茅ヶ崎市文化振興財団

（理事長 根本康明）

調査担当者 富永富士雄・宮下秀之・永野博美

調査目的 西久保土地区画整理開発事業に伴う
事前調査

調査期間 1994年5月31日～1996年7月31日

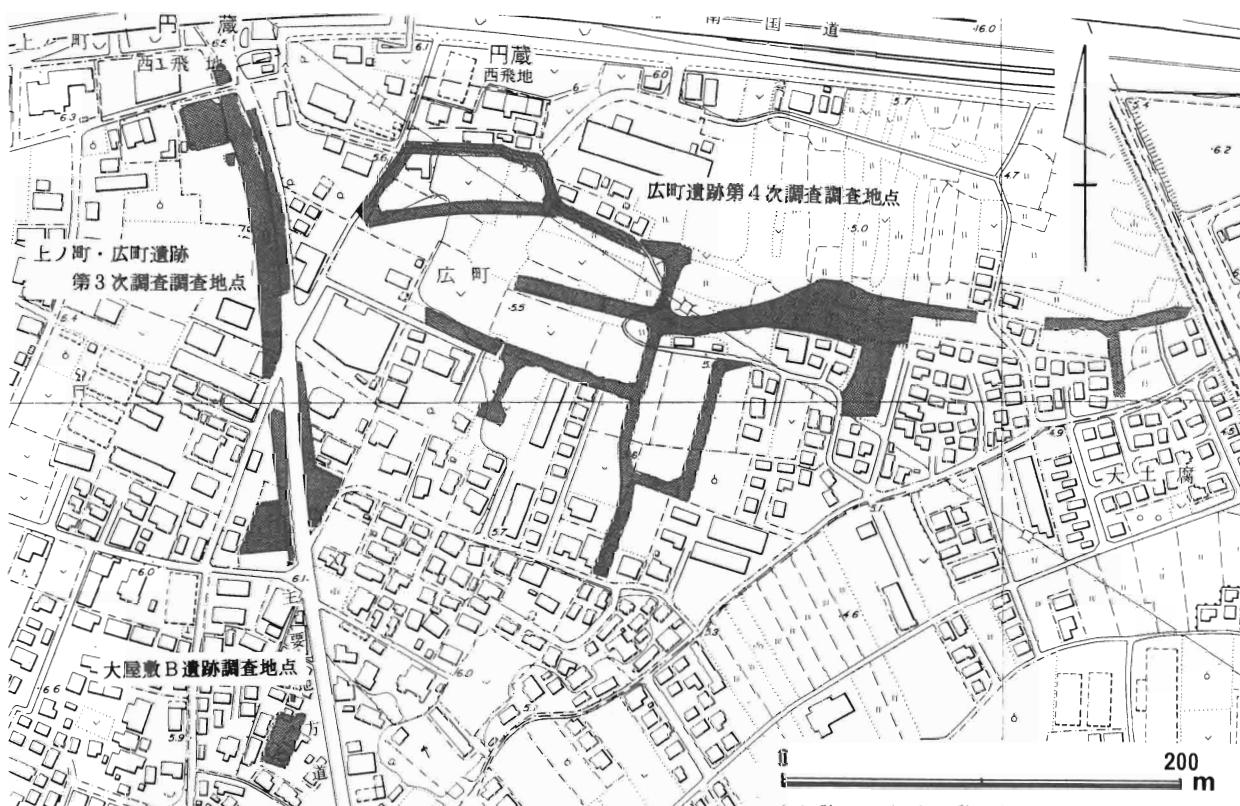
調査面積 約8,500m²

調査の概要

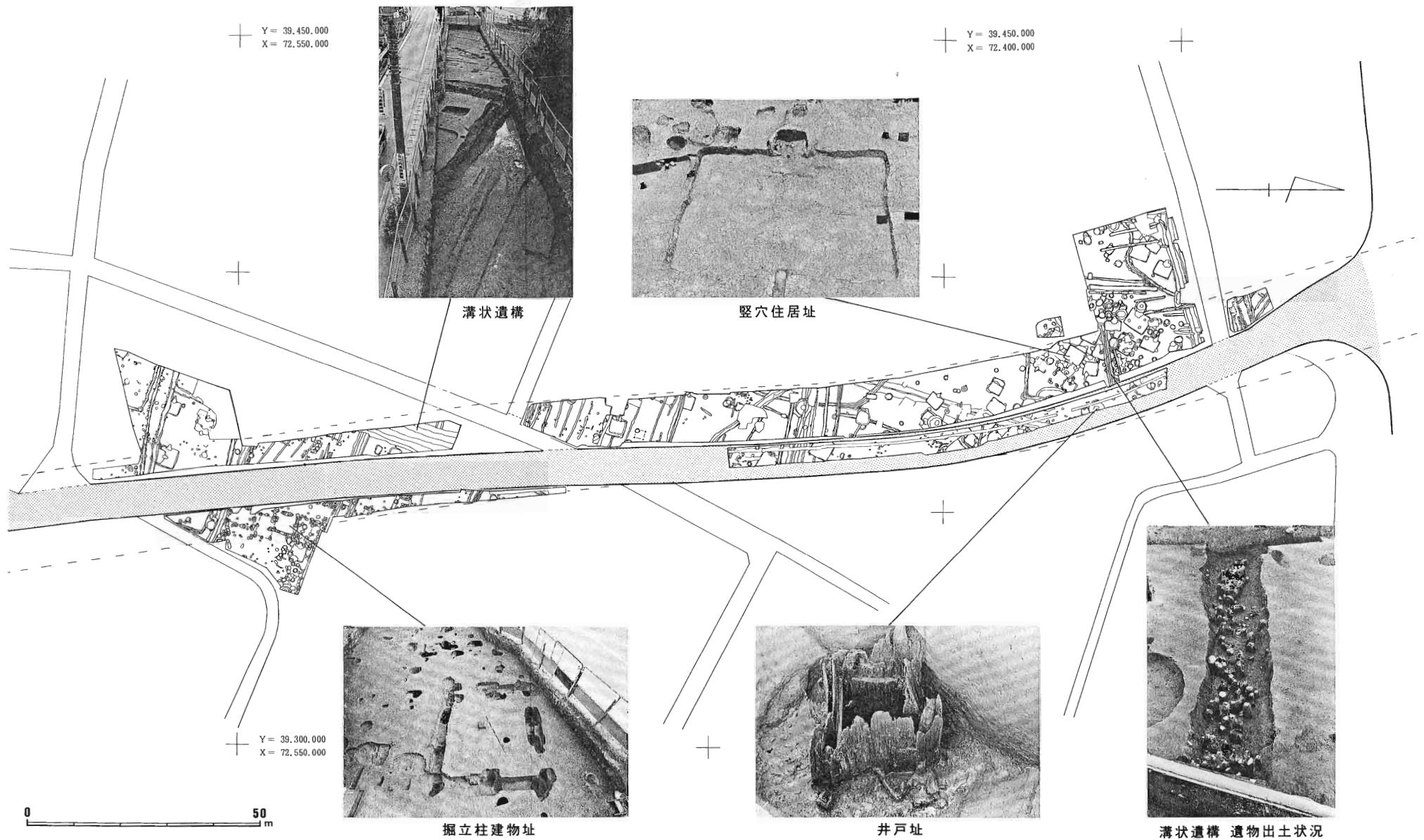
西久保土地区画整理事業に伴う本調査は、1994年8月より開始され、96年7月末を終了予定とし

て行われた。調査地周辺の現況は耕作地であり、標高5.0～6.5mでほぼ平坦な所で、東側をJR相模線、北側を新湘南バイパスが通り、西方800mには相模川支流の小出川が流れている。本遺跡は、主体は相模川下流氾濫域に形成された自然堤防上に立地しているが、北側に走っている海岸線より数えて6列目の砂丘との間に広がる低湿地もその範囲に含んでいる。

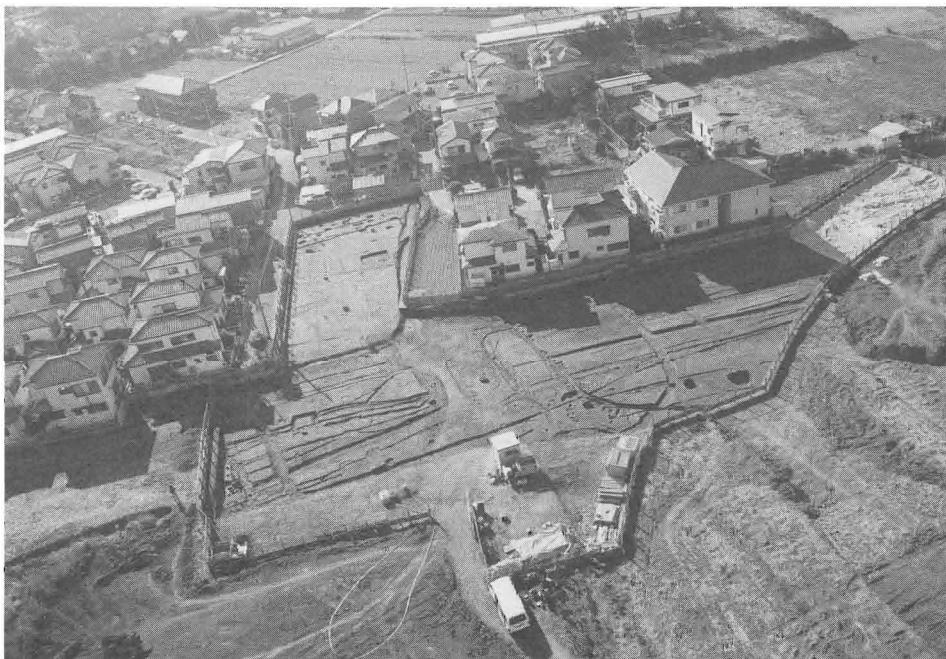
本遺跡全般としては、平安時代中期～後期の集落として位置づけることができると思うが、94年度調査（調査区南東部）により、古墳時代後期の遺構・遺物も確認され、市内の低地としては比較的早い時期から生活が営まれた地域であることもわかった。また、95年度調査の結果、調査区の中西部南側では21軒の竪穴住居を中心とした数多くの遺構群を検出したことから、平安期の集落の中心部分（居住区）を推定することができた。加えて、東部から中西部北側に及ぶ低湿地にかかる部分では、耕作痕や畝状遺構と考えられる掘り込みが広範囲で確認でき、出土した遺物や堆積土から、中世から近世前半の水田・畑地といった土地利用（生産区）の様子を伺い知ることができた。そしてこの耕作地の範囲が現在のそれとほぼ一致するこ



第2図 調査地点図



第3図 上ノ町・広町遺跡第3次調査遺構配置図



広町遺跡第4次調査空撮

とにより、中近世の土地開発の規模の大きさと、長期にわたる人々の定住生活が物語れています。この地域における古墳時代から続いてきた集落の発展は、近世前半で一応の落ち着きをみたようである。尚、96年度調査の西端部では、平安期の竪穴住居址や掘立柱址が重複して確認されており、これは隣接する西久保上ノ町遺跡へと続く遺構群として考えたい。

〈発見された遺構〉

竪穴住居址	37
掘立柱建物址	3以上
井戸址	9
土壙	51
ピット	1,413
竪穴状遺構	11
道状遺構	1
溝状遺構	505
畝状遺構	20
落込み	46
土器溜り	1
集石	1

〈出土した遺物〉

- (土 器) 土師器、須恵器、かわらけ、灰釉陶器、陶磁器
- (土製品) 管状土錘、泥面子

(石製品) 磨製石斧、紡錘車

(その他) 木製品、鉄製品、古銭、動物遺存体、種子 (宮下)

大屋敷B遺跡（第1図3）

所 在 地 茅ヶ崎市西久保字大屋敷777-1番地

調査主体 西久保大屋敷B遺跡調査団

(調査団長 岡本孝之)

調査担当者 藤井秀男

調査目的 店舗建設工事に伴う事前調査

調査期間 1995年9月5日～11月15日

調査面積 350m²

調査の概要

大屋敷B遺跡は前述の上ノ町・広町両遺跡の南側に隣接し、西久保遺跡群の中央部を占める。地勢的には全域が自然堤防上に立地し、南東部は旧河道と考えられる低湿地で境される。

上ノ町・広町両遺跡が位置する西久保北部と浜之郷・円蔵・矢畑の各地域は、市内でも調査例が多く、遺跡の状況が明らかになりつつある。今回の調査地点は、その間隙を埋め、二つの遺跡群を結びつける位置にあり、その成果が期待された。

また、本遺跡内における公共下水道敷設工事に伴う事前調査の成果や確認調査の結果からもその期待が妥当なものと予測された。

調査の結果、2期の集落址を確認した。一つは

平安時代、もう1期は弥生時代末から古墳時代初頭に属するものである。

平安時代の遺構としては、竪穴住居址が7軒、掘立柱建物址1棟のほか、溝状遺構、ピットなどが発見された。出土遺物からの検討は今後の整理作業の進行を待つが、重複関係から数代の継続が読み取れる。このことから、本遺跡がこの時代、上ノ町・広町遺跡と同一、あるいは隣接した集落を形成していたと考えられる。

本調査で特筆されるのは、弥生時代末から古墳時代初頭の集落が確認されたことである。発見された竪穴住居址は7軒で、ほかに不明確ながら2基の竪穴址がある。

調査区北東隅で確認された第14号住は焼失家屋と考えられ、壺、台付甕、高坏等の一括資料を出土した。

本遺跡周辺では、これまで、弥生時代中・後期の遺物も確認されているが、いずれも散発的なものであった。集落の成立は、本遺跡の南400mに位置する円蔵下ヶ町遺跡等で確認されている古墳時代後期まで下ると考えられていた。

今回の発見により、本遺跡の立地する自然堤防上でも古墳時代前期には集落が営まれていたことが明らかとなり、茅ヶ崎市の低地遺跡を考える上で大きな意義を持つと考えられる。早い時期の検討を目指したい。
(藤井)

まとめ

相模川によって形成された自然堤防上に位置する本遺跡群は、粗密、時代の違いはあるにせよ、ほぼ全域にわたって活動跡をみることができる。

大屋敷B遺跡において、弥生時代末～古墳時代初頭の竪穴住居址が発見されており、集落の形成



大屋敷B遺跡第14号住遺物出土状況

が認められることから、この時期には、当地域に拡がる自然堤防地形の安定を窺うことができる。ただ、上ノ町遺跡において、現段階で最も古い時期を示す弥生時代中期の土器が出土しており、今後さらに遡っていく可能性がある。

その後、古墳時代前期、後期と散発的な活動が見られるが、7世紀末から8世紀にかけて急激に集落が発達する。こうした背景には、律令体制の影響を受けて、当地での新しい展開が始まった可能性を考えることができる。自然堤防地形と後背湿地が、居住地や畑作地、さらに水田耕作などの適地として選ばれたのであろう。

中世にはいると、前半期の遺構・遺物は極端に少ない。中心となるのは、後半の遺構・遺物で、溝状遺構、土坑、集石墓などである。これらは、遺跡内に位置する16世紀中ごろに創建されたという「妙運寺」の関連性が強いと思われる。

近世においては、各地点で畠状遺構など生産跡が確認されており、農業を中心とした景観をみることができる。そのなかで、上ノ町遺跡では、多量の陶磁器を出土する溝状遺構や土坑が確認されており、屋敷の存在を感じさせる。18世紀後半から近代にかけての遺物のなかには、「焼き継ぎ」を行った陶磁器が多くみられることなど、当時の生活の一端が見える。今後、文献資料からの調査も必要であろう。

こうした自然堤防上の生活は、常に水との戦いでもあったと思われる。時代を問わず数多くの溝状遺構が発見されているが、これらは、区画機能のほか、排水などの機能を有するものが多いのであろう。また、粘土質という本地形の土質を利用して、竪穴住居址の竈がこの土で構築されていることも指摘できる。これらは、本地形における大きな特徴であろう。

ところで、小出川を挟んで西方に同じように形成されている自然堤防地形では、現在、古代の集落は確認されておらず、中世以降が中心である。このことは、地形形成の時期差を示しており、相模川の流れが東から次第に西に変化していったことを裏付けることになる。

今後、土地の成り立ちと利用について考える基本資料になると思われる。
(大村)

2. 小田原城下・欄干橋町遺跡第Ⅳ地点

山口 剛志

- 1. 所在地** 小田原市本町一丁目13-1
- 2. 調査主体** 小田原市教育委員会
- 3. 調査担当者** 山口剛志
- 4. 調査目的** 店舗併用個人住宅建設に伴う事前調査
- 5. 調査期間** 平成6年1月10日～平成6年8月24日
- 6. 調査面積** 423m²
- 7. 遺跡の立地**

小田原城下・欄干橋町遺跡は、小田原城天守閣の南東約450mのところに位置し、旧東海道である国道1号線と小田原城三の丸南堀によって区画された町屋にあたる。標高は11mを測り、海岸線までは直線距離で約400mである。本遺跡は、国道1号線沿いに延びる海岸砂丘上の微高地に立地しており、北側に隣接する三の丸遺跡より一段高いところである。

欄干橋町は、天正元年（1572）の「北条家朱印状」に初めてその名が見られることから、この頃には既に存在した町屋と考えられる。江戸時代には、本陣「伊勢屋」と旅籠10軒が存在し、小田原宿の中でも栄えていた町屋である。この区画は、本陣「伊勢屋」や薬種商の「外郎家」などの有力町人の屋敷以外は、間口3間、奥行10間程度の長方形の屋敷割であった。今回調査を行った地点は、外郎家の屋敷地にあたる（第1図）。

8. 調査の経緯

欄干橋町遺跡は、これまで3地点で調査が行われており、中・近世（16～19世紀）の遺構・遺物が多数確認されているところである。当該地に店舗併用個人住宅が建設されることになり、平成6年1月10日より小田原市教育委員会が主体となって調査を行った。

調査は、安全面を考慮して鋼矢板を調査区全域に設置した後に実施した。そして、調査区を南北に分割して便宜上北半部をI区、南半部をII区と仮称し、北半部のI区から調査を開始した。

現在は、平成9年度の報告書刊行に向けて遺物



第1図 調査地点位置図 (1/10,000)

整理を実施中であり、今回はその中間報告という形で発表を行いたい。

9. 調査の概要

(1) 検出された遺構

本地点から検出された遺構は、石組遺構37、土坑218、方形堅穴遺構3、井戸2、溝14、柱穴94、礎石列4、硬化面1である。以下、主な遺構・遺物について説明する（第2図）。

a. 石組遺構

石組遺構は、37基が検出されている。この内、方形石組土坑は75号（江戸時代）と236・283・299・300号（北条時代）、円形石組土坑は207・209・227号（江戸時代）と239・321号（北条時代）である。これらの分布は、75号を除いて東海道に面した調査区南半部に集中している。

207号遺構 F-4グリッドで検出された、江戸時代の円形石組土坑である。規模は、東西1.7m、南北1.8m、深さ45cmを測る。石組は、壁際に沿って大形の石が二段に積まれ、底面には直径10cm前後の小石が敷き詰められている。これらの構造から水路構と推定され、溝である217号と共に

に機能していたと考えられる。209・227号も、同様な機能を有した遺構と考えられる。

283号遺構 E-3・4グリッドで検出された北条時代の方形石組遺構である。平面形は長方形を呈し、規模は東西2m、南北1.7m、深さ1mを測る。石組は、壁際に沿って最高10段まで丁寧に石が積まれている。

b. 土坑

90号遺構 B・C-6グリッドにおいて西半部が検出された北条時代の土坑である。平面形は円形を基調としており、規模は東西1.4m以上、南北2.5m、深さ60cmを測る。

94号遺構 B・C-5・6グリッドで検出された。平面形は橢円形を呈し、規模は東西1.4m、南北1.9m、深さ1.5mを測る北条時代の深い土坑である。

129号遺構 A・B-4グリッドで検出された北条時代の長方形を呈する土坑である。規模は、東西1.2m、南北4.6m、深さ1.9mを測る大形のものである。

316号遺構 F・G-3グリッドで検出された江戸時代の隅丸長方形を呈する土坑である。規模は、東西0.9m、南北2.1m、深さ90cmを測る。

61号遺構 A・B-5・6グリッドで検出された江戸時代の土坑である。北半部の壁面及び遺構上部は、搅乱を受けているため遺存状態は良くない。平面形は隅丸方形を呈し、規模は東西2.5m、南北2m（現存値）、深さ55cmを測る。

292号遺構 F-4グリッドで検出された江戸時代の土坑である。平面形は円形を呈し、規模は直径1.2m、深さ30cmを測る。覆土は、水中堆積した細かい砂質の灰褐色土で構成され、中央部には木桶などが埋設されていたと推定される。また、底面中央には、「水不能漂守」と墨書された拳大的石が埋納されていた。本遺構は水路柵と推定され、溝である280・307号と共に機能していたと考えられる。

c. 方形竪穴遺構

333号遺構 F・G-2・3グリッドより検出され、北条時代に属する方形竪穴遺構が2基重複していた。平面形はいずれも長方形を呈し、規模は、東側が東西3.2m、南北3m、深さ1.3m、

西側が東西2.8m、南北2.9m、深さ1.3mを測る。底面には、壁際に沿って柱穴が東側のもので19本、西側のもので11本それぞれ検出されている。2基の重複関係は、調査時に確認できなかつたが、出土遺物から両者の時期差は小さいと考えられる。

d. 井戸

181号遺構 C-3グリッドの60号底面から検出された北条時代の井戸である。直径2.5mを測るほぼ円形の掘り込みである。地表面から6m掘り下げを行ったが、底面は検出できなかった。本遺構は、方形竪穴遺構である60号より古い。

e. 溝

318号遺構 E～G-2・3グリッドにおいて検出された北条時代の溝である。南側から北側へ延びた後、西側へ約100度の角度で屈曲しているが、屈曲部は近代の井戸である202号に切られている。長さ12.8m、幅50cm、深さ85cmを測る。

f. 柱穴

柱穴は、94基検出されているが、明確に柱穴列などのように等間隔に並ぶものは現段階では確認されていない。柱穴の中には、278・384号などのように底面に根石を設けているものが認められる。また、F・G-5・6グリッドは柱穴が集中して検出されており、建物の存在が推定される。

(2) 検出された遺物

遺物は、土師器、須恵器、陶磁器、瓦、かわらけ、漆製品、木製品、石製品、鉄製品、銅製品、銅銭などが出土している。ここでは、16～17世紀前葉の遺物について説明する。

小田原IIa期古段階 この時期は、90号出土の遺物がこれにあたる（第3図上段）。1は明の白磁皿、2は瀬戸・美濃の灰釉腰折皿、3は厚手のかわらけでロクロ成形、4は小田原城では数少ない出土である内耳鍋である。これら的一群は、2・3のように古い段階のものが含まれるが、全体の組成から16世紀第1四半期としておきたい。

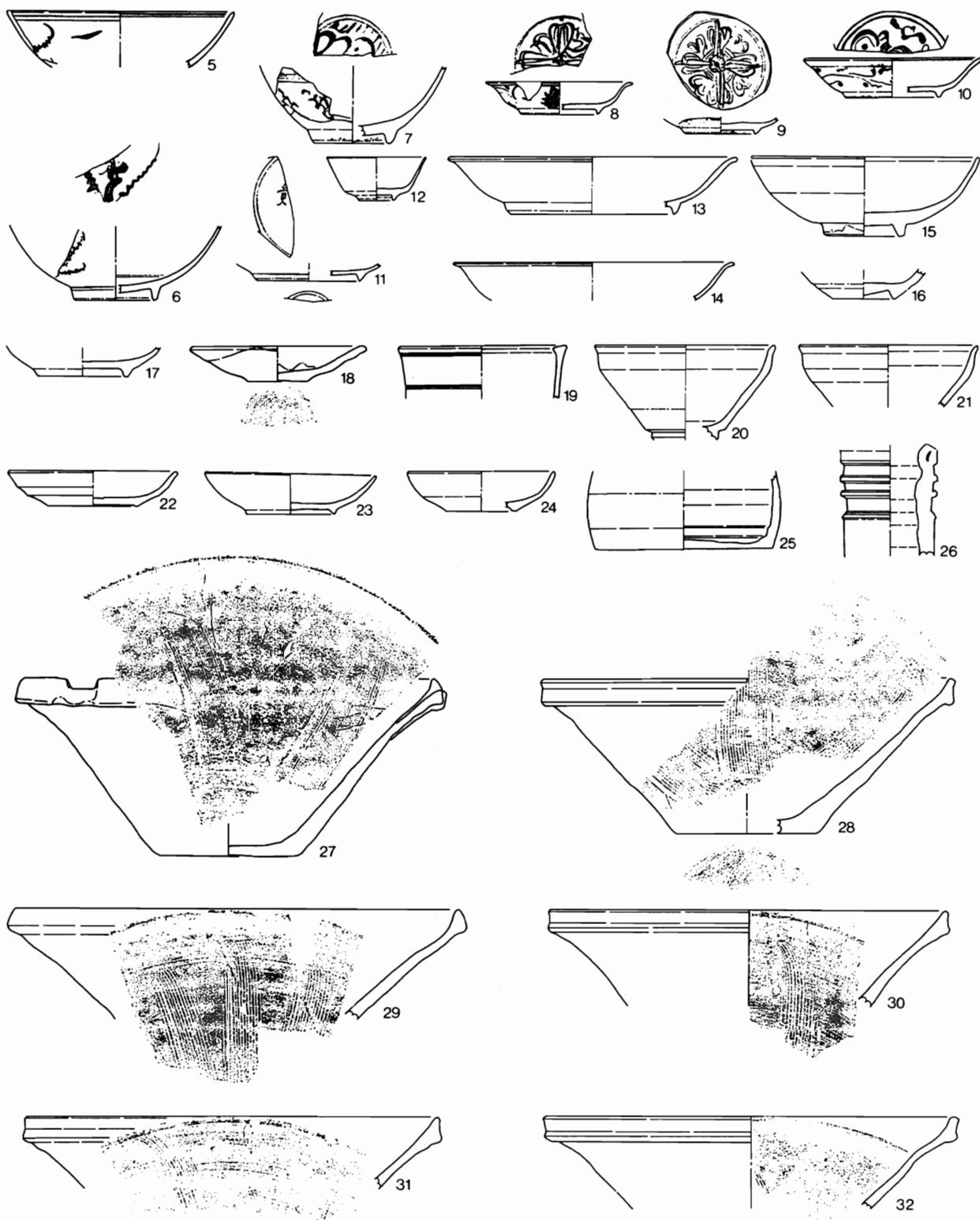
小田原IIa期中段階 333号出土の遺物がこの時期にあたる（第3図下段・第4図上段）。5～16は明の製品で、5～7が染付碗、8～11が染付皿、12が白磁の小壺で見込は蛇ノ目釉剥ぎ、13・14は白磁皿、15は青磁碗、16は器種不明の青磁である。



第2図 遺構全体図



90号遺構 (II a 期古段階)



0 10cm

333号遺構 (II a 期中段階)

第3図 小田原 II a 期古・中段階の遺物 (1/4)

17～32は瀬戸・美濃の製品で、17が灰釉皿、18が底部糸切りの縁釉皿、19が灰釉の香炉、20・21が天目碗で、20は高台周辺には鋳釉が施されている。22～24が鉄釉の丸皿で、22・24が削り込み高台、25が鉄釉の徳利で底部周辺に鋳釉が施されている。26は鋳釉が施された器種不明の製品である。27～32は擂鉢で27・28・32がやや新しく、29～31がやや古めのタイプである。33は常滑の甕、34・35は産地不明の甕または壺と考えられる。

36～54はかわらけで、36～51がロクロ成形、52～54が手づくね成形である。口径10cm以上のロクロ成形のものは、底部が高台状に造られた特徴的なもので、36～45のような底部から大きく外に開き、口縁部が内湾ぎみに立ち上がるものと、46～48のように口縁部が外反するものとの2タイプが認められる。55は非常に薄い造りの羽釜である。

333号は2基の重複であることから、これら的一群を検討する上でこの点を考慮しなければならないが、16世紀第2四半期と考えておきたい。

小田原II b期 94・129号出土の一群がこの時期にあたる。

94号は、第4図下段に示したもので、56が明の染付皿でいわゆる万暦様式、57～60が瀬戸・美濃の製品である。57が削り込み高台の鉄釉皿、58が鉄釉の徳利の口縁部、59・60が擂鉢である。61～81はかわらけで、61～78がロクロ成形、79～81が手づくね成形である。ロクロ成形は、65など器壁が外反するもの、66など器壁が直線的に立ち上がるものの、78など器壁がやや丸みをもって立ち上がるものとの3タイプが認められる。

129号は、第5図上段に示したもので、82・83が明の染付、84が瀬戸・美濃の香炉である。85が産地不明の銅緑釉の蓋であるが、後世の混入の可能性がある。86～88が瀬戸・美濃の擂鉢である。89～98はロクロ成形のかわらけで、89～92のように器壁がやや丸みをもって立ち上がるものの、93など器壁が直線的に立ち上がるものの、97など器壁が外反するものとの3タイプがある。

これらの一群は、16世紀第4四半期に属する。

小田原III a期 この時期のものは、第5図中段に示した316号の一群がこれにあたる。99～101は唐津の製品で、99・100が灰釉の皿、101が口縁部

波縁の灰釉皿である。102は灰釉皿、103は鉄釉の徳利で、いずれも瀬戸・美濃の製品である。104は産地不明の大形の天目碗である。105～109はロクロ成形のかわらけで、II b期のものと比べて厚手となり、器形は106～109のように器壁中央で屈曲するものが主体となる。

これら的一群は、唐津の製品が含まれることから17世紀初頭であると考えられる。

小田原III b期 この時期は、第5図下段に示した61号の一群がこれにあたる。110は明の染付皿、111～115は瀬戸・美濃の製品で、111が天目碗、112が鉄釉の蓋、113が志野皿、114が志野の向付である。115は織部の鉢で、61号と70・106号との遺構間接合資料である。116～125はロクロ成形のかわらけで、III a期と同じく厚手のもので、器形は器壁がやや外反するタイプである。

これら的一群は、志野とともに織部が含まれることから、17世紀前葉に位置付けられる。

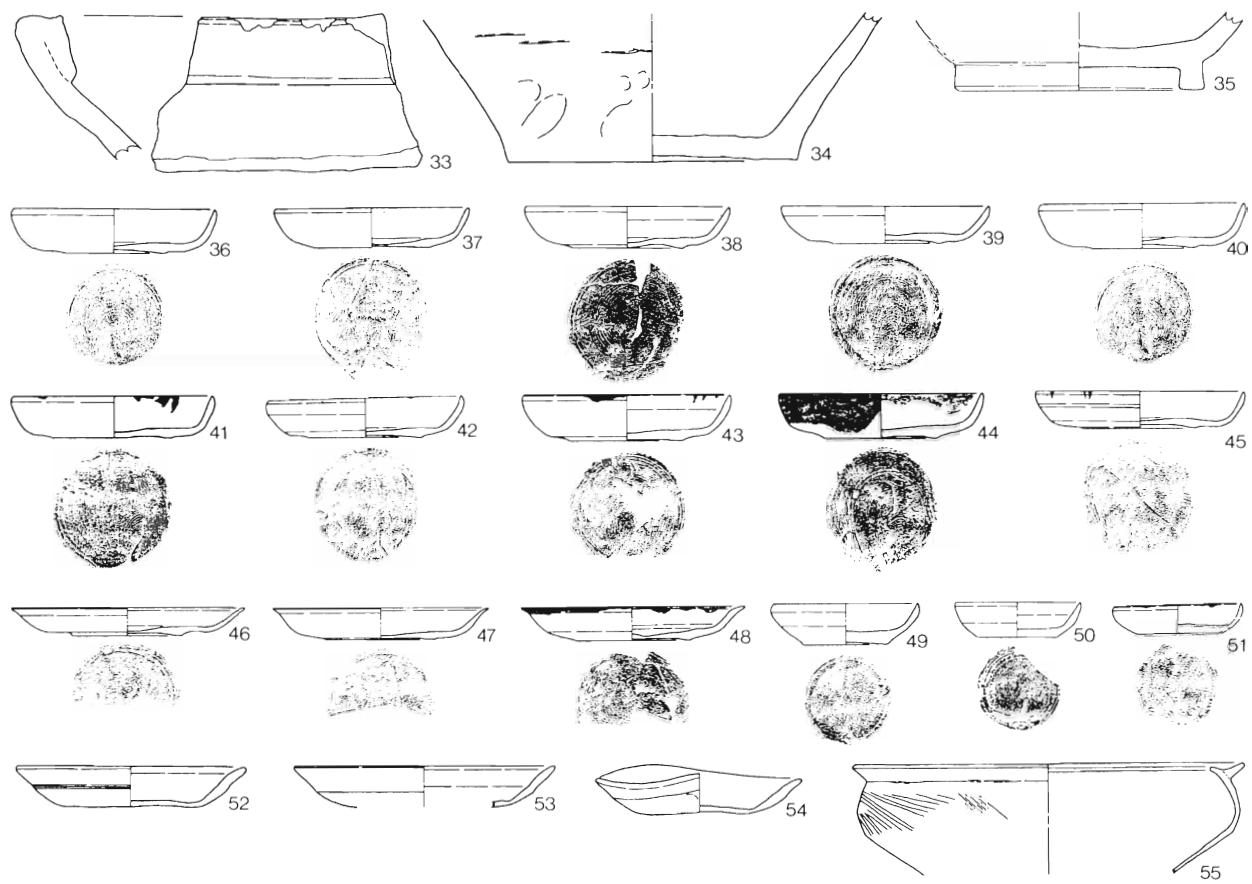
10. まとめ

本地点の特徴としては、まず、江戸時代の土坑が北半部に集中していることがあげられる。この部分は、敷地内で最も東海道から離れた三の丸堀側にあたる。このことから、江戸時代の町人地は、東海道沿いの表側に屋敷、奥側に庭という土地利用形態が想定され、庭にゴミ処理用の土坑が構築されていたと考えられる。

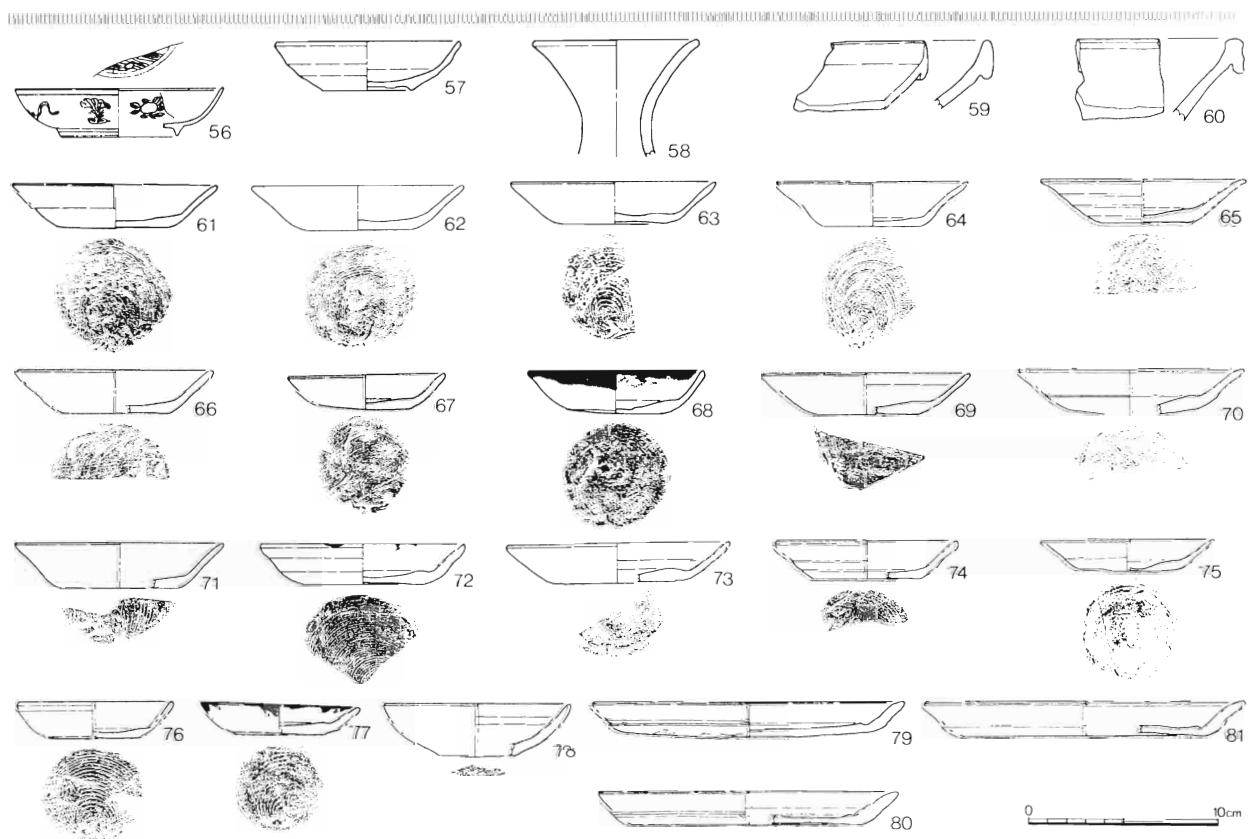
次に、江戸時代の井戸が検出されなかった点をあげることができる。本地点では、207・292号などが水路井と推定されることから、これらが小田原用水を屋敷内に引き込んだ施設である可能性が高い。このため、敷地内に井戸を設けることがなかったと推定される。

遺物では、総数373もの遺構が重複して検出されたことにより、これらの新旧関係を加味して遺物の変遷を検討することによって、小田原編年がより詳細な内容になるとを考えている。また、これまでには、小田原III a・b期のかわらけ資料に乏しかったが、316・61号から該期の資料が出土したことによって、かわらけの空白時期も明らかになりつつある。

これらの詳細については、来年度刊行予定の報告書で明らかにしたいと考えている。

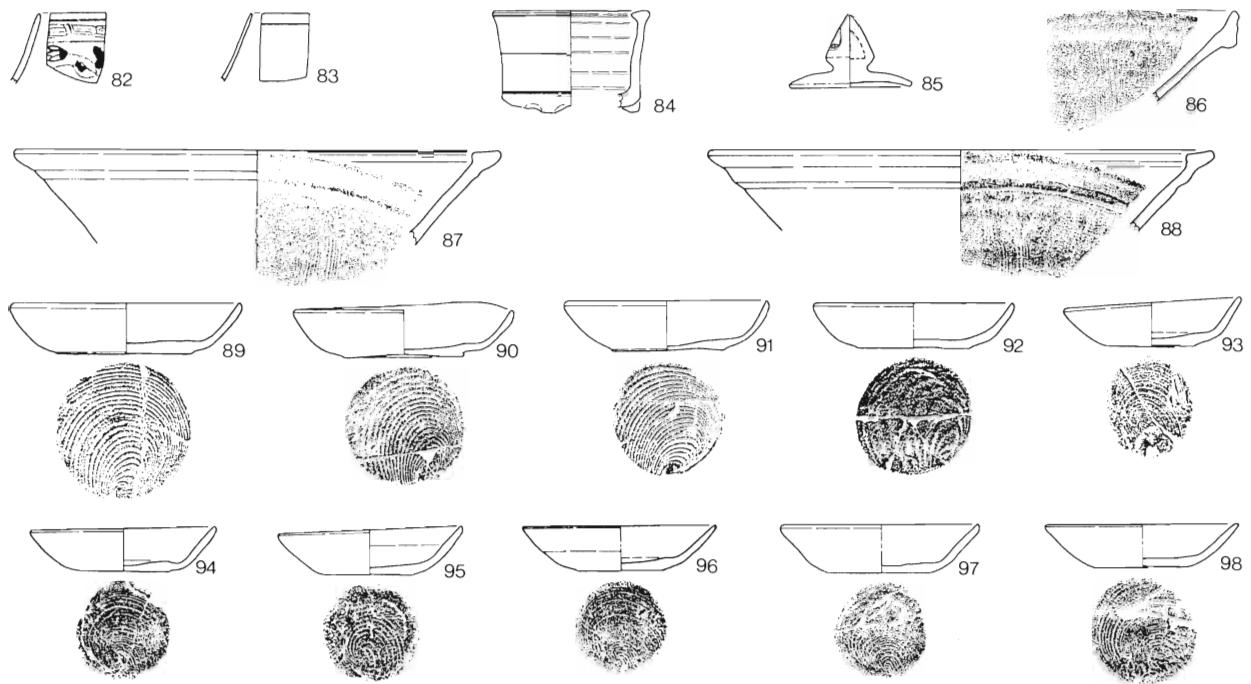


333号遺構（II a 期中段階）

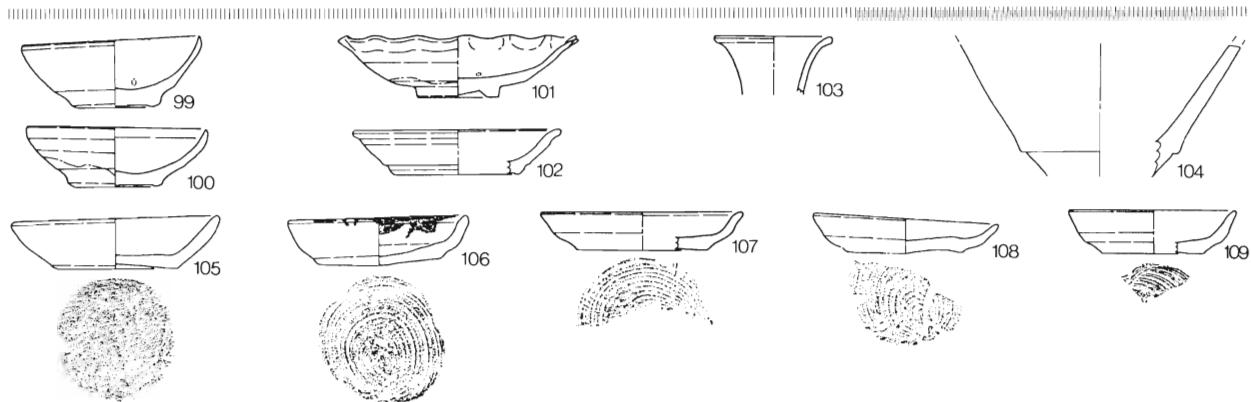


94号遺構（II b 期）

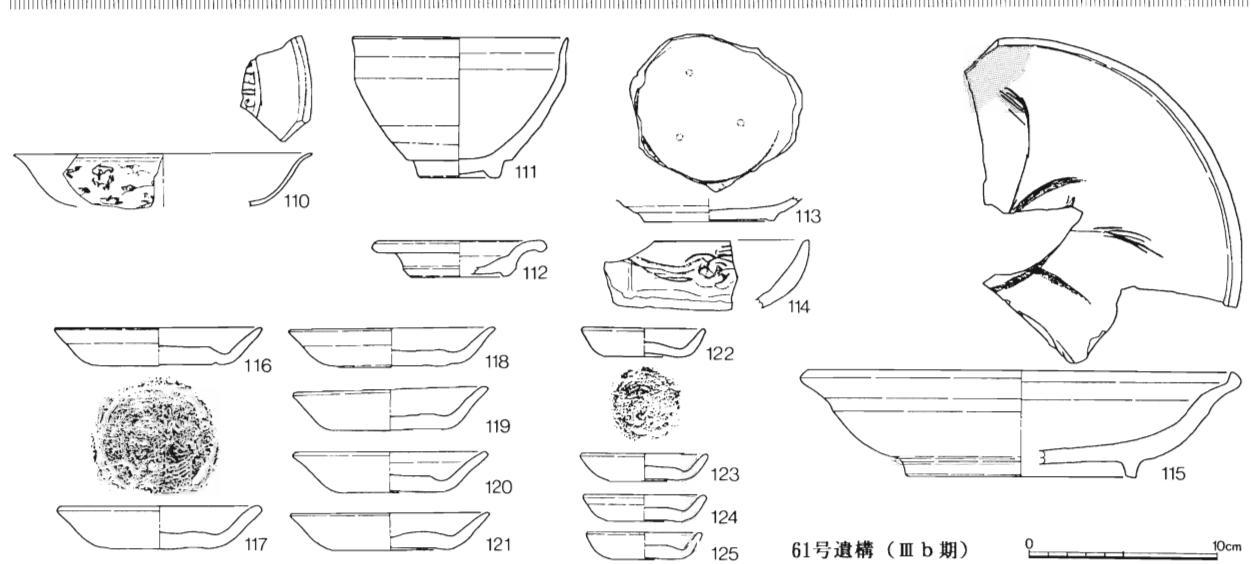
第4図 小田原II a 期中段階・II b 期の遺物 (1/4)



129号遺構（II b期）



316号遺構（III a期）



第5図 小田原II b・III a・III b期の遺物（1/4）

3. 海老名市No.47遺跡

瀬田 哲夫

1. 所在地 海老名市河原口1109-1番外
2. 調査主体 海老名市No.47遺跡発掘調査団
(団長 斎木秀雄)
3. 調査担当者 佐藤仁彦・瀬田哲夫
4. 調査目的 団地建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
5. 調査期間 平成7年3月1日～11月11日
6. 調査面積 2,500m²
7. 遺跡の立地

海老名市は神奈川県の中央部、相模川の中～下流域左岸に位置しており、市域の面積は約25.20km²である。地形は南北方向へのびる座間丘陵・相模原台地と相模川の沖積低地からなり、この低地は現在も水田地帯として利用されている。

調査地点はJR厚木駅の北方約350mに位置し、字名は四大縄通り町である。約700m西では相模川が南流し、調査地点はその自然堤防からやや下がった後背湿地に立地し、現地表の海拔は約21mである。この低地は「海老名耕地」と呼ばれ、地割や字名などから古代の条里制水田遺構の存在が推定されている地域もあるが、発掘調査事例は皆無で考古学的実態は明らかではない。

調査地点の北東約2kmの台地上には奈良時代に国分寺が造営され、相模における中心的役割を担っていたことと考えられる。調査地点の北西約800mの相模川自然堤防上には式内社有鹿神社が鎮座する。ここは相模川・中津川・小鮎川が合流する水運の要衝であり、中世海老名氏の居館もこの付近(字御屋敷)にあったと推定されている。

8. 調査の経緯

本調査は県住宅供給公社団地、及び県営団地建設に伴う発掘調査で、平成6年7月の県教育委員会による遺跡範囲確認調査の結果、中世を中心とする埋蔵文化財が所在する可能性が高いと判断され、新しく周知された。同年12月から敷地内に10×6mを基準とするトレンチを数カ所設定し、予備調査が行われ、平成7年3月1日から11月11日にかけて本調査が実施された。調査区は建物範囲



第1図 遺跡位置図

2カ所、駐車場部分1カ所の計3カ所であり、北からI区、II区、III区と呼称した。

9. 調査の概要

調査敷地内にはかつて相模線厚木駅が所在し、旧駅舎の基礎杭等により部分的に搅乱を受けている。現地表下50cm(海拔20.6m)前後までは現代客土である。調査はこの客土層を重機により除去し、以下は人力により掘削を行った。検出された遺構は4時期の水田址と、これに先行する時期の溝である。以下、第1面～第5面において検出された遺構についての概略を記していく。

(第1面)

現代客土を除去すると50cm程の厚さに堆積する砂礫層が検出される。これは第1面の水田址を覆つており、相模川の氾濫により運ばれた砂礫と考えられる。第1面は砂礫の混じるオリーブ黒色粘土により構成され、現地表下1.0m(海拔20.2m)前後で検出されている。検出された遺構は56枚の水田址であり、畦畔、水口、及び東西道路(大畦畔)が確認されている。

III区南部では幅1.5～2.0mの東西道路を検出している。この道路の中心から北へ約105mの地点では、予備調査時に幅1.5m程の東西道路が確

認されている。このふたつの道路はほぼ並走し、現在の町割りとほぼ一致する。東西道路の断面は台形状を呈し、高さは40cm前後である。また、3カ所に水口を確認している。

畦畔は断面台形状を呈し、幅0.5~1.0m、高さ約20cmを測る。水口は40カ所で確認されている。

検出された水田のうち東西・南北規模が確認されたのは10枚である。

第1面の年代は18世紀中葉～近代初頭と考えられる。

(第2面)

第1面の下30cm前後、現地表下1.3m(海拔19.9m)程で第2面の水田址、畦畔、東西道路が検出された。第2面は粘性のやや強いオリーブ黒色粘土により構成されている。遺構配置は第1面とほぼ同様だが、水田の規模がやや大きく、水田面には足跡状の窪みを多数伴っている。この窪みは主に東西方向に列をなし、覆土は宝永4年(1707)に噴火した富士山の火山灰と考えられる。東西道路は第1面時より北へ1.0m前後ずれている。断面は台形状を呈し、幅1.8~2.2m、高さ40cm前後である。4カ所で水口を確認している。

畦畔は削平を受け、高まりや水口の遺存状況は良好ではない。畦畔部分は足跡状の窪みが検出されず、幅は0.3~1.0m、高さは良好なもので20cm程である。

検出された36枚の水田のうち、東西・南北規模が確認できたものは6枚である。出土遺物にはキセルの吸口や雁首、砥石等が含まれている。

第2面の年代は近世初頭～中頃、1707年の富士山火山灰の影響により廃絶されたと考えられる。

(第3面)

第2面の下20cm前後、現地表下1.5m(海拔19.7m)程で第3面の水田址、畦畔、及び東西道路が検出された。第3面の構成土は灰白色粒子(0.5~2.5cm大)の混入した粘性の強いオリーブ黒色粘土である。

遺構配置は第2面とほぼ同様だが、南北畦畔がやや東方向にずれている。畦畔の断面は台形状を呈し、高さ10~15cm、幅0.3~0.9mを測る。水口は東西道路際に3カ所、南北畦畔の中央部に1カ所確認されている。

東西道路は断面台形状を呈し、幅2.0~2.5m、高さ30cm前後である。

検出された30枚の水田のうち、東西・南北規模が確認できたものは6枚である。

第3面の年代は戦国期を中心とした時期と考えられる。

(第4 a面)

第3面の下30cm前後、現地表下1.8m(海拔19.4m)程で第4面を構成するオリーブ黒色粘土質シルトを検出した。この層には全体に灰～灰白色の風化スコリアが観察される。第4面では新旧2時期の遺構群が確認され、新期を第4a面、旧期を第4b面と呼称した。

第4a面で検出された遺構は水田址、畦畔、及び東西道路である。水口は確認されていない。遺構配置は第3面とほぼ同様だが、畦畔がかなり直線を意識して造られている。畦畔の断面は台形状を呈し、高さ10~15cm、幅0.6~1.0mを測る。

東西道路は断面台形状を呈し、高さは30cm程、幅は西半部で約3.0m、東半部で約5.0mを測り、調査区中央部やや西よりから幅が広くなる。

検出された30枚の水田のうち、東西・南北規模が確認できたものは6枚である。

第4a面の年代は13世紀代と考えられる。

(第4 b面)

第4b面では東西溝：6条、南北溝：4条、土壙：3基が検出された。遺構配置は、並走する2条の東西溝と、これらとほぼ直交関係にある南北溝が、東西溝の北・南側に配されている。

東西溝はⅢ区において約53mにわたり検出され、更に調査区外へと続く。北側の東西溝(溝A)は上幅0.7~1.2m、下幅0.5~1.0m、確認面からの深さ10~20cmであり、溝底の高低差は西側に比べ東側が20cm程深い。南側の東西溝(溝B)は上幅0.7~1.5m、下幅0.5~1.2m、確認面からの深さ20~30cmであるが、東部では上幅50cm前後と狭くなる。溝底の高低差は東側が20cm程深い。溝A・Bは芯～芯で1.5~2.0mの距離を有するが、両溝の東部と溝Aの西側では掘り直しが確認されている。

東西溝の北側から検出された2条の南北溝(以下、西側を溝C、東側を溝D)は、芯～芯距離約

33mで並走する。溝Cは南北約7mを確認し、更に調査区外へ続く。上幅30~60cm、下幅20~50cm、確認面からの深さは10~30cmであり、溝底は南へ緩やかに傾斜している。溝Dは南北約18mを確認し、更に調査区外へ続く。上幅60~90cm、下幅50~80cm、確認面からの深さは10~30cmであり、溝底は南へ緩やかに傾斜している。溝C・Dの続きはI区からも検出され、緩やかに南流している。出土遺物は数点の礫のみである。両溝の芯～芯距離は調査区北部で31.7m、南部で32.5mを測る。調査では南北約20mを検出し、さらに北へと続く。

東西溝の南側から検出された2条の南北溝（以下、西側を溝E、東側を溝F）は、芯～芯距離約32mで並走している。溝Eは南北約5mを確認し、更に調査区南外へ続く。上幅50cm前後、下幅40cm前後、確認面からの深さは10cm前後であり、南へ緩やかに傾斜している。溝Fは南北約2mを確認し、更に南へ続く。上幅60cm前後、下幅50cm前後、確認面からの深さは15cm前後であり、南へ緩やかに傾斜している。溝C、D、Fは東西溝と交差するが、溝Eの北端部には50cm程の空間が確認されている。

土壙はⅢ区の西端で2基検出された。これらは切り合い関係にあり、新しいものを土壙A、他方を土壙Bと称する。土壙Aの平面は隅丸方形を呈し、長軸120cm前後、短軸70cm前後、確認面からの深さ10cm程である。土壙Bの平面は不整円形を呈し、直径1.1m前後、確認面からの深さ30cm程である。I区では土壙は1基のみ調査区のほぼ中央で検出している。平面は橢円形を呈し、上幅60cm前後、下幅30cm前後を測る。確認面からの深さは50cm程である。他の関連する遺構は確認されず、性格は不明である。土壙からの出土遺物はない。

第4b面の年代を特定することは困難であり、整理作業の課題としたい。

（第5面）

第4面の調査終了後、トレンチを数カ所設定し、海拔18.5m（現地表下2.5m）前後まで、土層観察、及び遺構確認を行った。その結果、第4面の基盤層であるオリーブ黒色（10Y3/1）粘土質シルトは15~20cm程堆積し、以下、オリーブ黒色（7.5Y3/1）粘土質シルト、オリーブ黒色（7.5Y

3/2）粘土質シルト、黒色（5Y2/1）泥炭質粘土、黒色（7.5Y2/1）泥炭質粘土が各5cm前後の厚さでほぼ水平な堆積を示し（調査区東側が西側に比べ10cm程低い）、遺構は確認されなかった。また、予備調査、及び本調査におけるプラント・オパール分析では、黒色（5Y2/1）泥炭質粘土より上位の堆積層からイネのプラント・オパールが確認されている。このため黒色（5Y2/1）泥炭質粘土上面を第5面と呼称し、I区西半部、Ⅲ区東半部を平面的に掘り広げて調査を行った。

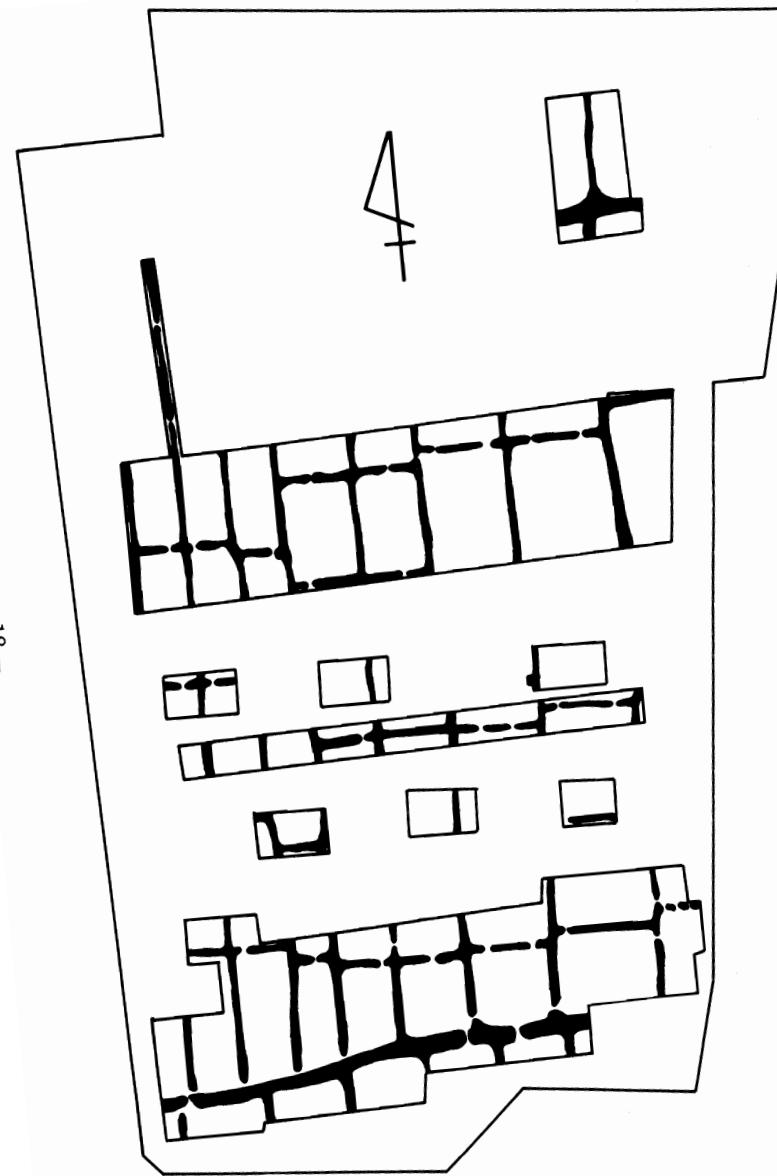
第5面では遺構は確認されず、自然地形による窪みを検出した。出土遺物は弥生式土器、礫、木片である。黒色（5Y2/1）泥炭質粘土は西～東、北～南へとごく緩やかに傾斜している。

第5面の年代を特定することは困難であり、整理作業の課題としたい。

10. まとめ

今回の調査では4時期の水田址と、それに先行する溝を確認することができた。しかし、限られた面積での調査であり、また、水田址という遺構の性格上、出土遺物が少なく年代決定には困難を伴っている。本調査では各層位のテフラの同定、及びプラント・オパール分析等を依頼し、考古学的調査の成果との検討を行う予定である。

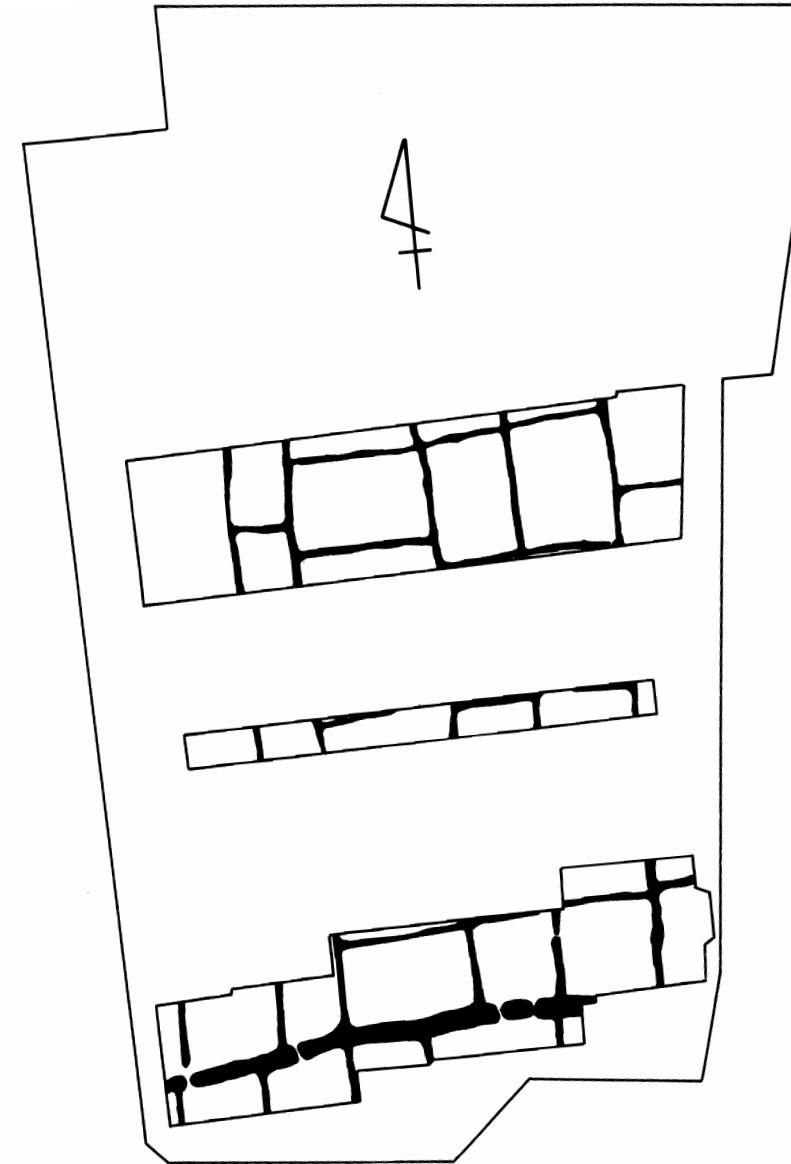
現在は整理作業の途中であり、詳細な検討は今後の課題としたい。今回の調査は神奈川県下において極めて例の少ない水田址の調査であり、また、古代の条里制水田遺構の存在が推定されている地域の調査でもあり、本遺跡の考古学的価値は非常に大きいといえる。



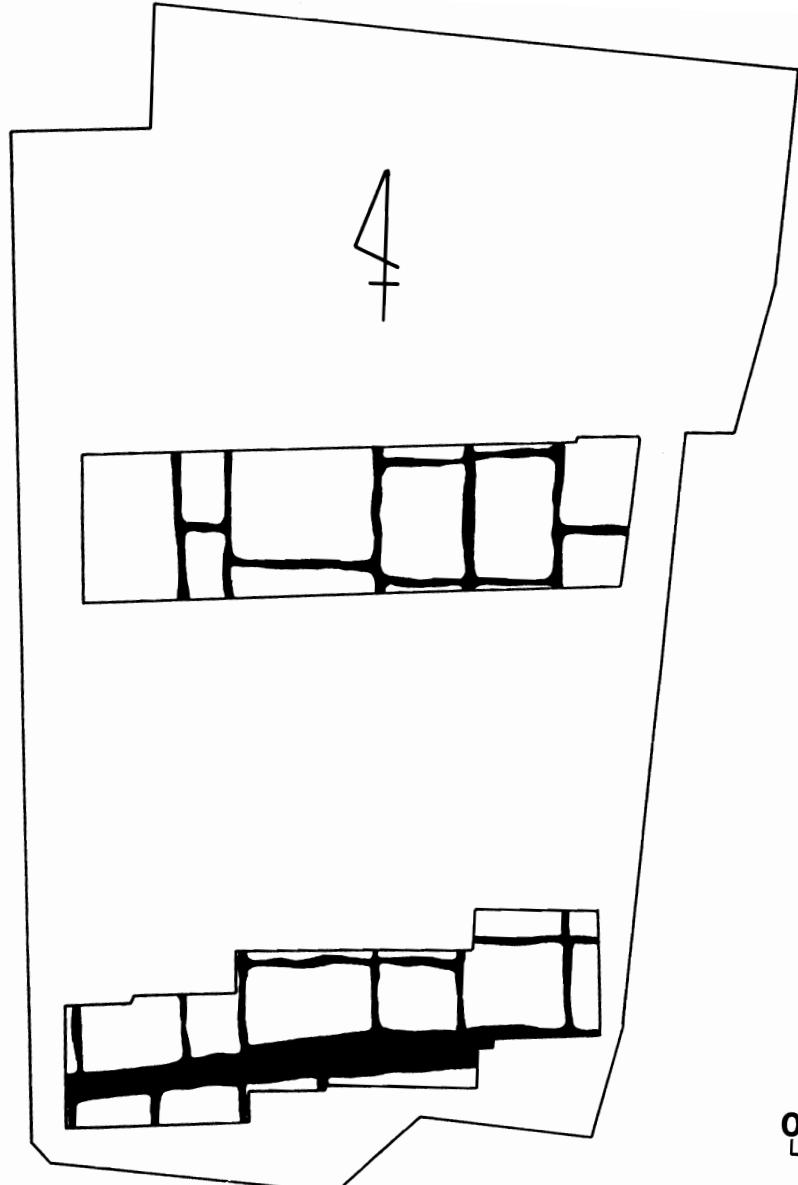
〈第1面〉

0 20m

第2図 遺構概念図（1）



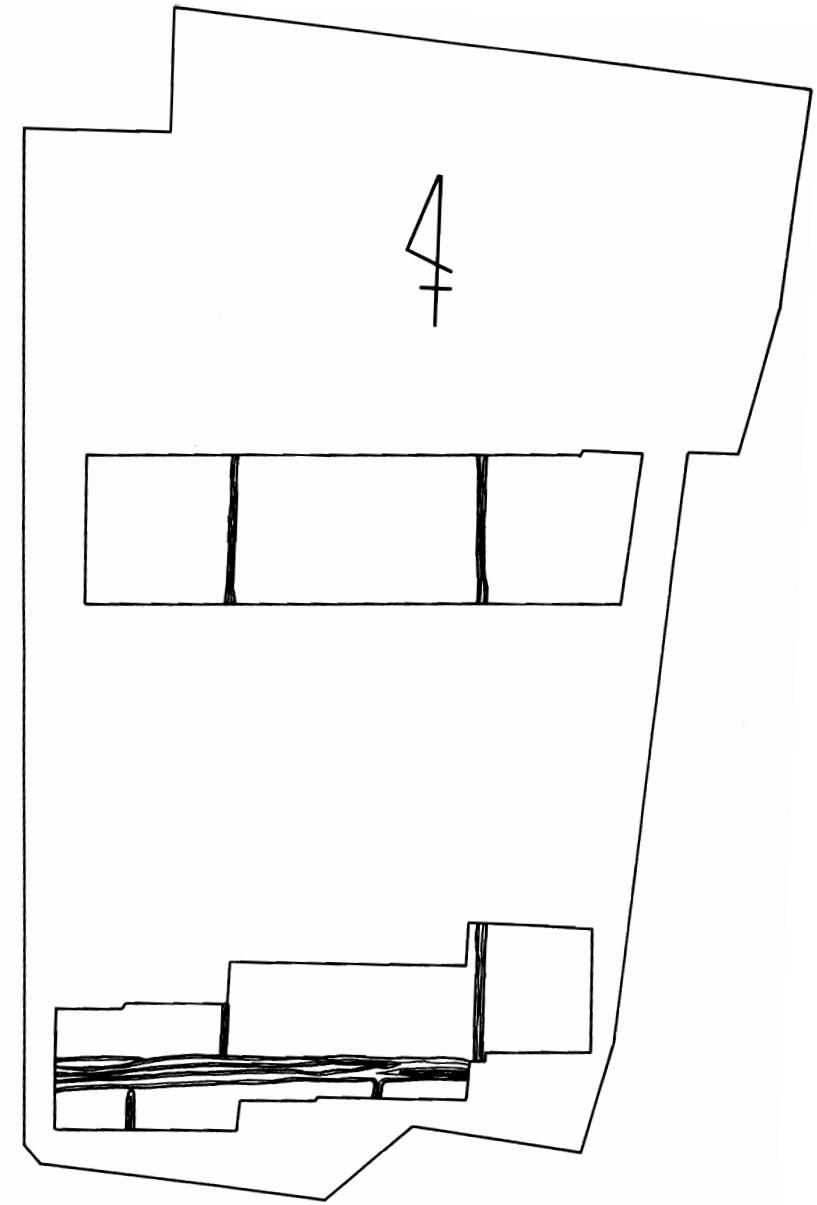
〈第2面〉



<第4 a面>

0 20m

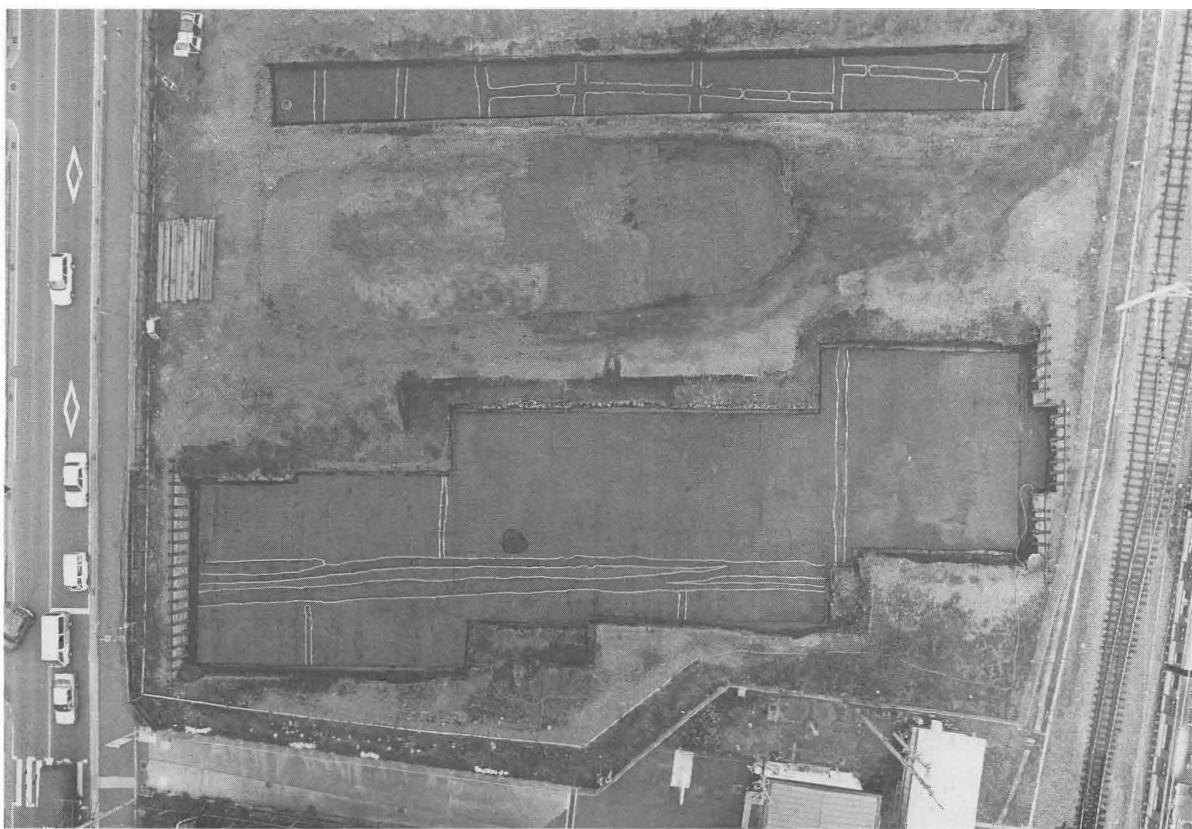
第3図 遺構概念図（2）



<第4 b面>



▲ 第2面 空撮 相模川を望む（東から）



▲ II区第1面（上）、III区第4b面（下）空撮（上が北）

ほうじょうこまちていあと やすとき ときよりてい
4. 鎌倉市北条小町邸跡（泰時・時頼邸）

馬渕 和雄

- 1. 所在地** 鎌倉市雪ノ下一丁目377番7
- 2. 調査主体** 北条小町邸跡発掘調査団
鎌倉市教育委員会
- 3. 調査担当者** 馬渕和雄
- 4. 調査目的** 店舗併用住宅建設にともなう事前調査
- 5. 調査期間** '94年12月1日～'95年2月28日
- 6. 調査面積** 117m²
- 7. 遺跡の立地**

鶴岡八幡宮前面の若宮大路東側は、県遺跡台帳に「北条小町邸跡（泰時・時頼邸）」（No.282）として登録されている。この遺跡は西辺を若宮大路、北辺を横大路、東辺を小町大路に囲まれた一辺約200mほどの方形区画で、嘉禎二年（1236）以後、鎌倉幕府の所在地であった可能性があるほか、執権泰時や時頼らの正亭のあった場所ともいわれている。調査地点はこの区画の一角にあり、鶴岡八幡宮社頭から50mほど南で、若宮大路東側に臨む。中世都市鎌倉の中核中の中核に位置する東といってよい。

この並びはすでに何度か調査されており、木枠を持つ大路側溝が続くことが確認されている。本地点の南約100mにある雪ノ下一丁目371番1地点からは、「一丈伊北太郎跡」「一丈南くにの井の四郎入道跡」と書かれた2点の人名木簡が出土した。これは大路側溝の作事を、幕府が御家人に命じた担当地点の表示札で、「御家人役」の具体的資料として注目を集めた（馬渕『北条泰時・時頼邸跡 雪ノ下一丁目371番1地点』鎌倉市教育委員会1985ほか）。

大路反対側でも側溝の木枠が発見されており、これによって大路の幅が約33mであることがほぼ確実となった（馬渕「北条時房・顯時邸跡 雪ノ下一丁目233番9地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』3）。

8. 調査の経緯

建築面積117m²のうち店舗部分が65m²、自己用住宅部分が52m²である。そこで前者を事業者負担



第1図 調査地点位置図

による委託調査として発掘調査団が、後者を国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が調査した。それぞれの調査期間については全体を面積比と応分に分割することとし、前者を'94年12月1日から'95年1月19日、後者を同年1月20日から2月28日までとした。また残土の仮置き場を確保するため、調査区を両者の面積に応じて二分割した。

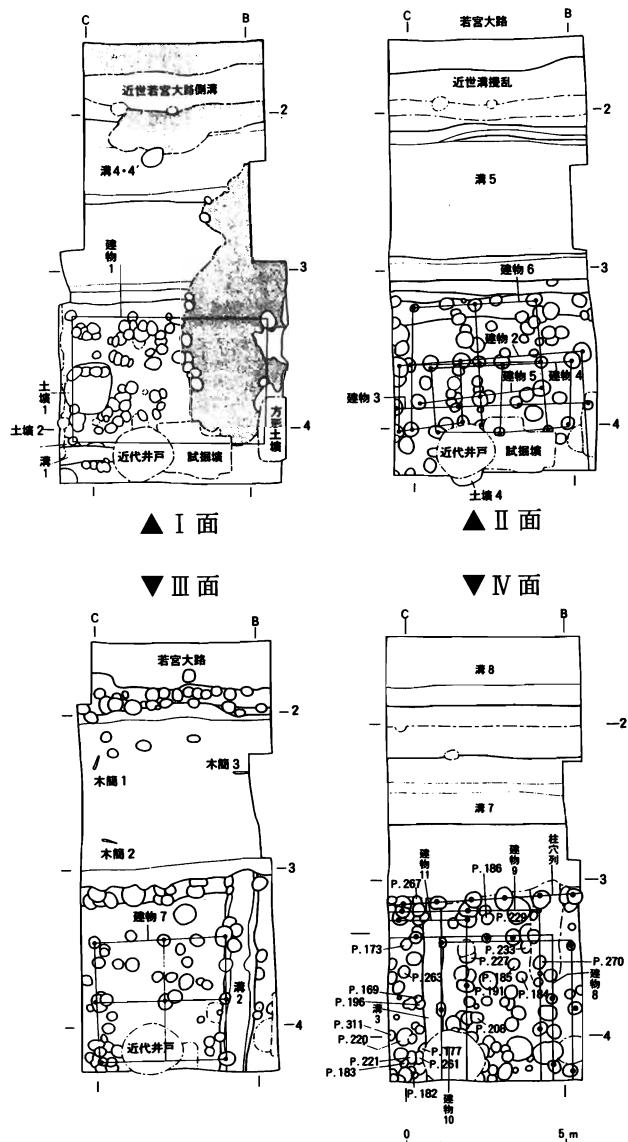
9. 調査の概要

遺構面は基本的に4枚に分けられる。すべて中世に属する。どの面も西側には若宮大路側溝が南北に走り、大路そのものも西壁際に確認できた。また、東半分は平坦な生活面で、建物や土壌などが認められる。近世以降の面は後世の削平を受け残っておらず、井戸など深い掘方を持つ遺構のみ中世I面において検出した。

I面 海抜8.6m前後にある。建物1棟・土壙3基・若宮大路側溝を検出。大路側溝は下層の鎌倉時代のものに比べると、浅く、細い。

I面の年代は南北朝後期以降か。

II面 海抜8.4m前後。建物5棟・土壙1基・若宮大路側溝（溝5）ほかを検出。大路側溝はしっかりした逆台形の掘方で、幅約3m・深さ70~80cmの箱型の断面をした木枠をもつ。



第2図 遺構概念図

面の年代は鎌倉時代後期～南北朝前期ごろと考
えたい。

Ⅲ面 海抜8.2～8.3mにある。建物1棟・東西溝1条・若宮大路側溝（溝6）ほかを検出。この大路側溝も整った逆台形の掘方を持つ。掘方は下端幅約4m・上端幅約5mほどになる大きなもので、深さは1mほど。木枠は抜き取られたらしく、残っていない。

東西溝は大路側溝に流れ込んでおり、先端に取り付けられた木組みの出水施設は、その形状から水洗便所であると推定される。これは市内では千葉地遺跡・諏訪東遺跡に次ぐ3例目の検出例になる。またこの遺構には、廃絶時に土師器が一括投棄されているが、この点も先の2地点の例と同様であり、便所遺構などにはこのような儀礼が特徴

的に催される可能性が高い。

特筆すべきは大路側溝から出た3点の人名木簡である。これも御家人役を示す貴重な資料で、それぞれ「二けん おぬきの二郎」・「二けん まきのむくのすけ」・「二けん かわしりの五郎」とある。さきに大路側溝から出土した2点の人名木簡には「一丈」の単位が使われており、名前の後につけられた「跡」の有無とあわせ、今回のものとの違いが何に由来するかは今後の課題としたい。

該期には若宮大路が幅33mに拡幅され、大路西側の側溝に対応する木枠が出現する。この33mという街割りの基本単位は、おそらく泰時の丈尺制施行を契機とした街区整備にともなうものと推定される。したがって、面の年代も、丈尺制のおこなわれた嘉禄元年（1225）以降、鎌倉時代中期から後期に属するとみてよい。

IV 面 海抜8～8.2mほど。中世基盤層の黒褐色強粘質土上にある。建物4棟・柱穴列1列・東西溝1条・若宮大路側溝（溝7・8）ほかを検出。

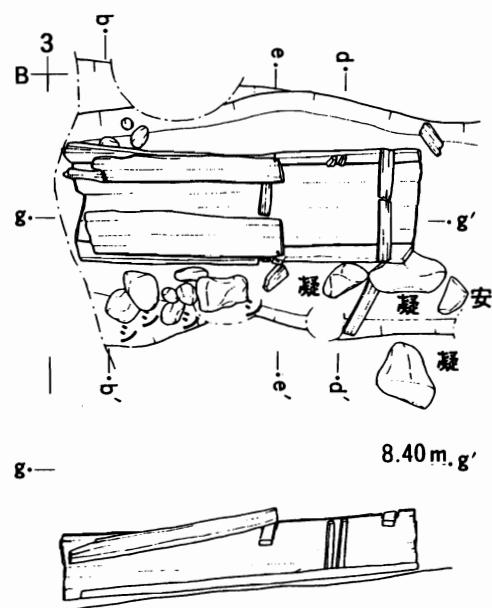
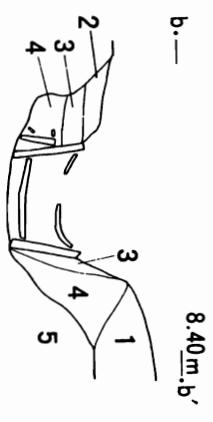
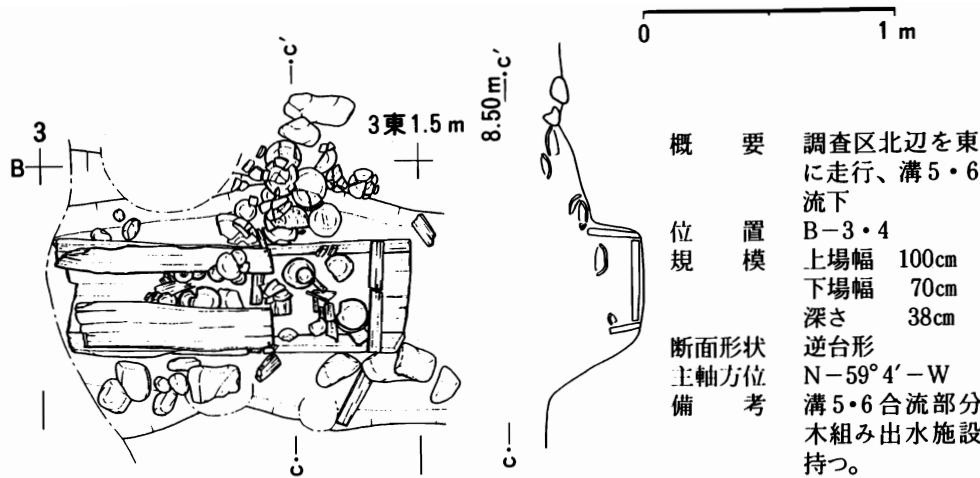
大路側溝の溝7は溝5・6の下にあり、整った逆三角形の断面をしている。幅3m以上、深さ2m近くある大きなもので、木枠はない。一方、溝8は現況の大路歩道の下に潜り込む位置にあり、西半部は検出できなかったものの、推定で幅3mを大きく超えることが予想され、深さは1.7mほど、きれいな逆台形の断面を呈し、これも木枠を持たない。溝7・8とも、層位的にみて泰時以前の鎌倉時代前期に属しているのは間違いない。両者の切合い関係は把握できなかったが、位置からいって溝8のほうが7よりもおそらく古く、鎌倉時代最初期の大路側溝とみてよい。とすれば、これこそ『吾妻鏡』養和二年（1182）三月十二日条にみえる「詣往道」（若宮大路）の側溝である可能性が高い。

したがってこの面は、ほぼ養和二年から嘉禄元年のあいだに存続していたことになる。

10. まとめ

成果を簡単にまとめると、次のような。

- 一、若宮大路の幅がほぼ確定できた。
 - 一、鎌倉時代初期から中世後期にいたる若宮大路側構の変遷がよく把握できた。



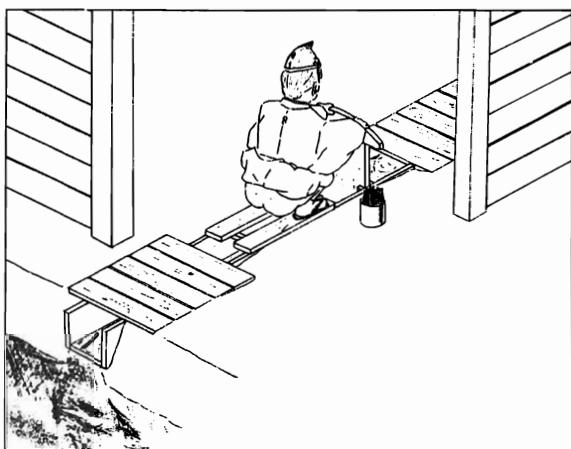
凝 - 凝灰質砂岩・安 - 安山岩・シ - シルト岩

1. シルト岩地業層
 2. 暗褐色粘質土
 3. 茶褐色粘質土
 4. 暗茶褐色粘質土
 5. 黒褐色強粘質土 (中世基盤層)
- 木組み裏込め

概要 木組み出水施設。北側壁板内面に2本の角材が縦位に釘で打ちつけられている。対面位置にも釘跡があり、同様のものがあったと考えられる。堰状になるか？

蓋は東端から55cmのところから始まり、13~15cmの隙間が主軸方向に沿って中央部にあいている。

位長 3-B
幅さ 140cm
高さ 45cm
主軸方位 25cm
備考 N-59°4' - W
 水洗便所か



大田区立郷土博物館

清水久男氏による使用法推定図

第3図 木組出水施設

一、御家人役を表示する人名木簡があらたに3点出土したことによって、労役負担の実態把握により多くの材料が加わった。

一、中世都市の水洗便所の例が得られた。

一、出土遺物の計量分析では、本地点の土師器比率は約90%（破片数計量）もあり、都市内でも幕府所在地と推定されるこのような場所では、海岸砂丘地帯や町場などに比べて、やはり高い数値を示すことがわかった。

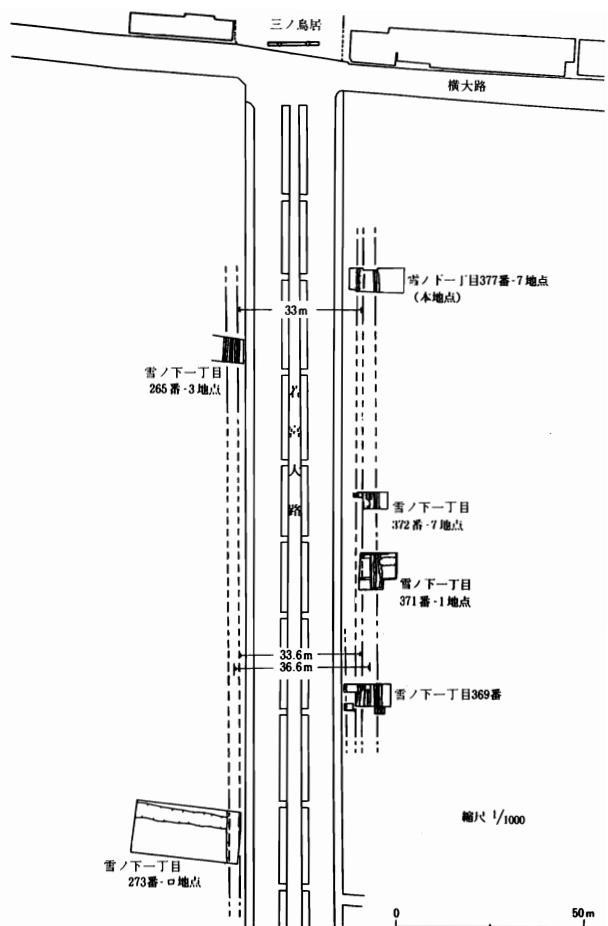
以上であるが、狭い調査であったにもかかわらず、豊かな成果が得られたといえる。詳細については、すでに刊行された報告を参照されたい。

文献

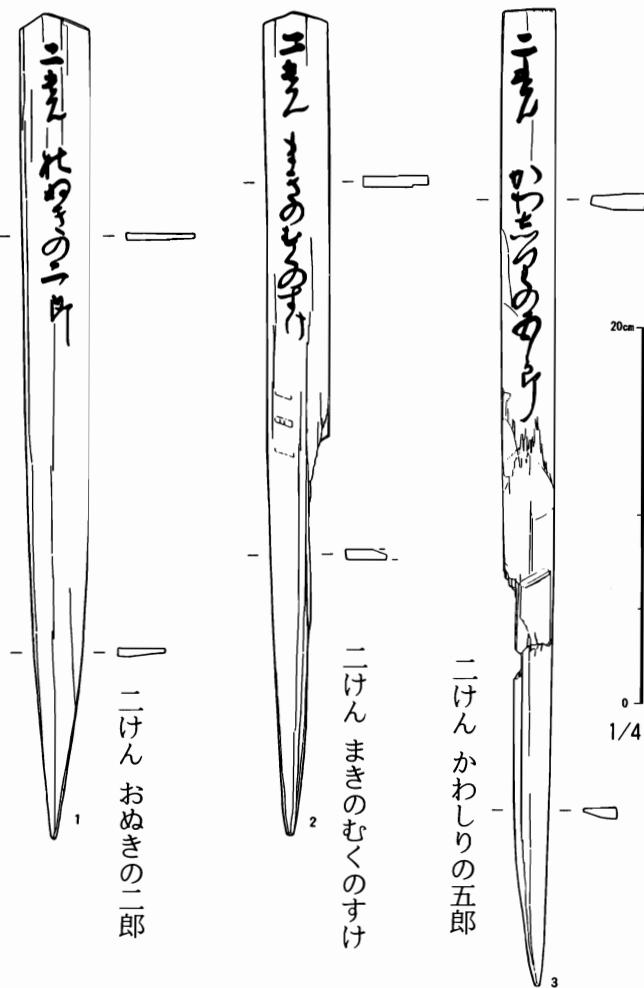
馬渕ほか「北条小町邸跡（泰時・時頼邸） 雪ノ下一丁目377

番7地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』12

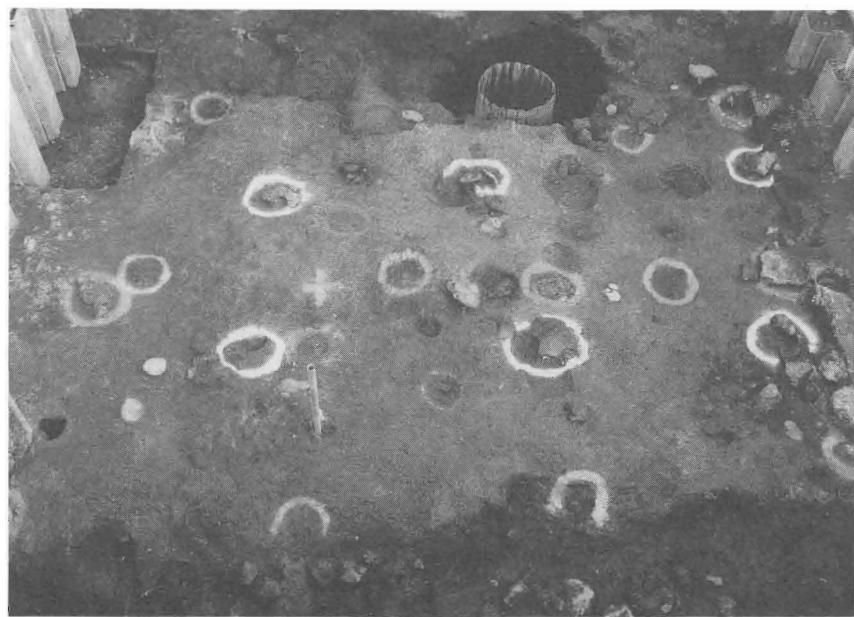
鎌倉市教育委員会 1996



第5図 近隣調査地点との対比



第4図 人名木簡



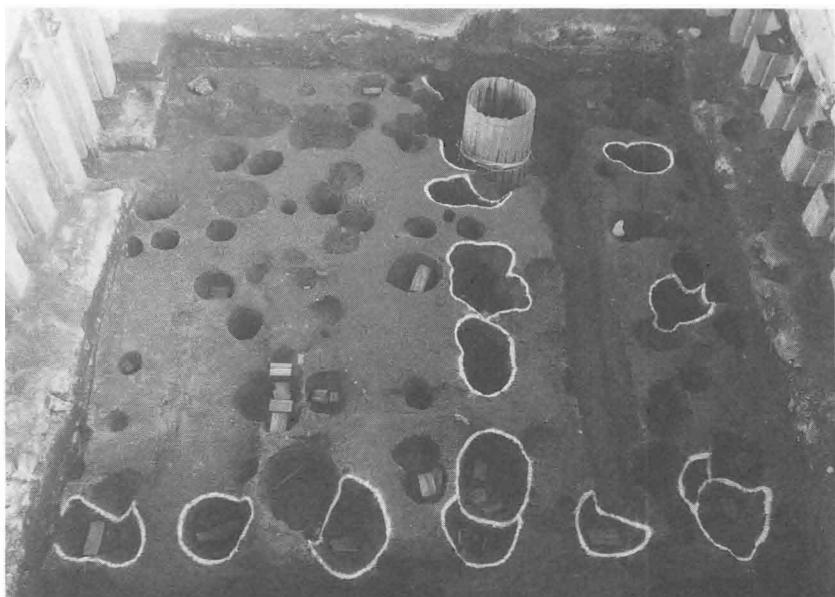
II面東半部平坦面（西から）



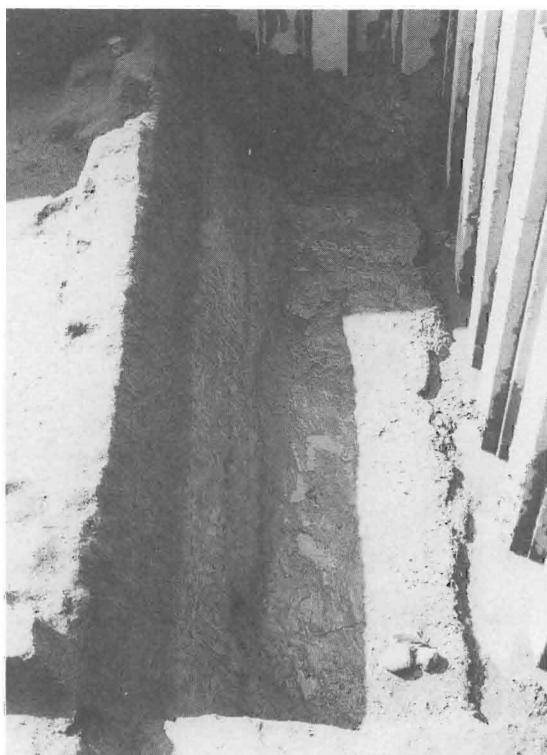
III面東半部平坦面（西から）



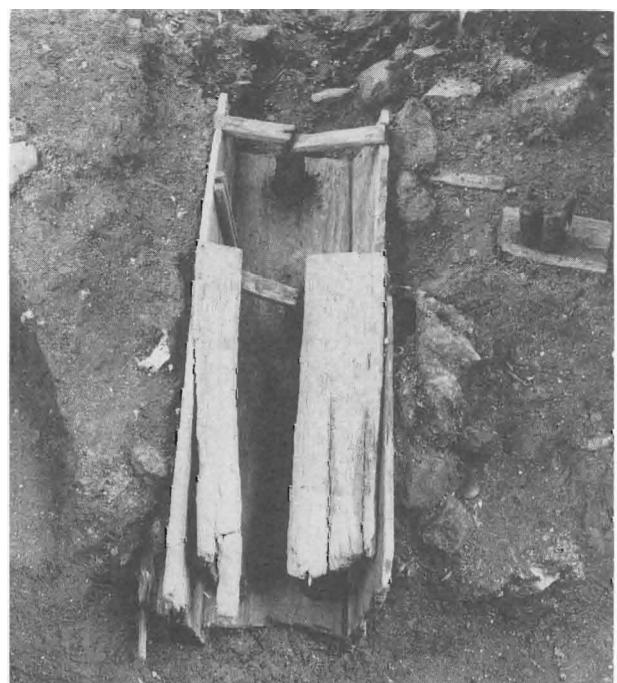
鎌倉時代中期以降若宮・次路側溝
(溝ら・6／南から)



IV面東半部平坦面（西から）



III面木組出水施設（水洗便所か）
鎌倉時代初期若宮大路側溝（溝8／北から）



若宮大路側溝直しの状況（南壁）

記念講演

古代文字資料の現状について

—古代の相模を中心として—

国立歴史民俗博物館教授 平川 南

I. 墨書土器研究

① 共通文字と特殊な字形

古代の集落遺跡から出土する墨書土器は、古代の村落社会を解明する有力な資料である。その墨書土器の意義を明らかにすることを前提として、墨書土器の字形を中心に分析した結果、

(1)墨書土器の文字は、その種類がきわめて限定され、かつ各地の遺跡で共通して記されている。

(2)共通文字の使用のみならず、墨書土器の字形も各地で類似している。しかも、本来の文字が変形したままの字形が広く分布している。

の2点が指摘できる。限定された共通文字は、農民が会得した文字を取捨選択して記したものでないことを示している。このような字形を中心とした検討結果からは、集落遺跡の墨書土器は、古代の村落内の神仏に対する祭祀・儀礼形態を表わし、必ずしも墨書土器が文字の普及のバロメーターとは直接的にはなりえるものではない。

② 墨書土器と冥界思想

①で指摘した神仏に対する祭祀・儀礼形態は、東日本各地における集落遺跡出土の多文字の墨書土器が、古代の人々が自らの罪によって冥界に召されることを免れるために必死で土器に御馳走を盛って供える、いわゆる賄賂（まいない）行為を実施していた姿を伝えたものと理解できるのである。

II. 地方社会と文字の習熟度

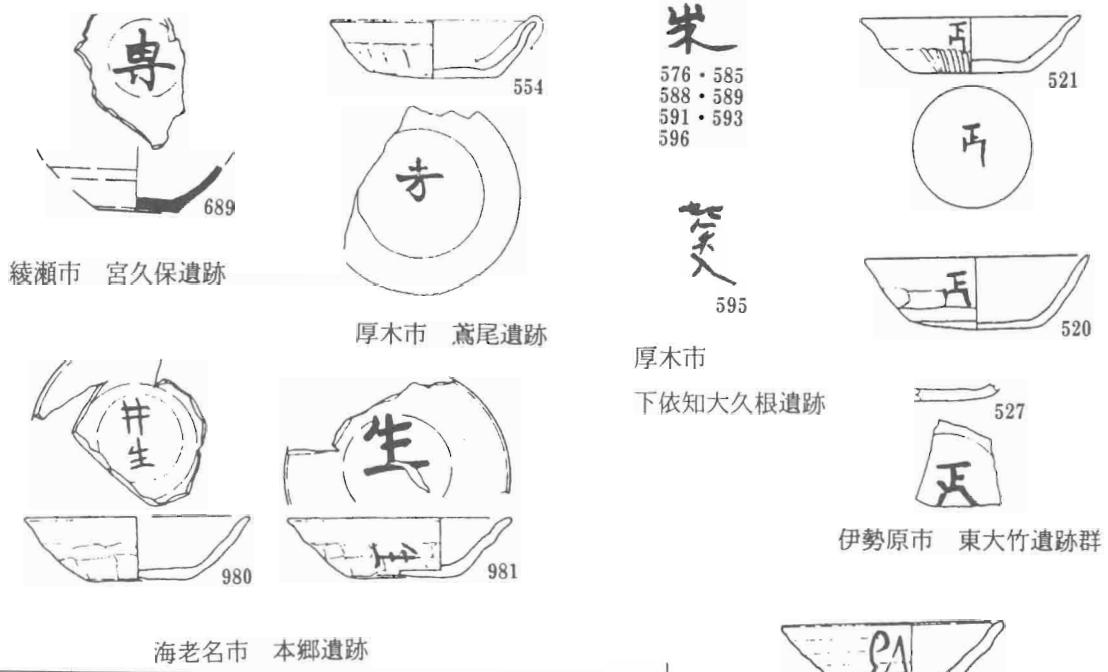
墨書土器は、そのあり方から、先に指摘したように文字の普及のバロメーターとは直接的になりえないとした。この文字の習熟度は墨書土器中の特異な字形「冂」（神奈川県秦野市草山遺跡など）、集団内の字形変化「ヘ」「キ」（神奈川県綾瀬市 宮久保遺跡）などに着目すると、意外と低かったと判断できそうである。さらに、その習熟度を計る格好の資料の一つがヘラ書き（焼成前）文字の筆順である。その一例として、島根県玉湯町蛇喰遺跡のヘラ書き土器があげられよう。その年代は8世紀後半から9世紀前半とされている。

画数の比較的明瞭な「田」または「由」の筆順を模式的に表したのが、下図である。これほど画数の少なく、使用頻度の高いと考えられる漢字「田」または「由」の文字でさえ、一群の中に少なくとも四種類の筆順が想定される。いうまでもなく、通常同一人物が数種類の筆順で文字を記すことはないであろう。この事実は古代地方社会における文字の習熟の問題を象徴的に示しているといつてよい。

III. 最新木簡と古代地方社会

近年、全国各地の古代官衙遺跡の発掘調査によって、しだいに古代地方社会の実態が明らかになってきた。

そのなかでも、長野県尾代遺跡群から発見された100点余りの木簡は、7世紀後半から8世紀前半にかけての郡（評）家を拠点とした地方豪族の支配の実態をきわめて具体的にものがたっている。



海老名市 本郷遺跡

奈良・平安時代研究プロジェクトチーム



図10-2 「合」の字形と参考資料

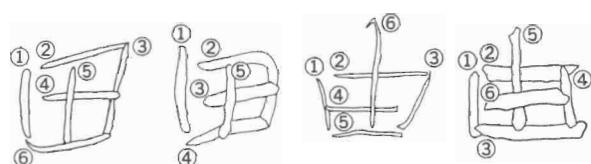


図7 「田」または「由」の筆順模式図 [島根県玉湯町蛇喰遺跡 ヘラ書き須恵器]

やぶねふどうはら
5. 横浜市戸根不動原遺跡

横山 太郎

1. 所在地 横浜市都筑区池辺町2469番地・外
2. 調査主体 戸根不動原遺跡調査団
3. 調査担当者 大坪宣雄・横山太郎
4. 調査目的 池辺町不動原土地区画整理事業に伴う事前調査
5. 調査期間 試掘調査 平成7年2月8日～3月29日
本調査 平成7年5月10日～12月28日
6. 調査面積 18,500m²

7. 遺跡の立地

戸根不動原遺跡は、多摩丘陵のほぼ北東端にあたる台地上に立地する。この台地は東京都町田市から南に蛇行する鶴見川が、西から流入する恩田川と合流し、東へ向きを変えて中流域に入る地点の北岸に位置する。南を鶴見川によって形成された沖積地に、北を南西側から切れ込む小支谷にはさまれた、約70,000m²程度の平坦な台地であり、標高は25～30mを測る。本遺跡の西側の谷に沿って中原街道が、南側には横浜上麻生線（旧日野往環）が走り、この2本の街道は西側の佐江戸十字路で交差している。

台地の北側は緩やかな谷沿いに宅地が広がり、市立都田西小学校が今回の調査区域に隣接している。今回の調査の対象となった地区は、大部分が植木畑・野菜畑として利用されており、一部は雑木林となっていた。

本遺跡は、今回の調査が実施される以前から、弥生時代後期、及び古代の集落として知られている。北側に隣接する市立都田西小学校の敷地内において、同じ「戸根不動原遺跡」として横浜市埋蔵文化財調査委員会により発掘調査が実施されており、報告書が刊行されている。また、本遺跡南端部分にあたる池辺第28遺跡は遺物散布地として登録されており、平安時代の瓦塔片が表採で確認されている。その付近からさらに南の鶴見川方向に面する崖面には、横穴墓と思われる遺構の確認

された池辺第29遺跡がある。

周辺の遺跡としては、本遺跡の西側の谷を隔てて広がる台地上に、弥生時代中期～平安時代の集落跡である「清水場遺跡」、「宮原遺跡」、「四枚畠遺跡」、弥生時代中期の方形周溝墓53基が検出された「能見堂遺跡」、平安時代の火葬藏骨器5基が発見された「寅ヶ谷遺跡」がある。また、この西側の台地上に所在する東漸寺境内において、平安時代末期に位置づけられる青白磁の合子が、台地南西部では藏骨器に用いられた12世紀の渥美焼の四耳壺などが出土している。東漸寺の南方にある無量寿福寺の墓地には、「猿渡内匠の墓」と伝えられる鎌倉期の古い型式の五輪塔が見られるなど、付近には古代末～中世にかけての文化財は少なくない。

8. 調査の経緯

今回調査の対象とされた区域の北側に隣接する市立都田西小学校の敷地内では昭和53年に発掘調査が行われており、縄文時代から平安時代までの遺構・遺物が発見されている。今回の調査地点はこの前回調査区と同一の遺跡と考えられ、同じく「戸根不動原遺跡」と呼称し、主に道路を中心とした造成のため現状保存の範囲の多い東半部をA地区、宅地造成のため掘削対象となる西半部をB地区とした。

平成7年2月8日から3月29日まで試掘調査を実施し、縄文時代早期～中期にかけての土器片少量と、弥生時代中期、平安時代の遺構・遺物が発見された。本調査は、この結果にもとづいて平成7年5月10日から着手した。試掘調査において検出された遺構のうち、現状保存のため本調査範囲からはずした区域に位置するものについては、プランの記録のみで埋め戻した。

7月期まではA地区を中心に調査を進め、8月期からはB地区に中心を移した。11月下旬からは、併行して縄文時代を対象とする試掘調査を行い、縄文時代早期～中期の土器片が出土したが、それに伴う遺構は検出されなかった。



第1図 遺跡の位置 (1/25,000)

B地区のうちの数カ所は、土地使用承諾の取得が遅れたため調査を実施し得なかった。それらの地点については、平成8年度以降に調査を継続することとし、平成7年12月28日をもって平成7年度の調査は終了とした。

9. 調査の概要

検出遺構は、以下の通りである。

〈A地区〉

平安時代 住居跡24軒（うち9軒埋め戻し）

掘立柱建物跡14棟

弥生時代 （宮ノ台期・久ヶ原期）

方形周溝墓3基

住居跡16軒（うち1軒埋め戻し）

近・現代 兵舎跡1棟

不 明 溝8条

井戸1基

土坑12基

〈B地区〉

平安時代 住居跡19軒

掘立柱建物跡13棟

道路状遺構1条

不明遺構2基

奈良時代 墓壙1基

古墳時代 （鬼高期）

住居跡1軒

弥生時代 （宮ノ台期）

方形周溝墓4基

住居跡11軒

焼土遺構1基

不 明 溝4条

焼土遺構2基

掘立柱建物跡のうちには、特殊な性格を有する可能性のあるものが含まれている。最も注目されるのは、A地区南西側において検出された大型の掘立柱建物跡4棟である。

1号掘立柱建物跡は5×4間（約10×8m）の規模を持ち、2重の柱の構成が認められる。内側の柱は3×2間構成で、やや不正確ながら外側のものとほぼ柱の並びが揃っており、内側の柱が外側より若干太い柱穴を持つが、外側のものも柱穴の径が1m程度あるしっかりしたものである。また、西側に2×2間の張り出し部分がある。

16号掘立柱建物跡は5×3間（約13×10m）、17号掘立柱建物跡は5×2間（約13×4m）の規模を

持つ。18号掘立柱建物跡は 2×3 間（約 7×7 m）構成で、1号掘立柱建物跡と同様、2重に柱が並んでいる。内側の柱は、外側より東西方向の柱間の狭い 2×2 間（約 3×3 m）で、南北方向の中軸のみ一列に揃い、他の柱は外側と内側で互い違いの関係に並んでいる。これら4棟の主軸方位は、北から西に $10 \sim 20^\circ$ 程度の傾きを持つ。16・17号掘立柱建物跡は東西方向の柱穴がほぼそろって並んでおり、関連性を持つ建物である可能性がある。また、1・16号掘立柱建物跡を構成する柱穴のほとんどに、柱の抜き取り痕と思われる痕跡が見て取れた。

出土遺物には、縄文時代の土器・石器、弥生時代中期後半～後期の土器・石器、古墳時代後期の土器、奈良・平安時代の土器・鉄製品などがある。

縄文時代の土器は、早期後半の条痕文系土器群、前期前半の纖維を含む土器群、中期の阿玉台式・勝坂式土器などが発見された。石器では石鏃・磨石・石皿がみられる。また、多量の焼石が確認されている。

弥生時代以降の遺物は、全体に後世の削平が深いこともあって、遺構外の堆積土中からの出土は少なかった。多くは各時期の住居跡の覆土中から得られている。

弥生時代の土器は、弥生時代中期後半宮ノ台式期のものが中心である。甕・壺・台付甕・鉢形土器などが確認されている。弥生時代後期に属すると思われるものは少ないが、Y5号住居跡において久ヶ原・弥生町系と思われる壺の破片が出土している。弥生時代の石器としては、扁平片刃石斧、鑿形石斧などの大陸系磨製石斧がある。

古墳時代の遺構は、後期鬼高式期に属するK1号住居跡1軒の他には発見されておらず、遺物の出土も少なかった。該期の出土遺物のほとんどは、K1号住居跡において発見されたもので、内訳は土師器坏、甕、餌、須恵器體である。他に比較的まとまって出土したのは、弥生時代中期に属するY10号住居跡の最上層にあたる黒色土中で、一括して流れ込んだものらしい。

奈良・平安時代の遺物では、土師器坏・甕、須恵器坏・甕・長頸瓶、灰釉陶器の碗・皿・長頸瓶・小瓶子などが発見された。土師質土器碗、内黒

土器、綠釉陶器なども確認されている。この外には刀子・紡錘車・鎌・釘などの鉄製品、鉄滓、布目瓦なども発見されている。特記すべき遺物としては、瓦塔片、底部の内側に花文の刻書された灰釉陶器碗、墨書き土器が発見されている。墨書きは土師器・土師質土器・須恵器坏の体部・底部内側・底部外側に書かれており、「天」「万」「二」「林」「太」「在」などが判読できた。他に二字のものを含む読み方の判然としないもの、記号状のものなどが出土している。その他、寺院跡で使用されることが多い須恵器鉄鉢形土器の出土もみられるなど、単なる集落跡の枠を越えた遺物の出土が注目される。

10. まとめ

藪根不動原遺跡は、弥生時代中期後半宮ノ台式期と、古墳時代後期～奈良・平安時代を中心に展開を見せる集落遺跡である。

宮ノ台式期の遺構の分布は、本遺跡の立地する台地の南半部に集中しており、台地北側を中心とする昭和53年度の調査では該期の遺構・遺物は発見されなかった（弥生時代後期の住居跡が2軒検出されている）。台地南半部には、ほぼまんべんなく住居跡の分布が見られ、南端部に集中して7基の方形周溝墓が発見されている。住居跡と方形周溝墓の重複が見られることから、居住域を変更しながら数世代にわたって継続した集落であることがうかがわれる。

本遺跡と西側の谷を隔てた台地上には、この時期の住居跡100軒以上が存在したと推測され、V字溝の検出されている「宮原・清水場遺跡」と、これに隣接して53基の方形周溝墓が発見された「能見堂遺跡」が所在する。これらは鶴見川水系の宮ノ台式期に属する拠点的集落の社会構成を知る上で、重要な資料を提供する遺跡であるが、本遺跡はこれと同一の集団に所属していた可能性が考えられる。

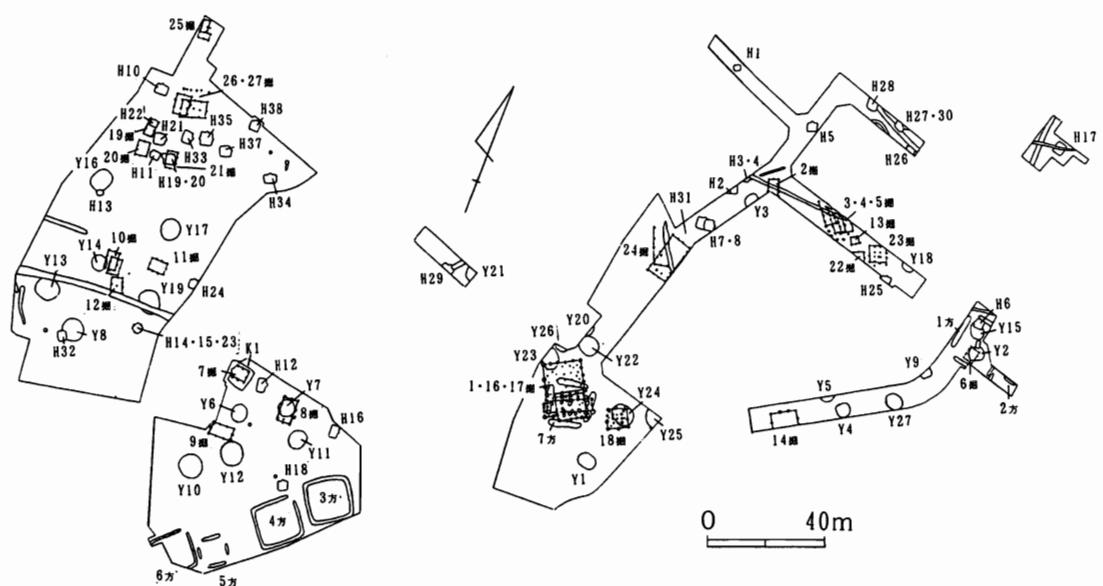
弥生時代後期の遺構・遺物はほとんど発見されていない。わずかにA地区のY5号住居跡において結節文区画の文様帶と、山形文を持つ、久ヶ原・弥生町系の壺の破片が出土している。また、朝光寺原式に属する遺物は今のところ確認されていないが、出土遺物が未整理であるため、今後それ

らの点にも留意しながら検討していく必要があるだろう。

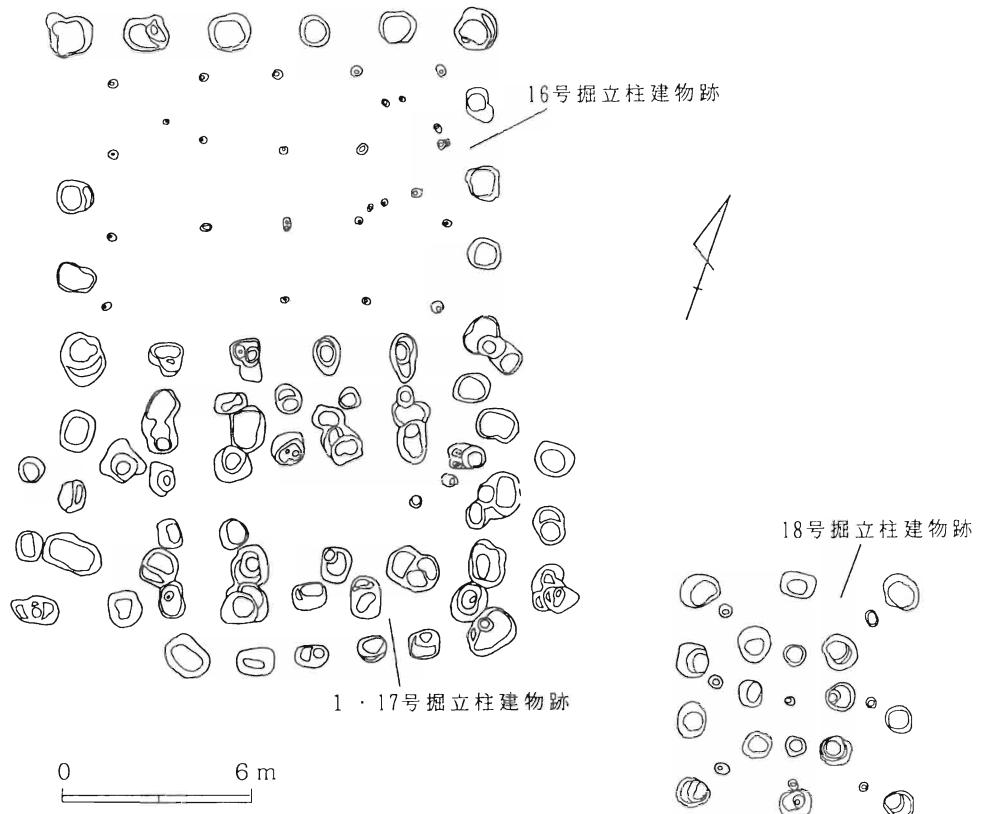
続く古墳時代前期～中期は、本遺跡においては遺構・遺物は発見されていない。後期鬼高式期に至り、台地南西寄りに住居跡1軒が検出される。検出地点の周辺は未調査の範囲が比較的多いので、おそらくあと数軒の住居が存在し、小規模な集落を構成するものと推測される。

8世紀～10世紀頃にかけての遺構は再び増加を見せる。奈良・平安時代の遺跡としての藪根不動原遺跡を見た場合、池辺第28遺跡として瓦塔が出土していることや、昭和53年度の調査で墨書き土器が発見されていることなどで、かねてより注目されていた。また、本遺跡の西側を走る中原街道沿いには、平安末期から鎌倉期にかけての寺院や墳墓群が存在することを推測させる遺物が点々と出土しており、この地域に高い文化を享受できる在地勢力の存在した可能性が指摘されている。本遺跡においても、前項で触れたように瓦塔、淨瓶、鉄鉢形土器など寺院との関わりをうかがわせる遺物が散見される。それをもってただちに、本遺跡のA地区で発見された大型の掘立柱建物を「村落内寺院」とすることはできないが、その候補として検討することはできるだろう。あわせて、官衙

遺構や、村落内の富裕層の住居といった可能性も視野にいれて、今後の課題として見ていくたい。



第2図 薮根不動原遺跡遺構配置図



第3図 1・16・17・18号掘立柱建物跡



菟根不動原遺跡 A 地区（上空から）



菟根不動原遺跡B地区（上空から）



1・16・17号獨立柱建物跡

さわざま 6. 平塚市沢狭遺跡

戸田哲也・小林義典・香川達郎

- 1. 所在地** 平塚市南金目字沢狭1259番1外
2. 調査主体 金目郵便局建設用地内遺跡発掘
調査団
3. 調査担当者 戸田哲也
4. 調査目的 金目郵便局庁舎新築に伴う事前
調査
5. 調査期間 平成7年7月29日～平成8年3
月29日
6. 調査面積 2,280m²
7. 遺跡の立地

遺跡は秦野市と伊勢原市に近接する平塚市北西部に位置する。JR平塚駅より北西方向に約8km。

地形的には、丹沢山地に源を発する金目川、善波川、鈴川等の河川によって形成された沖積平野や微高地のうち、金目川によって形成された扇状地上に立地する。現地での標高は約18mを測る。

周辺の主な遺跡を挙げると、北金目台地では本遺跡から西約1.9kmに王子台遺跡、同じく西約2.5kmに砂田台遺跡等があり、弥生中期～古墳時代にかけての大集落が存在する。また、西約2.5kmに6世紀代の二子塚古墳がある。

善波川を遡ると、北西約2.4kmには弥生中期から平安時代初期まで701軒の住居址を検出した根丸島遺跡、北西約3.0kmに5世紀から6世紀にかけ5基の古墳が検出された上坂東古墳群、同3.5kmには古墳前期の玉造工房址が発見された久門寺遺跡がある。

鈴川流域では北北西約4.1kmに三の宮古墳群など多くの古墳が点在する。

8. 調査の経緯

今回の調査は金目郵便局新庁舎建設にともない実施された発掘調査である。本調査に先立ち神奈川県教育委員会による範囲確認調査が行われ、その結果を受けて調査団は事業区域のうち、庁舎部分に当たる2,280m²について本格調査を行うこととなった。

9. 調査の概要

今回の調査によって発見された遺構・遺物は弥

生時代中期から近世に及んでいる。

以下、発見された遺構・遺物について記する。

<弥生時代中期>

－遺物－須和田式期壺型土器

<弥生時代後期>

－遺構－溝状遺構2ヶ所 旧河道跡1ヶ所

－遺物－土器、木製品等

<古墳時代前期>

－遺構－遺物集中祭祀遺構1ヶ所

－遺物－土師器（高坏、器台、埴等）

鹿角製釣針等

<古墳時代中期>

－遺構－遺物集中祭祀遺構3ヶ所 溝状遺構3ヶ所 杭列 木材集中区1ヶ所

－遺物－土師器（高坏、甕、壺等）、手捏土器、須恵器（坏等）、石製模造品（有孔円板、劍、勾玉、臼玉）、鐵鎌、鐵製鍬（鋤）先、杭等木製品

<古墳時代後期>

－遺構－遺物集中祭祀遺構5ヶ所

旧河道跡1ヶ所

－遺物－土師器（高坏、坏等）、須恵器、木製品、馬齒

<奈良・平安時代>

－遺構－畦畔1ヶ所

－遺物－土師器等

<近世>

－遺構－水田址 杭列

－遺物－杭、瀬戸擂鉢等

土層は沖積地特有の粘質土、シルト質土、砂質土からなる。堆積は厚く、現地表面から弥生中期遺物包含層までの深度は約3mを測る。

基本土層(第2図参照)はI層が灰色シルト～粘質土で中世～近世に比定される土層であり、宝永スコリア層前後に乾田層が堆積する。また、同スコリア直下には金目川の氾濫に伴う砂礫層が確認された。II層は灰色粘質土で脱色スコリアを多く含む層であり、奈良・平安時代に比定される土層

である。Ⅲ層は古墳時代に比定される土層で後期包含層をⅢa層、中期をⅢb層、前期をⅢc層とした。Ⅲb層は灰色粘質土(Ⅲb-①層)と黒色粘質土(Ⅲb-②層)に分層される。Ⅲc層は灰色～青灰色を呈すシルト質土で層下半には白色パミスが少量含まれる。Ⅳ層はスコリア層(Ⅳa層)と青灰色砂質土(Ⅳb層)に分層される。Ⅴ層は青灰色シルト質土層である。なお、各層とも更に細分が可能である。以下、主な遺構・遺物の概要を述べる。

弥生時代中期(Ⅴ層)では須和田式期の完形壺形土器が単独で出土した。本遺跡内では最も古い時期の遺物である。

弥生時代後期(Ⅳ層)では調査区中央に東一西方向の延びをもち最大幅10m、深さ2m以上(それ以深は河床礫)の規模をもつ旧河道跡が検出された。現在、本遺跡の南0.5kmを流れる金目川は、近世の新田開発に伴って人為的に流路を変えたとされ、本址は当該期の旧金目川あるいは支流であると考えられる。因に本遺跡内では、古墳時代後期の金目川あるいはその支流と考えられる旧河道跡が調査区北端を南西一北東方面に検出されている。

古墳時代前期(Ⅲc層)には遺物集中祭祀遺構が1ヶ所検出された(8号遺物集中)。この集中部の規模は長軸で約5.5m、短軸で約3.5mを測る。遺物は壺形土器を主体とするが、1個体ではあるが庄内式の甕も含まれている。

古墳時代中期(Ⅲb層)には遺物集中祭祀遺構が3ヶ所検出された。6号遺物集中は6m×6m、7号遺物集中は4m×4m、9号遺物集中は東西方向に長軸を持ち5m×3mの規模を有する。これら遺物集中祭祀遺構は黒色粘土層(Ⅲb-②層)の上面に分布していた。このうち6号遺物集中は遺存状態が最も良好で、土師器の壊、高壊、壺、須恵器壊等の完形品が整然と積み重なった状態が数ヶ所で看取された。土師器、須恵器とともに滑石製模造品(有孔円板・勾玉・臼玉等)、鐵鏃、U字形鍬(鋤)先等が検出され、滑石製模造品のうち臼玉は3ヶ所合計で2,000個近くを数え、特筆される。

なお、調査中発掘区の東壁で東西方向に走る断層が検出されたが、Ⅲb-②層まで立ち上がって

いたことから、5世紀中葉～末葉以前の所産であると考えられる。

古墳時代後期(Ⅲa層)では遺物集中祭祀遺構が5ヶ所検出された。2号遺物集中は東西方向に延びを持ち、幅1m～3m、長さ約20mを測る凹地に遺物が検出された。出土遺物は土師器を主体とするが、高壊の出土比率が高く、器面に漆を塗布した壊、漆ぬりの短甲木製品、馬歯等が出土しており祭祀遺構と推定した。

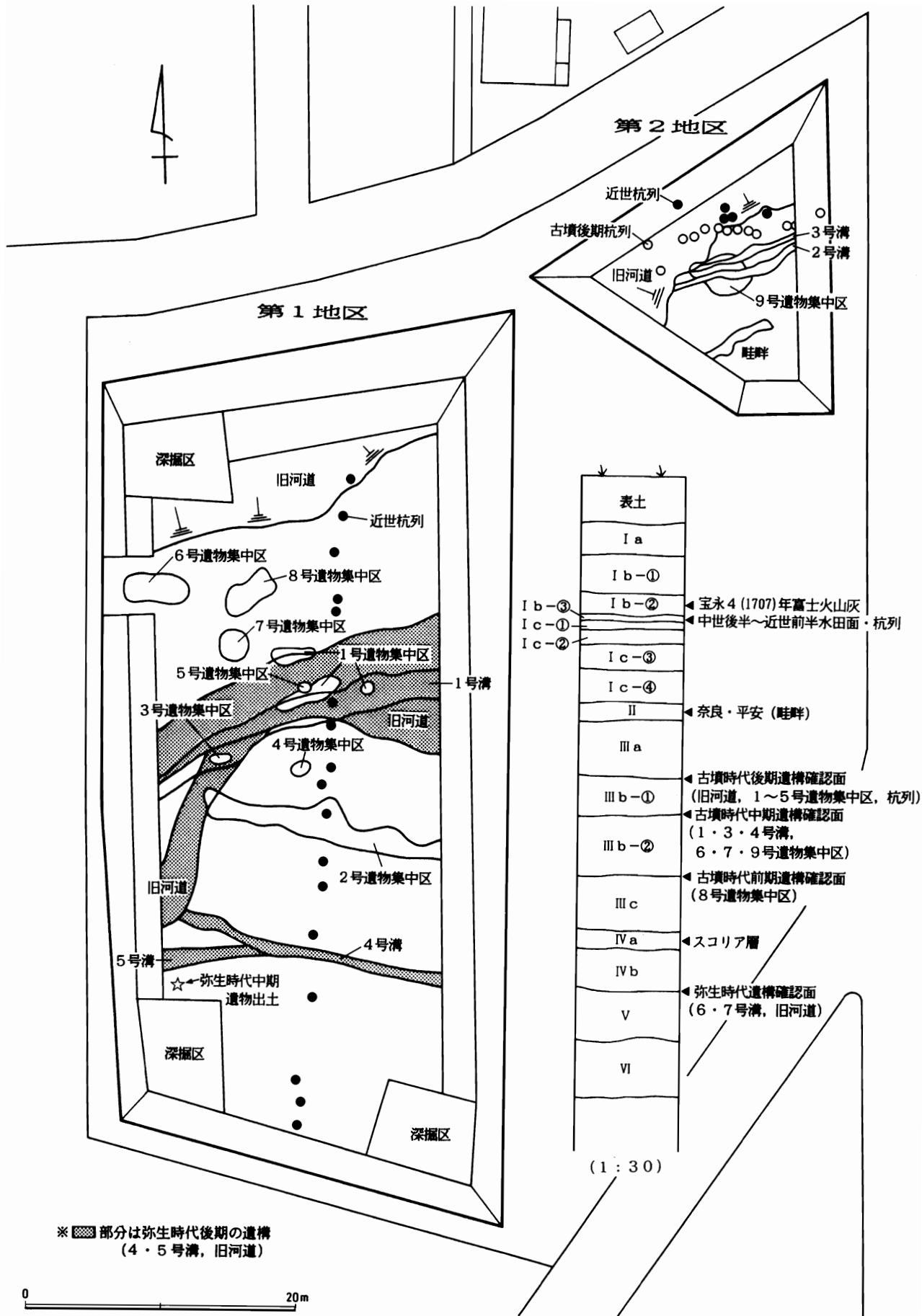
10.まとめ

今回の調査では、弥生時代中期から近世に至る遺構・遺物が検出されたが、なかでも古墳時代の遺物集中祭祀遺構の発見は神奈川県内では調査例が少なく、貴重な資料を得ることができた。

遺跡の立地環境から、当初より水田址等の生産遺構の存在を想定しつつ調査を行った。その結果、具体的な遺構としては近世の水田址や奈良・平安時代の畦畔等が検出されたが、古墳時代の遺物集中祭祀遺構も近年注目されている水場祭祀の場として、集落に関わる社会生活全般の諸問題を考える上で重要な資料となっていくものと思われる。



第1図 遺跡位置図 (1/50,000)



第2図 基本土層及び遺構配置図 (1/400)



遺跡遠景（北より）



弥生中期土器出土状態



古墳時代中期遺物集中祭祀遺構



同 石製遺物出土状態



同 遺物集中祭祀遺構（接写）

はねお

7. 小田原市羽根尾横穴墓群

田村 良照

- 1. 所在地** 小田原市羽根尾谷津291他
- 2. 調査主体** 羽根尾工業団地内遺跡調査団
(団長 戸田哲也)
- 3. 調査担当者** 田村良照・牧野健一
- 4. 調査目的** 区画整理事業に伴う事前調査
- 5. 調査期間** 平成6年8月22日～平成7年
3月12日、平成7年10月6日
～平成8年3月31日
- 6. 調査面積** 4,270m²

7. 遺跡の位置

遺跡は、東海道本線国府津駅より北東約1.6kmの距離にあり、地勢的には、大磯丘陵の西縁部を占める国府津山の北東側丘陵部およびその東側に続く中村原面と呼称される低台地の一端、旧橋地区に位置する。

平成4年に始まった調査は現在、第4期目を迎える、これまでに丘陵部で古墳時代後期の横穴墓5群34基を調査し、低台地部では中世集落跡、古墳時代前期の木製品多数を含む遺物包含層を調査しさらに試掘調査で縄文時代前期の植物遺存体を包含する泥炭層、平安時代後期の集落跡の一部などが確認されている。

このように本遺跡は縄文時代前期から中世にいたる複合遺跡であるが、今回はその中で古墳時代後期の横穴墓群の概要を報告する。

また、周辺の遺跡には、本遺跡の南東約130mの近距離に弥生時代中期の集落跡から鳥形土器を出土した羽根尾堰ノ上遺跡(杉山1986)が所在している。

8. 調査の経緯

小田原市では、東部の羽根尾、中村原にかけての旧橋地区に工業団地建設の事業が計画され、それによって破壊される周知遺跡を主要対象とした埋蔵文化財調査が実施される運びとなった。

開発区域内には、丘陵部に数箇所の横穴墓群の分布が知られ、また低台地部でも遺物の散布が確認されており、それらはすでに小田原市埋蔵文化財地図にマークされていた。しかし、その実体はほとんど不明に近いところから、調査はまず、開発区域内における遺跡の内容把握から着手され、第Ⅰ期調査では全域の踏査、第Ⅱ期調査では低台地部の試掘調査を行い、本格調査に向けての詳細なデータ収集に努めた。次いで、第Ⅲ期で横穴墓群、第Ⅳ期に横穴墓群と低台地部の本格調査に移



第1図 遺跡位置図 (1/50,000)

行した。

9. 調査の概要

羽根尾地域の横穴墓群は、すでに小田原市教育委員会によって5箇所の分布が確認され、小田原市史（杉山1994）にそれぞれ字名を冠して掲載されている。しかし、それらは比較的狭い地域にまとまっていることから、本格調査では全体を羽根尾横穴墓群として捉え、その上で各々をA～E横穴墓群と便宜的に命名した。なお、名称の混乱を回避する都合上、ここに小田原市史に示された名称を（ ）内に明記しておくことにする。

A 横穴墓群（谷津横穴墓群東側）

丘陵の東側斜面に3基が不規則に分布し、その中の2基が新発見の横穴墓である。また、2号墓とした横穴墓は、羨道まで掘削したのち放棄された未完成の横穴墓である。構造的には隅丸長方形ドーム天井の玄室に羨道が付く、比較的古式のタイプで構成されている。

副葬品は、1号墓前庭部より7世紀前半の土師器坏1点と、1・2号墓玄室内から鉄鏹・直刀の破片、装身具などが出土しただけである。

本群は副葬品・構造などから6世紀～7世紀前半に形成されたものと推定される。

B 横穴墓群（谷津横穴墓群西側）

上段5基、下段6基の2支群11基で構成される。丘陵基部に近い標高約50m付近に1～5号墓と命名した5基が横一線に並び、それに連なるよううに6～11号墓とした下段支群6基が丘陵先端まで標高40m付近にほぼ等間隔に横一線に分布する。

構造的には、1・5・10号墓は側壁が緩くカーブする半截徳利形・ドーム天井を呈し、さらに3・11号墓は奥壁・側壁・天井の独立したいわゆるアーチ形の新しいタイプの横穴墓である。つまり、両支群を比較すれば、どちらにも新・古式タイプの横穴墓は存在するものの、上段は比較的古式タイプが多いのに対し、下段はより新しいタイプで構成される傾向が看取され、B横穴墓群全体としては、丘陵基部から先端部に向かって造墓されたものと推測することが出来る。

副葬品には、1・5号墓からTK209型式に比定される須恵器坏身が出土し、また、早い時期に

天井部の崩落したと見られる11号墓からは完形土器数点が埋葬当時の状況を留めたかたちで出土した。その他に、須恵器・土師器・直刀・鉄鏹・装身具などがあげられる。これらの副葬品より本群は6世紀末～7世紀後半にかけて形成されたものと推定される。

C 横穴墓群（穴口横穴墓群）

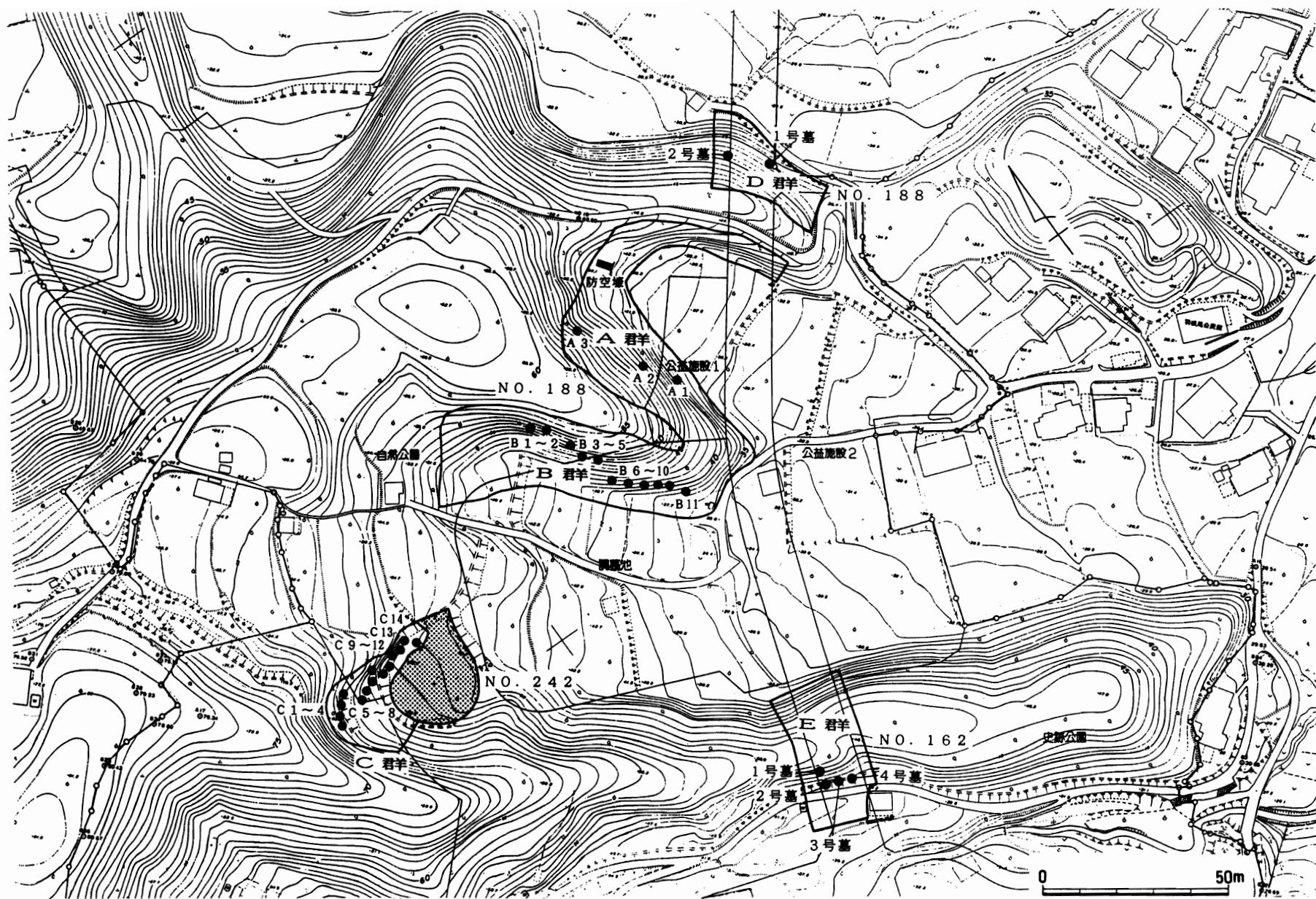
上段4基、中段4基、下段5基、さらに最下段1基の4支群14基で構成される。分布的には、B支群と同じ谷戸の最奥部に位置し、上段に行くほど奥部に形成されている。

各支群はそれぞれに広い前庭部をもち、特に、下段と最下段には各横穴墓にいたる階段状施設と谷戸から登って来るための墓道が存在し、また、下段と中段を結ぶ階段も検出された。すなわち、これらの階段状施設と墓道は当時の人々がどの様なルートで横穴墓に到ったかを示すと同時に、各支群、横穴墓相互の関係をもつぶさに示しているものと考えられる。

次に埋葬施設について見ると、上段1～4号墓はいずれも奥壁・側壁・天井の独立したアーチ形を呈し、加えて、羨門部に共通した特徴が見られるなど、最も後出的要素を備えている。一方、中段5～8号墓は上段と同様に、側壁が直線的で玄室と羨門の区別がつかない玄室平面形をもつが、天井部はアーチ形、ドーム形とアーチ形の折衷形態の2種類が存在し、上段よりも古式の様相を備えている。下段9～12号墓および最下段の14号墓は玄室と羨道が僅かに区別され、天井部はドーム形、アーチ形、両者の折衷形態の3種類が認められ、中段よりも一層古式の様相が伺える。ちなみに、13号墓はミニ横穴墓である。

以上のように、本群は分布、玄室形態および外部施設の在り方といった諸要素を検討すると、谷戸口に近い最下段から掘削を開始し、次第に奥部に展開して、最終的に上段支群に到ったものと考えられる。また、このような推考は副葬品からも検証し得る。なお、8・11号墓には線刻壁画が描かれている。

副葬品は、須恵器・土師器・直刀・鉄鏹、装身具などが出土し、下段前庭部からは銀装太刀の鞘尻が出土した。本群はこれらの副葬品より7世紀



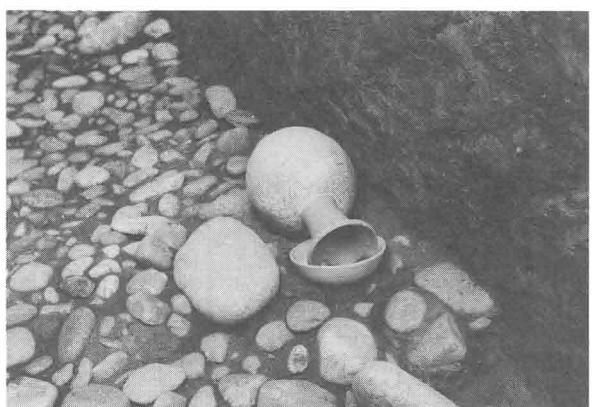
第2図 丘陵部横穴墓群 (1/1,500)



C群横穴墓群全景（南東より）



E群横穴墓群全景（西より）



C群7号横穴墓出土土器



C群13号横穴墓棺台



D群1号横穴墓出土土器

中葉～8世紀前葉に形成されたものと推定される。

D横穴墓群

本群は新発見の横穴墓群であり、したがって小田原市史には掲載されていない。2基を調査したが、隣接する北側の緑地保存地区にまだ数基存在することが確実と見られている。

構造的にはともに、隅丸長方形の玄室に羨道の付く古式タイプであり、1号墓からTK209型式に比定される須恵器壊身、提瓶が出土し、また2号墓からはTK209型式に比定される須恵器壊身、提瓶・平瓶などの土器と、直刀・鉄鎌・装身具などが出土した。また、両者とも北宋錢やかわらけを伴っており、中世に開口していたことは明らかである。

本群の形成時期は6世紀末～7世紀前半と考えられる。

E横穴墓群（羽根尾横穴墓群）

羽根尾地域で最大規模の横穴墓群であり、既開口のものだけでも33基が確認されているが、実体は50基に近い規模と考えられる。今回は開発範囲で4基の調査にとどまり、その他は史跡保存される予定である。調査された4基の内訳は3基が既存の横穴墓、1基が新発見の横穴墓である。

1号墓は標高45mに単独に存在し、楕円形の玄室にドーム形天井を呈する。2～4号墓は1段低い標高43m付近に等間隔に横一線に並び、広い前庭部を共有する。いずれもアーチ形構造を呈し、羨門部にC群上段支群と同様の特徴をもつ。また、1号墓羨門部床面と2号墓天井の間に貫通孔が生じていた。

副葬品は2～4号墓から8世紀中葉に比定される完形の相模型壊が1点づつ出土しただけである。

本群の形成時期は1号墓が形態的特徴より7世紀前葉、2～4号墓が8世紀前葉と推定される。

10. まとめ

羽根尾横穴墓群は、県下で最も数多くの横穴墓分布が知られる大磯丘陵にあっても、規模・密集度に於いて屈指のものであり、得られた資料も実際に多岐にわたる。

まず、全体の様相から造墓活動の在り方が辿れ、特に、一つの谷戸を共有するA～C群に於いては構造・附帯施設・出土遺物の検討によってつぶさ

にすることが可能と考えられる。また、D群の北側には本地区で最も古式の家形横穴墓が開口する別の一群が存在し、E群の西方にも人物線刻画の描かれた「つくだ横穴墓群」、さらに、D群の分布する丘陵先端部には古式タイプで占められる「才ノ神横穴墓群」が存在しており、前二者は今後調査予定にあることから、地域全体の様相が次第に明らかにされるものと思われる。

次に注目されるのは、A群1号墓・B群7号墓・C群前庭部・E群4号墓などで検出された薄い火山灰層である。現時点では延暦年間の富士火山灰に比定されるという見解が有力であり、今後の分析結果如何では、墓前祭祀の終焉、盗掘開始時期などが明らかになると期待される。

その他にも、同時期の集落址との関係、横穴墓の構造と附帯施設、副葬品などといった問題を、今後追加される調査成果を踏まえて、多角的に検討していきたいと考えている。

参考文献

杉山博久 1986 「羽根尾堰ノ上遺跡」

小田原市教育委員会

杉山博久 1995 「小田原市史」史料編 原始・古代・中世I 小田原市

あかさか
8 . 三浦市赤坂遺跡

中村 勉

- 1. 所在地** 三浦市初声町三戸ハタおよび下宮田字赤坂
- 2. 調査主体** 赤坂遺跡調査団(団長 岡本勇)
- 3. 調査担当者** 中村 勉・諸橋千鶴子
- 4. 調査目的** 遺跡範囲内における住宅建設および土壌改良に伴う調査
- 5. 調査期間** 昭和52年に本格的調査を開始し平成8年8月現在で16次を数える
- 6. 調査面積** 延べ約7,000m²

7. 遺跡の立地

遺跡は京浜急行三崎口駅より南西約250mほどの位置にある。三崎海蝕台地上にある。この台地は面積約70,000m²余をもち、台地全面にわたって遺物の散布をみる。台地の標高は約50m、南から北にかけての勾配をもつ。台地は4つの谷によってミツバ状となっている。谷と台地との標高差は約30mあり、急峻な崖は天然の要塞となっている。台地からの眺めはよく、西に相模湾をはじめ伊豆半島・富士山・江ノ島などが展望できる。

台地から約1.5km西に縄文早期の標式土器を出土する三戸遺跡や、古墳時代中期の子持勾玉を出土する三戸祭祀遺跡また光照寺裏古墳群などがある。弥生時代に関しては、1988年から1989年にかけて実施した三戸・小網代地区詳細分布調査の結果がある。赤坂遺跡を中心とした半径1km以内には、弥生時代後期を中心としたがんだ畑・旧園芸試験場・釜田・出口南遺跡などがあり、これらの遺跡が時期的・距離的に赤坂遺跡と強く結びついていたであろうことが予想されるようになった。三浦市西部の弥生集落の展開を考えるうえで、今後赤坂遺跡とその周辺遺跡との関係を具体的に明らかにする必要がある。

8. 調査の経緯

赤坂遺跡の調査には様々な原因がある。一つには京浜急行の延伸によって從来農業地域であったものが急速に市街地化していくなかでの住宅建設および土地区画工事、さらには農業の周年栽培に

おける耕地の劣化を「天地返し」によって土壌改良する工事などがある。とりわけ「天地返し」は農民にとっても作物の収穫という死活問題を抱えており、文化財保護と生活権との間で行政側はその対応に苦慮している。

9. 調査の概要

15次までの調査によって、赤坂遺跡が旧石器時代から古墳時代にかけての複合遺跡であることがわかった。旧石器時代に関するものとしては第12次調査がある。この調査によって赤坂遺跡の上限を約15,000年前まで引き上げることができた。縄文草創期としては、第1次調査および第11次調査でいずれも弥生時代住居の覆土中であったが、有舌尖頭器および尖頭器を検出している。縄文時代の土器として、早期・中期の土器片が数は少ないが出土している。古墳時代のものとして、五領期に比定される住居を第14次調査において検出することができた。今回の発表は各時代にわたる成果のうち、もっとも量的にまた質的にも突出した内容をもつ弥生時代について若干の説明を行うこととする。

<遺構>

赤坂遺跡からは現在までのところ107軒の住居、5基の方形周溝墓、22条の溝状遺構が検出されている。住居は宮ノ台期のものが28軒、久ヶ原期のものが78軒、五領期のものが1軒ある。このことから赤坂遺跡は、弥生時代中期後半から古墳時代前期にかけ継続的に集落が営まれていたであろうことがわかる。住居は台地全面にみられ、一部谷間にもつくられている。時期的にみると、宮ノ台期の住居は台地の中央から北に延びる小台地に多く、久ヶ原期のものは中央から南および北西にむかって突き出た小台地に多くみられる。住居の規模として、第1次調査および第6次調査において長軸14mを超える巨大住居が2例検出されている。この巨大住居は距離にしてわずか24mほどしか離れてはいない。時期的に第6次調査例が古いことが出土した土器によってわかる。



第1図 遺構配置図

巨大住居の北側に方形周溝墓が発見された。3基の方形周溝墓はいずれも宮ノ台期のものであった。1号はサブソイラーの破壊をうけ規模は不明。2号は東西16.5m、南北16mの規模、溝の最大幅は2.4m、深さは1mを超える。3号は東西17.2m、南北17mほどの規模をもつ。中央部に主体部（長軸2.7m、短軸1.5m）を認めた。方形周溝墓からは完形に近い5個の壺形土器を検出した。そのうち3個は胴中央部に穿孔が施され、他の1個には女陰のマークが刻されていた。

この地点からさらに100m南側に2基の方形周溝墓を確認している。残念ながら調査範囲の都合でその規模は不明であった。溝底より10cm浮いた位置に3個の壺形土器を出土している。いずれも宮ノ台期のものであった。壺形土器にみる特徴から、南側の周溝墓の方が新しい時期のものと考えられる。

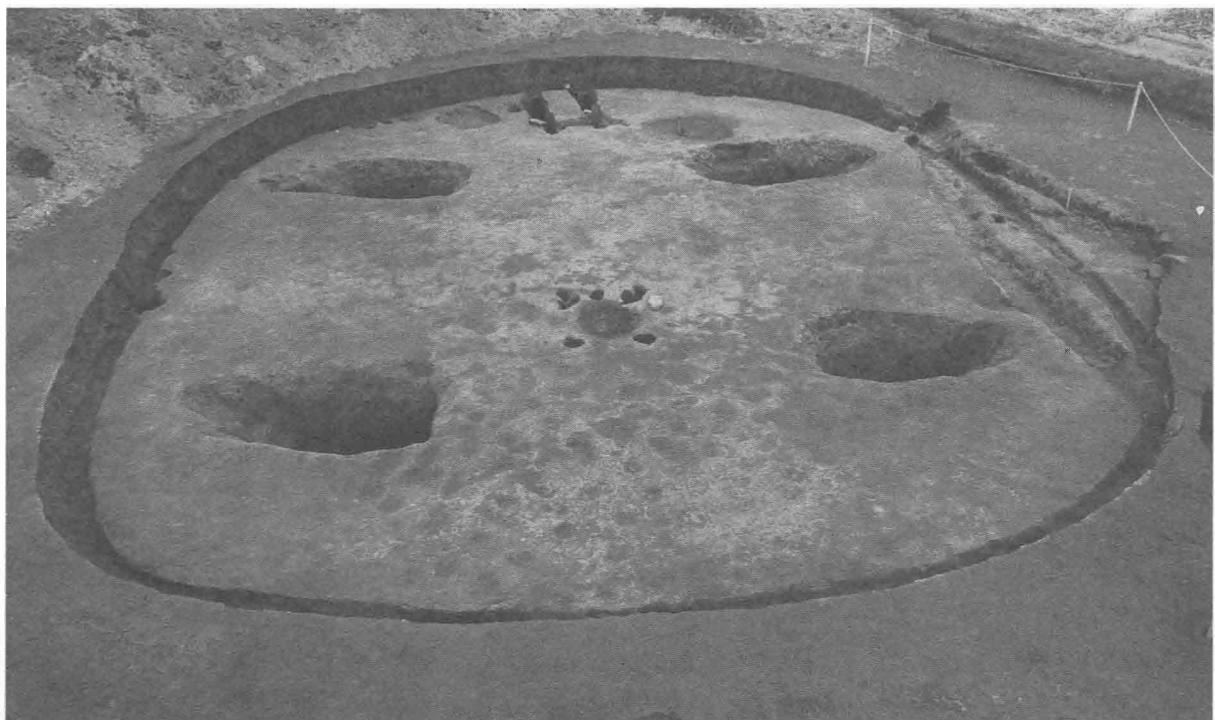
三浦半島内で長軸10m以上の規模をもつ住居は、横須賀市佐原泉遺跡で2軒、赤坂遺跡で3軒、合計5軒を数えるのみである。規模の点で15m以上をもつものは、弥生中期においては横浜市三殿台遺跡306B住と赤坂遺跡の2例にすぎない。また、宮ノ台期の方形周溝墓としては、三浦半島内では横須賀市ひる畠遺跡に次いで2例目となる。規模

の点でひる畠例が25mを超えるものに対し、平均16mクラスで巨大とはいえないものの大型の部類にはいるものと考えられる。

＜遺物＞

土器は須和田式土器・宮ノ台式土器・久ヶ原式土器・五領式土器と、弥生時代中期から古墳時代前期にかけての土器群を概観することができる。須和田式土器は、第6次・第12次の調査で確認された。この分布範囲は、巨大住居と方形周溝墓との中間的な位置にある。また宮ノ台期の古手に属する深鉢形土器内面に鎖状文をもつ土器もこの付近を中心に出土している。土器の面からみるかぎり、この巨大住居周辺が赤坂遺跡の原点と考えることもできる。宮ノ台式土器の中には、橋口尚武氏の提唱する三宅式土器の特徴である胴部沈線文をもつ土器もある。弥生時代後期の土器の中にはタタキ目をもつ土器、網目撚糸文をもつ土器、櫛描波状文をもつ土器など外来的な要素をもつ土器も出土している。古墳時代初頭においては受け口辺をもつ土器も出土しており、土器の内容はきわめて多様である。

土製品としては円盤・土玉・管状土錘などがある。とりわけ土製円盤は有孔・無孔ともに数多く出土している。



第1次調査5a号住居

石器は所謂大陸系磨製石器群を多くみる。とりわけ小型扁平片刃石斧の数が未製品を含め多い。大型蛤刃石斧は8例ほど確認されている。抉入石斧は採集品が1例ある。石鏃は有孔磨製石鏃が3点、打製のものが16点ある。特筆すべきものとして磨製石剣がある。現在までのところ4点出土している。出土地点は住居からのものが3点、方形周溝墓から1点出土している。また大型の凹石が8点出土している。いずれも30cm以上のもので、第14次のものは両性具有の形態をもつ特殊なものであった。

<金属器>

鉄製品として板状鉄斧が2例、短剣形鉄剣1振、青銅製品として銅環4、銅鏃1、有鉤銅釧1、銅釧6などがある。金属器はいずれも後期に属する住居から出土している。三浦半島内でこれだけ多くの青銅製品を出土する遺跡はない。

<装飾品>

ガラス小玉10点、大小勾玉11点、管玉4点などがある。ガラス小玉はいずれも薄いブルーの色をもち、直径4mm～2mmと小さい。勾玉は翡翠製のものが2点、滑石製のものが6点、細粒凝灰岩製1点、土製勾玉2点となっている。いずれも住居からの出土。とりわけ細粒凝灰岩のものは頭部を欠損しているが推定で7cmほどあり、勾玉としては大型に属する。管玉はいずれも滑石製で最小は直径2mm、最大は直径7mmほどである。なお、第8次調査で住居内にある貝層中からベンケイ貝製の貝輪・骨製カンザシがそれぞれ出土している。

<骨角器>

骨製のヤス2点が第1次・第15次の調査で出土している。第1次のものはかえしのあるもの、第15次のものは針状のもの。また同じく第15次の包含層より鯨骨製と思われる尖頭器（ヤス？）1点が出土している。

<自然遺物>

穀類として炭化米が、またモモ・クルミなどの炭化種子がある。動物のものとして、シカ・イノシシおよび魚骨・魚歯がある。また貝類としてアワビ・サザエ・カキ・バテイラ・ハマグリ・スガイ・サラガイ・タマキガイなどが検出されている。

<その他の遺物>

第10次調査8号住より炭化した布片を発見している。麻布と思われるが詳細は今後の課題としておく。

10. まとめ

赤坂遺跡は遺構の規模および出土遺物の量また内容の点で、三浦半島を代表する弥生集落であることはまちがいない。以下、赤坂遺跡の特徴を列記し、併せて今後の課題について指摘しておく。

(1) 巨大住居をもつ集落であり、方形周溝墓の規模も住居と対応するかのごとく大型である。

(2) 巨大住居が遺構の点で数が少ないよう、遺物の面でも特殊なものが多い。青銅製品をはじめ、磨製石剣を一つの遺跡で4点出土する例もない。

(3) この集落の経済的基盤に水稻耕作をあげることは、出土する炭化米などから裏づけられることではある。しかし住居内に残された石鏃とシカ・イノシシの骨や歯、また骨製ヤスと管状土錘と魚骨・魚歯などをみれば、その基盤は狩猟や漁撈なども組み込んだ内容であったことがうかがわれる。

(4) 数は少ないが土器や有鉤銅釧などの特徴に、駿河湾から相模湾までの範囲における類似性を認めることができる。赤坂遺跡の地理的位置をみれば、相模湾との関係が漁撈などを通じ、強固なものであったことが考えられる。その点で橋口尚武氏の「三宅式土器」の存在は別にしても、伊豆と三浦半島の関係を海を通して考えることは重要な視点であろう。

(5) 赤坂遺跡は周辺の遺跡と関連をもちながら、拠点集落の位置を少なくとも弥生後期までは持ち続けていたことが、住居の配置・遺物の面でもわかる。しかし古墳時代に入ると急速に住居数は減少し、以降集落としての遺構を検出することはできていはない。わずかに表採という形で、須恵器片が発見されるのみである。

今後の課題として、赤坂遺跡の集落がいつどのように解体していったのかを明らかにすることである。また弥生時代における海蝕洞穴との関係をどうとらえるのかという二つの大きな課題がある。今後は遺物を整理しながらさらに細かな分析を行い、赤坂遺跡の意義をより深化させていきたい。

次数	調査・調査の年	調査地点	調査者と団体	調査面積	主要遺構	主要遺物
一	1987年(明治30)	飯森台	佐藤伝蔵・金沢梯次郎			
一	1929年(昭和4)	赤坂(御用邸道路)	赤星直忠			
一	1948年(昭和23) 1949年(昭和24)	ハタ242-1	川上久夫・岡本勇			鉄斧
一	1966年(昭和41)	ハタ242-1(学術)	岡本勇 立教大学		住居15軒	有舌尖頭器器・銅環
一	1976年(昭和51)	ハタ320-2(天地返し)	神奈川県教育委員会		住居2軒	
一	1977年(昭和52)	ハタ246-3(宅地造成)	横須賀考古学会		溝1条	
1	1977年(昭和52)	ハタ320-1(範囲確認)	横須賀考古学会	約800m ²	住居9軒 (巨大住居1軒) 溝4条	マイクロコア・骨製ヤス 勾玉2・有孔磨製石鏃2 ミニチュア土器11 管状土錐・凹石
2	1985年(昭和60)	ハタ230-1(店舗)	横須賀考古学会	約200m ²	住居5軒・溝3条	
3	1989年(平成1) 1990年(平成2)	下宮田482 (土地区画整理)	赤坂遺跡調査団	約680m ²	住居4軒・溝6条	石劍 小型磨製石器未製品
4	1989年(平成1)	大原6-1(店舗)	赤坂遺跡調査団	約100 ²	溝1条	
5	1990年(平成2)	下宮田478-1 ハタ71~73・232~234 235-1・241-1・242-1 243・245-1・247-1・248 ~253・255・256・257-1 258-1・259-1・260-1 263-1・264-3・265-1 266-4・268-1・269-1 272・273-2・276-1・3-4 277-2・278・279・282-1 284~286・287-2・288 318・319-1(確認)	赤坂遺跡調査団	約320m ²		
6	1991年(平成3)	ハタ285(確認) ハタ319-1	赤坂遺跡調査団	約400m ²	住居3軒 (巨大住居1)	
7	1992年(平成4)	ハタ320-2(確認)	赤坂遺跡調査団	約100m ²	住居1軒	ミニチュア土器
8	1992年(平成4)	下宮田481・483-1 (駐車場)	赤坂遺跡調査団	約1000m ²	住居7軒・貝塚	骨製カンザシ・貝輪 管状土錐3・凹石
9	1992年(平成4)	丈しが久保71(宅地造成)	赤坂遺跡調査団	約360m ²	住居5軒	凹石
10	1993年(平成5)	三戸237-1(天地返し)	赤坂遺跡調査団	約400m ²	住居21軒 溝1条	短剣形鉄剣・銅環3 管玉・石劍・勾玉3 ガラス小玉2・布片
11	1993年(平成5)	ハタ245-1(天地返し)	赤坂遺跡調査団	約350m ²	住居18軒・溝4条	鉄斧・ガラス小玉2 炭化米・尖頭器・凹石
12	1994年(平成6)	ハタ311(天地返し)	赤坂遺跡調査団	約520m ²	住居2軒 方形周溝墓3基	勾玉・管玉 旧石器類多数
13	1994年(平成6)	ハタ284・285・286(確認)	赤坂遺跡調査団	約350m ²		ガラス小玉・凹石
14	1995年(平成7)	ハタ260-3(宅地造成)	赤坂遺跡調査団	約1195m ²	住居25軒 方形周溝墓2基	石劍・銅鏃・勾玉3 ガラス小玉2・凹石
15	1996年(平成8)	ハタ284(農地造成)	赤坂遺跡調査団	約900m ²	住居10軒 溝1条	勾玉・管玉2・銅鉤3 管状土錐5 ガラス小玉3 ミニチュア土器 有孔磨製石鏃

表1 調査成果表

9. 津久井町青根馬渡遺跡群No.4 遺跡

河野 喜映・池田 治

- 1. 所在地** 津久井郡津久井町青根字馬渡
1,610-1他
- 2. 調査主体** (財)かながわ考古学財団
- 3. 調査担当者** 河野喜映・池田 治
- 4. 調査目的** 建設省宮ヶ瀬ダム道志導水路建設に伴う事前調査
- 5. 調査期間** 平成7年4月4日～平成8年3月28日
- 6. 調査面積** 約3,800m²
- 7. 遺跡の立地**

青根馬渡遺跡群は、相模川の支流である道志川によって形成された河岸段丘上に展開する。周辺の地形は、道志川左岸では急峻な山がせまり、川沿いは切り立った崖となっている所がほとんどであるのに対して、右岸では4段の段丘が形成されていて、各段丘上は比較的緩やかな傾斜の地形となっている（図1）。

No.4 遺跡は、道志川右岸の最も低位の段丘と下から2番目の段丘上にかけて所在し、蛇行する道志川へ突出する半島状の地形に立地している。現在は、道志ダムでせき止められた人造湖である奥相模湖に面している。遺跡地の南側は上位段丘との間を画する急斜面となっていて、それ以外の三方は道志川によって侵食された崖となっている。

遺跡内はおむね北へ向かって下がる緩やかな斜面となっていたが、西半分はかつての水田造成によって雛段状になっている部分もあった。標高は、320m～340mほどである。

8. 調査の概要

調査対象範囲は、半島状の段丘の縁に沿った逆V字形の部分である。調査を進めるにあたって、地形に従って便宜的に、調査区をA～G区に分割した（図2）。

近世以降 掘立柱建物址がF区で3棟発見された。柱穴は方形を基調とし、残っている掘り込みは浅い。2棟は東西棟で1間×2間分が確認されているが、攪乱されていたり調査区外へ続く部分があるため、これより長い可能性もある。1棟は



第1図 遺跡位置図 (1/25,000)

攪乱等により、側柱3間分が確認されただけである。他の2棟と同じ東西棟と考えられる。

道状遺構がB・C・D・G区で4条発見されたが、G区のものは硬化面をもたない溝状の遺構である。また、道状遺構を切る円形土坑も発見されている。

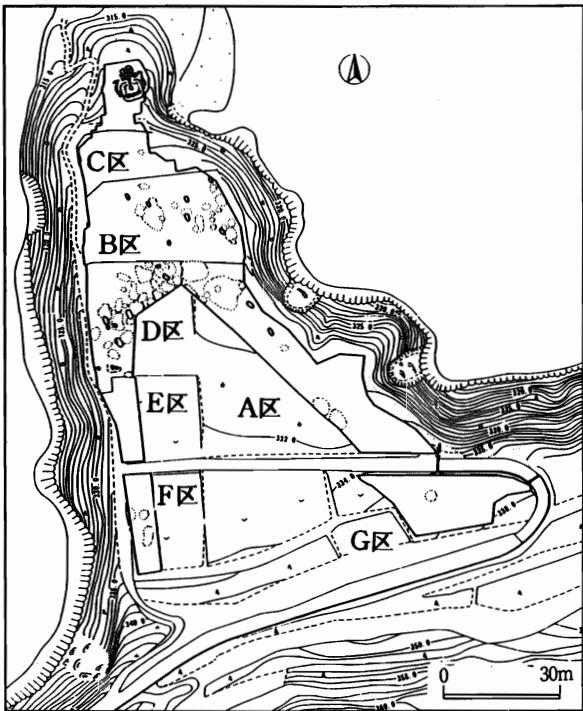
D区北西部では、江戸時代後期「文化・文政」期の紀年銘をもつ墓石群がまとめて置かれていて、その近くで円形の墓壙が5基発見された。いずれもかつて改葬されたものである。

近代まで下ると思われる遺構に、配石土坑と配石遺構がある。前者は馬を埋葬したもので、2基並んでいた。後者は地表に露出していたものであるが、周辺の表土層からは近世以降の陶磁器片が出土している。

中世 長方形の土坑が1基発見されたが、近世まで下る可能性もある。遺物はない。

古代 土坑5基とピット、道状遺構が発見された。土坑はA・D・F区に散在し、A区南端でピット群とともに2基存在する他は、いずれも単独である。F区にあるものは覆土に木炭が含まれ、炭窯（伏窯）と考えられる。

道状遺構はC区で2条発見されたが、いずれも削平されているため、長さは短い。



第2図 No.4 遺跡全体図

弥生時代 落とし穴状の土坑が1基、A区南端で発見されたが、遺物は出土していない。底部は岩盤に達していて、底部施設はなかった。

縄文時代 草創期、早期、中期、後期の遺構・遺物が発見された。草創期の遺物集中地点はA区の南寄りにあり、2つのブロックに分かれている。この場所は南から下がってくる斜面の下位で、やや緩やかになっていて、最も低いところは自然流路となっている(図3)。出土層位は黄褐色ローム層上部で硬質な層であるが、相模野台地のローム漸移層に相当する。出土遺物は土器、石器、剝片で、土器は隆線文土器、爪形文土器等の破片があり、石器は槍先形尖頭器が1点ある。槍先形尖頭器は2つのブロックから出土したものが接合した。石器、剝片の石材はほとんどが凝灰岩で、本遺跡の周辺で入手できるものである。

早期の遺構は、B区からA区北半・D区にかけて集石・礫群が約60基発見された。出土層位から早期中葉から前期初頭のものと考えられ、田戸下層式土器を伴うものもある。これらは掘り込みをもち少数の礫を含むもの、掘り込みに礫を充填するもの、掘り込みに縁石を伴って礫を充填するもの、掘り込みが無く密集するもの、掘り込みが無く散在するものなど、様々な形態が見られる。礫は被熱しているものもあるが、顯著に赤化してい

るものは少なく、掘り込み内に焼土を伴うものは無い。

中期の遺構は、落とし穴状土坑、炉址、焼土址、配石、集石・礫群などがある。遺構の分布は早期の遺構分布とほぼ同じであり、B区からA区北半およびD区に広がる。落とし穴状土坑はローム層の上面や早期の遺構確認面で発見されたものもあるが、早期の集石・礫群を切っているものや、覆土に中期包含層の土が入っているものが多く、ほとんどが中期に属するものと考えられる。落とし穴状土坑以外の遺構は、中期の遺構確認面で発見されたものである。

後期の遺構は、柄鏡形(敷石)住居址1基と遺物集中地点だけである。柄鏡形(敷石)住居址はC区北端の一段低い段丘上にあり、北へ向かって緩やかに下がる地形となっている。この段丘はローム層が堆積していない新しいものである。現状では段丘上の平坦地は狭く、竪穴住居を2基作る広さはない。発見された住居址は、土層流失により北側半分の掘り込みが残っておらず、竪穴の壁を検出できたのは南半分だけであった。主体部は方形を基調とし、中央やや北よりに炉が設けられ、北側に張出部がある(図4)。床は柔らかく、硬化しているところは無かった。炉は方形を呈し、北と東に縁石が残っていたが、南と西は抜き取られて残っていなかった。炉内では、焼土は検出されていない。炉から出入口部および張出部は敷石されている。この他の施設に、環礫方形配石と周堤礫がある。環礫方形配石は、竪穴内の壁からやや内側に作られていて、出入口部の敷石部分には無かった。礫はほぼ床面と思われる高さに並べられていて、これに沿って一回り広い幅で、焼土が堆積していた。焼土中からは特殊な遺物は発見されていないが、環礫方形配石の南辺中央で加曾利B式土器口縁部が出土し、近くから礫石錘1点が出土している。環礫方形配石は拳大の礫を3~4列に並べているのであるが、所々に密度の低い場所があり、このような所では下部で柱穴が検出されている。いくつかの柱穴では、柱痕の上部に炭化した木材が観察された。周堤礫は主体部を取り囲むように配されるものであるが、この住居址では特異な配置がされていた。張出部側(北辺)か

ら東西両辺の途中までは、主体部の外側60cmほどを巡るのであるが、東西両辺の南寄りでは内側に入り込んでゆき、南辺は竪穴内部の環礫方形配石と重なる位置に配置されていた。また、南辺の周堤礫は石組の状態がよく残っていて、周堤礫の内側を削るように並べられていた（写真3）。南辺以外の3辺すなわち竪穴外部に配置されていた周堤礫は、石組みが崩れたり近代の土坑に壊されたりしていたが、東西両辺では石組みの核となる石は深く埋められていたので、掘方の状況から、配列は大きく動いていないことが判断される（写真2）。張出部敷石の部分では、周堤礫は敷石の上に重なって検出されたが、出入口部分には置かれていなかった。

規模は主体部竪穴が5.2m×5.2m（推定）、張出部敷石がおよそ2.6m×2.8m、環礫方形配石が幅20cmほどで4.1m×4.1m、周堤礫がおよそ6.0m×7.6mである。

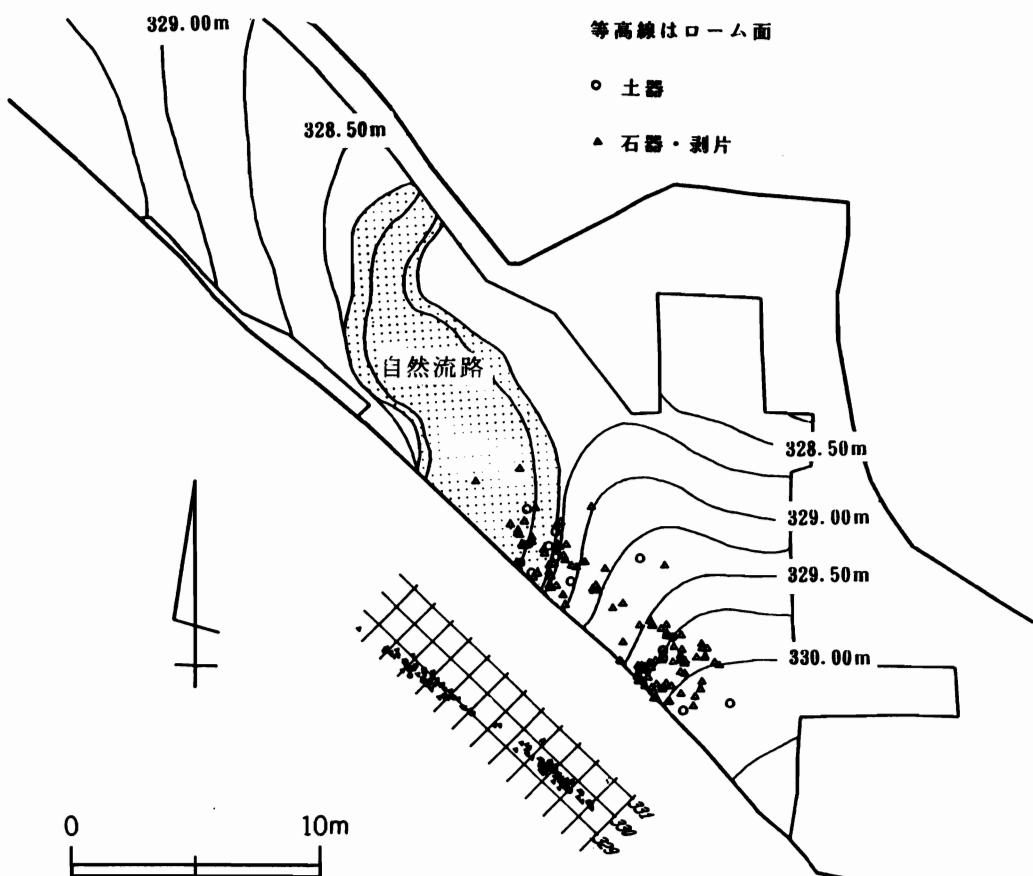
後期の遺構・遺物は、住居址1基のほかはF区の遺物集中地点だけである。

9. まとめ

本遺跡では、縄文時代から近代までの各時代の遺構・遺物が発見されたが、中心となるのは縄文時代のものである。遺構は縄文時代早期のものが最も多く、次いで中期のものが多いのであるが、数の少ない草創期と後期について新しい知見および問題点が明らかになった。

縄文時代草創期では、剝片の他はわずかな量の土器と石器であるが、津久井郡内では土器の出土は初めての例である。遺物は2つのブロックに別れて出土したが、両ブロックから出土した槍先形尖頭器が接合したことから、2つのブロックは時間差のないもの、または元は一つのまとまりであったものと考えられる。隆線文土器の口縁部片と爪形文土器と思われる底部が出土しているが、これらの土器の個別層位や2つのブロックの剝片の接合関係などは、今後の整理での課題である。

縄文時代後期では、柄鏡形（敷石）住居址の施設構造と性格についての問題がある。環礫方形配石は住居構造の一部なのか、周堤礫は住居に伴う



第3図 縄文時代草創期遺物分布図

施設か否かは、解明されていない問題であるが、今回新しい知見を加えることができた。本遺跡の例では、柱穴と重なる部分では環礫方形配石の礫に隙間ができていることと柱材の一部が炭化して残っていることから、環礫方形配石は住居の柱が立っている時点で既に置かれていると考えられること、周堤礫は住居の外側を巡らずに内部にまで作られていることから、住居を意識しながらも住居廃絶後に配置されていること、の2点である。



写真1 J 1号住居址

また同時期の集落（居住域）とかけ離れた場所に作られた住居であること、性格を考えるうえで一考を要する。いずれも特異なケースであることとも考えられるが、既存の資料を再検討する上で参考にできるものと思われる。

未だ細かい検討を経ていない時点での概要であるので、今後の整理作業において、上記の問題点を含めて慎重に検討して行きたい。



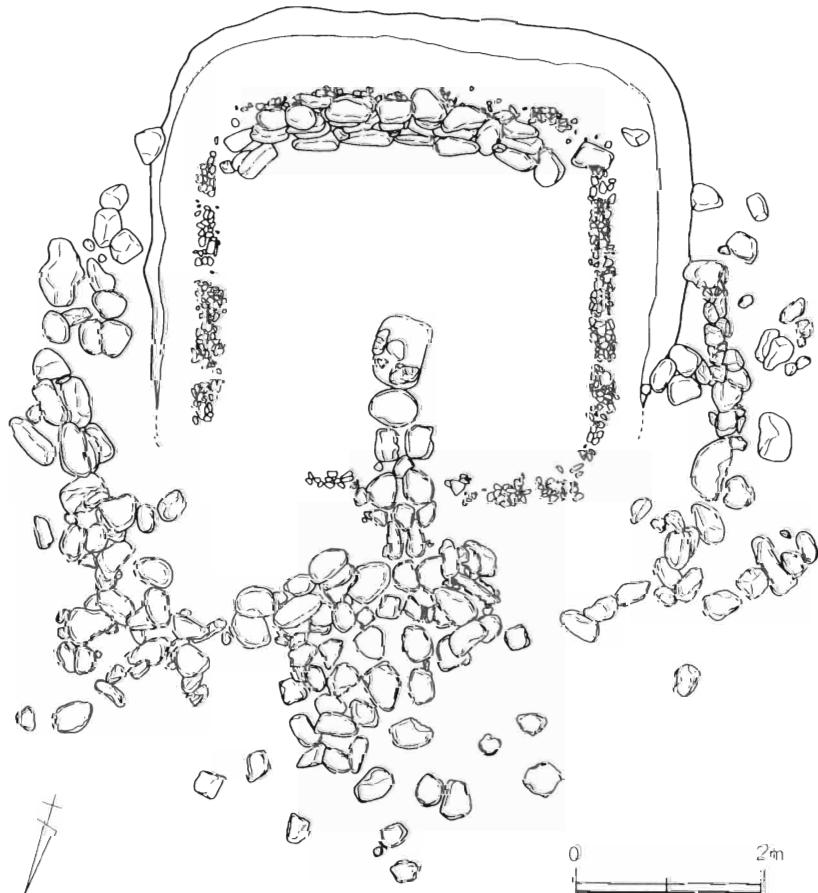
写真2 J 1号住居址掘方



写真3 周堤壁南辺の石組み状況



写真4 J 1号住居址炉



第4図 J 1号住居址

おおつかひがし
10. 横須賀市大塚東遺跡

大坪 宣雄・北爪 一行

1. 所在地 横須賀市長沢字大塚3918-1-他
2. 調査主体 横須賀リサーチパーク計画基盤整備事業地内埋蔵文化財発掘調査団
3. 調査担当者 大坪宣雄・北爪一行
4. 調査目的 基盤整備事業に伴う記録保存調査
5. 調査期間 平成6年3月14日～平成6年9月12日
6. 調査面積 4,500m²
7. 遺跡の立地

大塚東遺跡は三浦半島東岸寄りの丘陵上に位置する。この丘陵は久里浜湾南岸の千駄ヶ崎を東端として、西岸の葉山町長者ヶ崎に至るもので、地質的には第三紀三浦層群に分類される逗子層を基盤層としており、三浦半島の主要な活断層である北武断層と武山断層に南北を挟まれている。特に武山断層は本遺跡の至近距離を通過しており、表土下の土層中に数多く見られる地割れ、断層はこの影響下に生じたものと推測される。丘陵の標高は、241mの大楠山を最高点とし、本遺跡付近では100m～130m前後を測る。本遺跡の載る台地

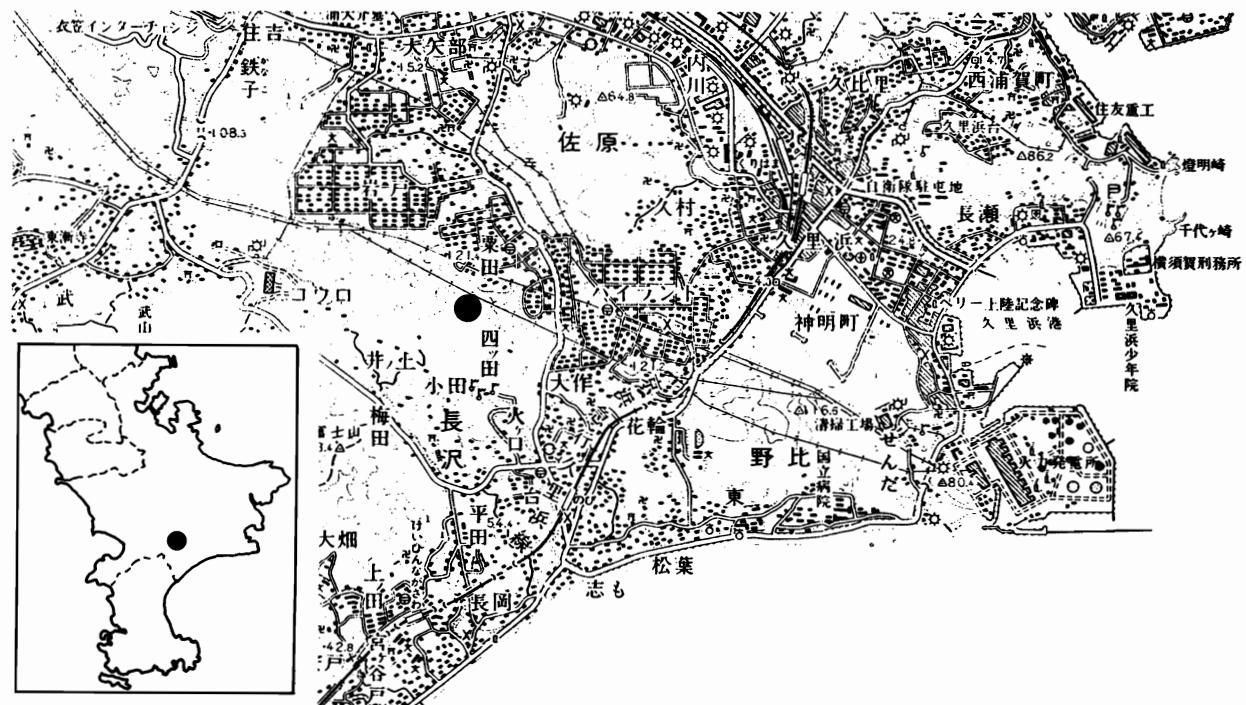
は標高137mを測り周辺での最高点となっている。台地頂部は東西120m、南北100m程の範囲で比較的平坦な広がりをもち、遺跡はこの南側部分の南向き緩斜面上に展開している。

遺跡の現況は畠地で、北側150m程を隔てた位置まで宅地開発の波が迫っているが、台地北側の沢にはトウキョウサンショウウオ、サワガニなどが生息し、南側の谷戸内には畠作地、水田が広がり昔ながらの景観をとどめている。

周辺には周知の遺跡が少なく、発掘調査の行われた例も少ないが、遺跡の西側50mの位置には弥生時代後期の小集落跡の大塚西遺跡、東側400mの位置には切石の小石室を持つかろうと山古墳がある。横須賀市域における先土器時代の遺跡は極めて少なく、相模湾岸の長井台地遺跡で調査が行われたほかには、本遺跡北側1.7kmに位置する泉遺跡で尖頭器が出土したのみである。

8. 調査の経緯

本遺跡は県の遺跡番号154遺跡として周知の遺物散布地である。昭和62年度に、この地域を対象にリサーチパーク開発計画が持ち上がったため、



第1図 遺跡位置図

遺跡の内容・規模を把握する必要が生じ、平成2年10月17日～平成3年2月16日の期間に横須賀リサーチパーク埋蔵文化財発掘調査団による遺跡範囲限定調査が行われた。その際の調査では、ナイフ型石器2点を含む先土器時代の遺物、纖維を含む縄文土器片などが出土し、遺跡範囲が台地頂上部の南東部分の80m×70m程の範囲に限定できることが確認されている。

今回の調査は以上の試掘調査結果に基づいて行われた本格調査である。

9. 調査の概要

本遺跡からは、先土器時代、縄文時代を中心とする遺構・遺物が検出されている。遺構は、縄文時代の集石遺構4基・焼土遺構1基・土坑10基、中・近世以降の溝6条が検出され、これらの時期に該当する遺物が少量出土しているが、今回はこれらについては割愛し、先土器時代に関する概要のみ報告する。

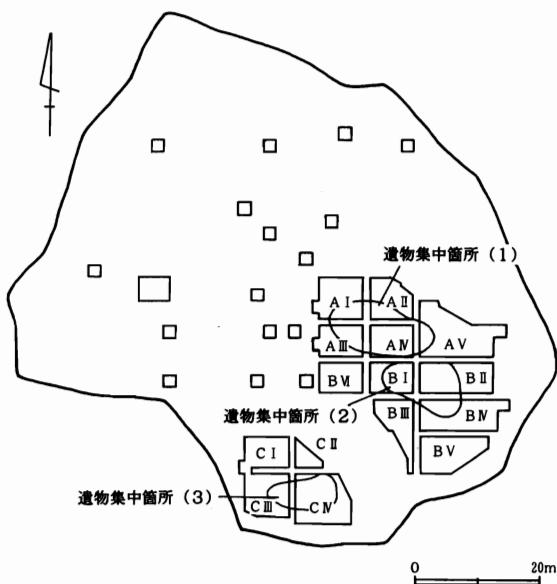
土層の状況

本遺跡では耕作土である表土層とそれ以下の土層は全般に薄く、表土層直下にローム層以下の土層がみられる部分が多い。縄文時代の土層直下には、立川ローム相当層から下末吉ローム相当層及びその風化層、基盤のシルト岩層と多彩な土層が観察されており、台地上に数多くみられる地割れ・断層と風化による地形改変の結果と考えられる。地割れ・断層は表土を除くほぼ全ての土層に影響

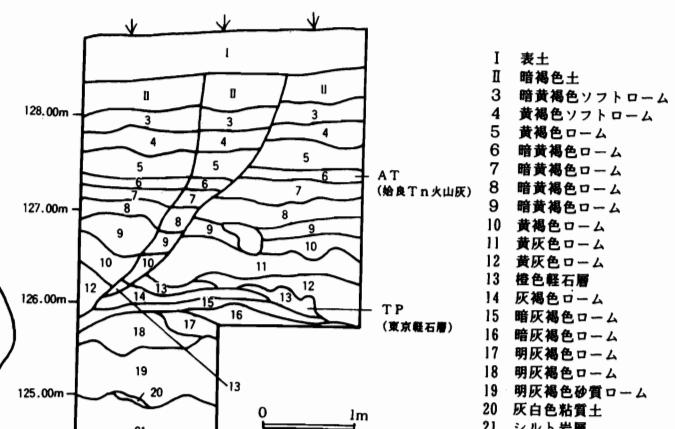
を及ぼしており、先土器時代の遺物包含層も影響を被っている（写真参照）。また、立川ローム相当の層厚が2mに充たないため土層の堆積状況を良好に観察できる土層断面には恵まれていないが、軽鉱物分析の結果から鍵層となる始良Tn火山灰層と東京輕石層が確認されている。なお、軽鉱物分析の結果によれば6層が始良Tn火山灰層に相当するが、肉眼観察では6層は暗色帶と認められる。

出土遺物

先土器時代の遺物は、平成2年度調査における出土品を含めて、ナイフ形石器8点、搔器3点、削器1点、細石刃1点、加工痕のある剝片20点、使用痕のある剝片12点、剝片244点、石核11点、礫312点の総数623点が出土している。遺物の接合状況は極めて悪く、わずかに6点が接合したのみである。出土状況は、おおよそ3箇所の集中箇所に分布しているが（第2図）、地形の改変が甚だしく、しかも緩斜面であるため遺物の移動は相当考慮を入れる必要があろう。出土層位に関しても同様に地形改変のため明らかにし得ない部分が多い。A・C地区の比較的安定した堆積状況がみられる部分については6層以上に出土分布の中心があり、3・4層のソフトローム中からの出土が多い。一方、それぞれの集中箇所の遺物の状況には、遺物集中箇所(1)からはナイフ形石器のうち6点が出土しており、遺物集中箇所(2)では安山岩の小礫



第2図 先土器時代調査区配置図



第3図 土層柱状図

の出土が多く、遺物集中箇所(3)では石核のうちの7点が出土している、といった特徴も認められる。使用されている石材は、頁岩、珪質頁岩、凝灰質頁岩、チャート、玄武岩などが多く、遺物集中箇所(2)には安山岩の礫が集中している。また、黒曜石が全遺物中で8点と、極めて少数である点は、相模湾岸にあり本遺跡同様ナイフ形石器と細石刃の出土している長井台地遺跡では使用石材の大部分が黒曜石である点と好対照を見せ本遺跡の特徴といえる。

10. ま と め

本遺跡は、現在のところ三浦半島における数少ない先土器時代の調査例として重要な遺跡といえるが、台地上の斜面地という立地状況や堆積状況の不良から層位の確認に関しては十分な結果が得

られなかった。今後の整理作業では、記録したデーターからどこまで地形改変の状況を明らかにできるかを試みてみたい。



A地区全景（西から）



ナイフ形石器出土状況①



ナイフ形石器出土状況②

11. 茅ヶ崎市臼久保A遺跡

松田光太郎・田村裕司・井辺一徳・阿部友寿

1. 所在地 茅ヶ崎市芹沢字臼久保4,222番地他

2. 調査主体 (財)かながわ考古学財団

3. 調査担当者 松田光太郎・井辺一徳・田村裕司・阿部友寿

4. 調査目的 企業庁水道局による芹沢配水池築造に伴う事前調査

5. 調査期間 平成6年10月1日～平成8年3月31日

6. 調査面積 15,480m²

7. 遺跡の立地

本遺跡は東海道線茅ヶ崎駅の北方約4kmの高座丘陵上に位置する。本丘陵は下末吉海進時に形成された比較的古い段丘であるため、河川等の浸食により、台地は深い谷に刻まれている。本遺跡も小出川とその支流によって刻まれてできた舌状台地の先端に所在する。標高は約35～45mを測る。遺跡のすぐ西を流れる小出川をはさんだ対岸の寒川の台地面より一段高いため、大山や富士山を一望することができる。

分布調査によると高座丘陵上には多くの遺跡が高い密度で存在することがわかっている。周辺の遺跡の発掘例は多いとは言えないが、本遺跡東方約600mには縄文時代後期の貝塚を伴う集落である行谷遺跡があり、また西方の寒川町では縄文時代中期の大集落である県営岡田団地内遺跡がある。また弥生時代では寒川町大蔵東原遺跡や藤沢市慶應大学湘南藤沢キャンパス内遺跡などで環濠集落が発見されている。また古墳時代では対岸の岡田越の山横穴墓群をはじめ、多くの横穴墓群が知られている。

8. 調査の経緯

本調査は神奈川県企業庁水道局による芹沢配水池築造に伴うものである。調査区は配水池本体建設部分と西側の送水管路部分に分けられるが、配水池建設工事の関係から、調査区内を東側より順次調査していく。排土を場外搬出できなかったため、各時代面毎の調査区全体写真は撮影できな



第1図 遺跡位置図 (1/50,000)

かった。

9. 調査の概要

本遺跡は近世から縄文時代までの各時代にわたって多くの遺構や遺物が発見されている。

近世

検出された遺構は以下の通りである。竪穴状遺構1基、土坑48基、段切状遺構18箇所、道状遺構6条、溝状遺構92条、畝状遺構9箇所、集石址1基、ピット74基。各段切状遺構によって形成される平坦部を単位にして、土地利用状況は特徴的である。畝状遺構が検出されるなど、その多くは耕作地である。調査区北部中央では土坑の検出数が多く、南東部にはピットが群的まとまりで集中し、北西部は遺構分布が粗である。北東部で検出された竪穴状遺構は3.7×2.5m、長方形のものである。覆土中に多くの焼土粒子、炭化物を含む。6条の道状遺構は本来連続していたものと考えられる。耕作地への通路、筆界として機能していたものであるが、硬化面は断続的に検出され、側溝のみが確認された場合が多い。溝状遺構は、排水、筆界、根切りの他に、本来畝として機能していた可能性があるもの、道の側溝であると考えられるもの等がある。規模はまちまちで、長さは2mに満たないものから、40mを越えるものまで、幅は約0.1～2m、深さは約0.1～1mである。土坑

は墓壙（K48号土坑）が1基検出された他はいわゆるイモ穴である。平面形態は方形、長方形、円形、橢円形、不整形と一定しない。長軸で2m前後のものが多いが、大型のものもある。墓壙からは人骨1体と大小2つの鉄鍋、包丁3本、煙管1本が出土した。大形の鉄鍋は頭蓋骨を覆う状態で出土しており、内外面に布が付着している。

出土遺物は僅かであり、その殆どが陶磁器の微細片で、日用雑器類である。

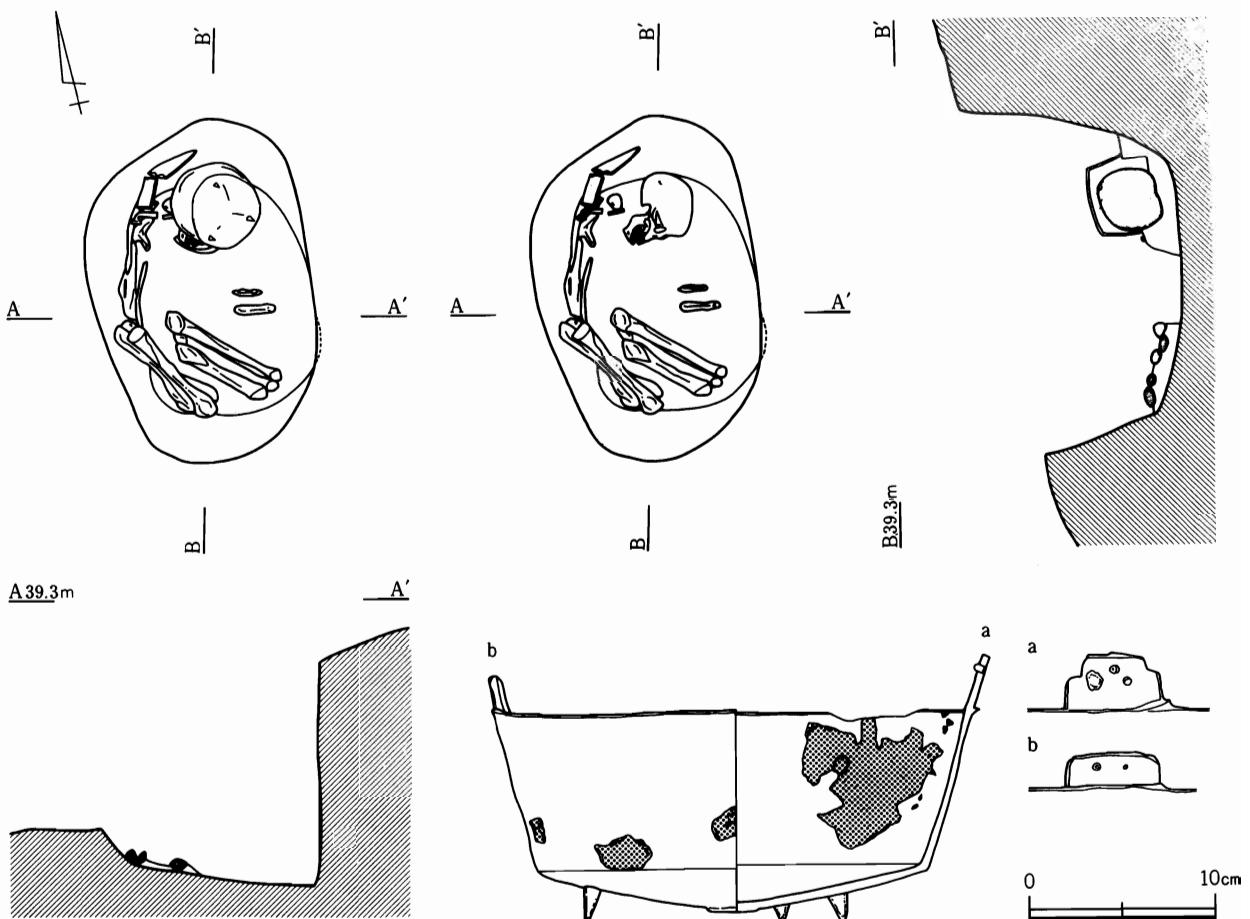
古墳時代

発見された該期の遺構は、方形周溝墓1基、古墳3基、横穴墓4基である。方形周溝墓・古墳が位置するのは、調査区西縁寄り、本遺跡の最高所付近で、遺跡の立地する舌状台地の最先端にあたる。この辺は、機械による大規模な地山削平が行われており、ローム面以上の土層の大半を喪失している。よって、これらの遺構の遺存状況も良好なものではなかった。方形周溝墓は、北および東側部分の周溝のみが確認されており、北東コー

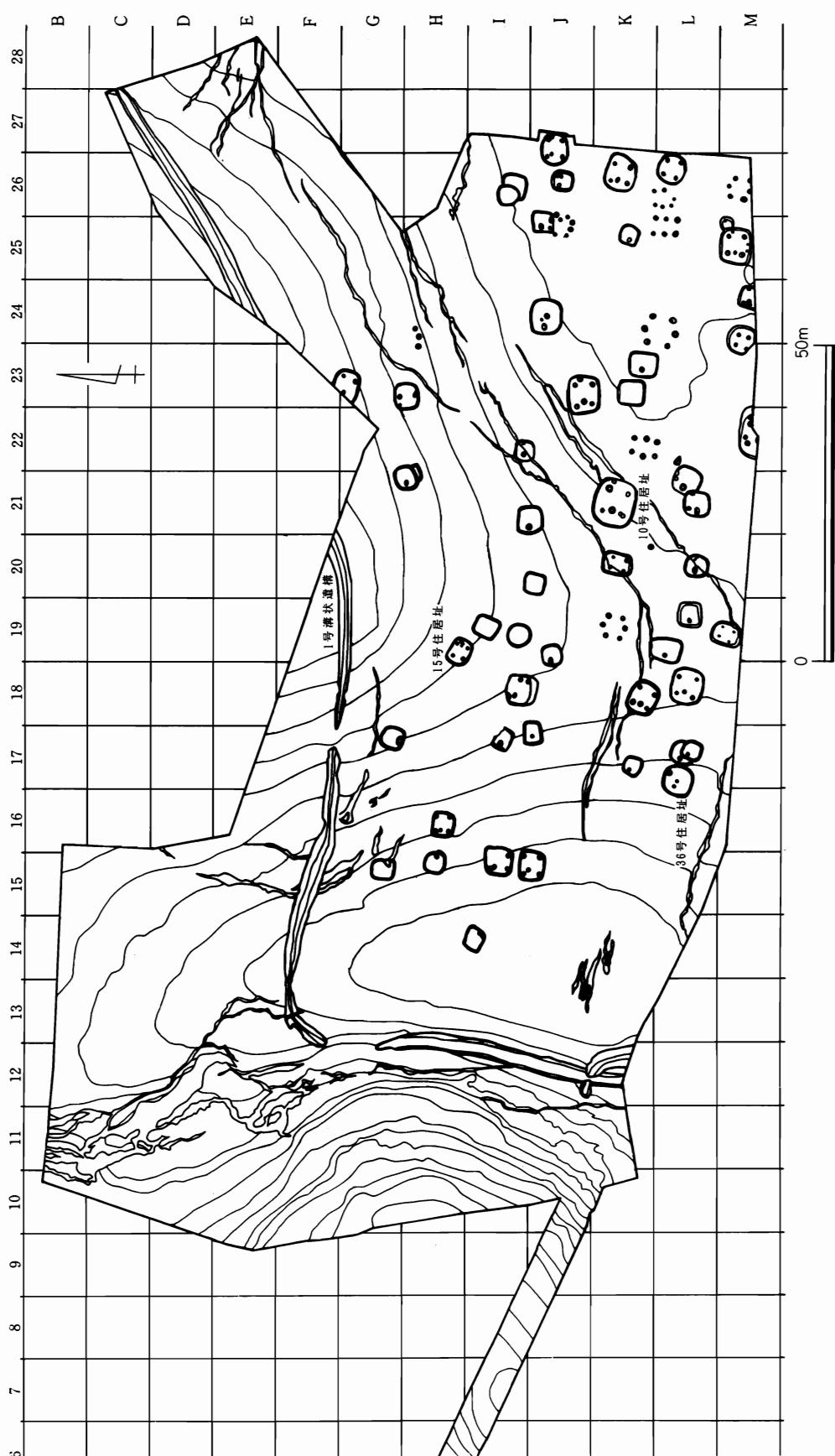
ナーにはブリッヂが設けられている。検出部分における規模は、 $18.6\text{m} \times 15.6\text{m}$ 程を計測する。マウンド・主体部は確認できなかった。古墳はすべて円墳で、直径16~18m程の規模を有している。マウンド・主体部は確認できなかった。横穴墓は、調査区西端の急斜面部において発見された。構築レベルは37m~39mで、西向きに開口している。構築基盤は非常に脆弱で、天井や壁の崩落が激しく、形態を完全に把握できるものはなかった。4基中3基から人骨が検出され、2基に礫床が施されていた。閉塞石・高棺座をもつものは存在しない。

該期の遺構から出土した遺物は下記に示す。尚、詳細な年代比定等に関しては、今後の整理作業に委ねたい。

- | | |
|---------|--------------------------------|
| (方形周溝墓) | 壺・広口壺他 |
| (古 墳) | 土師器壺・須恵器壺、小形壺他 |
| (横 穴 墓) | 土師器壺・須恵器甕、フラスコ
形瓶・鉄製品・耳環・玉類 |



第2図 K48号土坑 (1/20) 及び出土遺物 (スクリーントーン部分は布付着部分)



第3図 弥生時代全体図 (1/1,000)

弥生時代

発見された該期の遺構は、堅穴住居址47軒、堅穴状遺構6基、掘立柱建物址7基、土坑2基、溝状遺構2条である。特筆すべきことは、調査区の北縁から西縁にかけて、延長200m程が検出された、溝状遺構（V字溝）の存在である。溝状遺構は、本遺跡の最低所（標高約32m）である調査区北東端から地形に沿うように緩やかにカーブを描きながら西走する。調査区北西端でほぼ90°向きをかえて南下し、本遺跡の最高所（標高約42m）である調査区南西端で調査区外にもぐり込む。検出部の最大幅は2.5m、深さは概ね1.5m程を計測する。堅穴住居址は、調査区中央部南半の平坦部を中心に検出されており、溝状遺構に近接して発見されたものは極めて少ない。中期終末の33・44号住居址をのぞき、すべて後期後半～終末に所属すると思われる。47軒のうち、半数近くから多量の焼土・炭化物が検出された。焼土・炭化物混入層は、いずれも床面から浮いた状態でレンズ状堆積をなしている。また、大規模な地震によって生じた地割れによって、床面に数十センチの段差が認められる住居址が3軒検出された。掘立柱建物址は、2間×1間のものと、1間×1間のものとが存在するが、小規模のものばかりであった。

該期の遺物は、堅穴住居址・溝状遺構を中心に、土器・土製品・石器等が出土している。10号住居址からは、断欠品ではあるが、有孔磨製石鏃が検出された。また、15号住居址からは土製紡錘車、36号住居址からはガラス玉が発見されている。

縄文時代

遺構としては堅穴住居址1軒、炉穴29基、集石25基、土坑22基、ピット37基が検出された。堅穴住居址は早期野島式期に属するもので、平面形は5.5×5.0mの隅丸方形をなす。柱穴は特に主柱穴と思われるものではなく、小規模のピットが壁際に不規則に巡っていた。炉穴は平面形が橢円形のものや不整形に張り出したもの等があった。遺物は少なかったものの、時期は早期に属するものばかりであった。集石は規模が20cm程度のものから1.5m程のものまであり、下部に掘り込みをもつものともたないものがあった。時期も早期に属するものから中期のものまで存在した。土坑はプランが

円形のもの、長方形のもの等があった。落とし穴や墓壙としての機能が考えられるものがある。

遺物は縄文時代草創期から後期にかけての土器、石器が出土した。土器では草創期の撫糸文土器が最古である。井草式土器から稻荷台式土器まで存在するが、その量は少ない。早期は条痕文土器が出土しているが、野島式土器と早期末の土器群に限定される。中でも東海系の薄手土器（粕畠式から石山式土器）の伴出が注目されよう。前期では花積下層式、黒浜式、諸磯a・b・c式土器が存在するが、量的に多いのは十三菩提式土器であり、近畿地方の大歳山式土器も出土している。中期では五領ヶ台I・II式土器が最も多く、勝坂式や加曾利E式、曾利式土器は少量出土した。後期では称名寺式、堀之内1、2式土器、加曾利B式土器が出土している。石器では有舌尖頭器、石鏃、磨石、石皿、礫器、打製石斧、磨製石斧、石錐、垂飾品等がある。この内、有舌尖頭器は草創期、垂飾品は前期末から中期初頭のころの所産と考えられる。

10. まとめ

本遺跡では、近世、古墳時代、弥生時代、縄文時代の遺構や遺物が検出された。

近世では段切状遺構、畝状遺構、道状遺構、溝状遺構等の存在から耕作地としての利用が想定される。また、頭蓋骨を鍋で覆った人骨を出土した墓壙は当時の葬制を考える上で注目されよう。

古墳時代では方形周溝墓、古墳、横穴墓が発見され、墓域として利用されていたことが判明した。各墓とも時間差はあるものの、調査区西側の舌状台地先端部に構築されており、当時の集落との位置関係を考える上で重要な判断材料になろう。

弥生時代では後期のV字溝とそれに囲まれた集落が検出された。台地平坦部の北半分のみの発掘ではあったが、集落の北、西端を区画する溝が延長約200m、堅穴住居址47軒等が検出され、今後、周辺の遺跡との関係を考える必要があろう。

縄文時代では早期の堅穴住居址や炉穴等が検出された。また他時期では遺構は少なかったものの、前期末から中期初頭の遺物を中心に比較的多くの土器、石器が出土して、当時の生活の一端がうかがわれた。

神奈川県遺跡調査・研究発表会のあゆみ

開催日・会場	発 表 遺 跡 ・ 講 演 内 容
第 1 回 1977年6月26日 横浜市開港記念会館	横浜市亀谷狐穴遺跡、横浜市池辺第14遺跡、厚木市林天神遺跡、横浜市殿ヶ谷遺跡 藤沢市川名新林左・同右遺跡、川崎市下作延福ノ内横穴古墳、横浜市矢崎山遺跡 横須賀市鴨居養護学校遺跡、川崎市新作池谷遺跡、秦野市尾尻遺跡第II地点 海老名市本郷遺跡S O E - II 地区、川崎市影向寺遺跡、鎌倉の中世遺構、小田原城香沼屋敷址 【付】昭和51年1月～52年3月、神奈川県内遺跡調査概要
第 2 回 1978年6月25日 横浜市開港記念会館	綾瀬町寺尾遺跡、横浜市花見山遺跡、藤沢市石川山田A地点遺跡、横浜市勝田第6・16遺跡 横浜市新羽大竹遺跡、横浜市仏向町遺跡、平塚市十七ノ域遺跡他詳細分布調査 横須賀市なたぎり遺跡C地点、秦野市根丸島遺跡、海老名市本郷遺跡第8次調査 平塚市神明久保遺跡、鎌倉の中世遺構、小田原市小田原城銅門跡、川崎市馬絹古墳
第 3 回 1979年7月1日 横浜市開港記念会館	大和市上和田城山遺跡、厚木市下荻野子合頭遺跡、横浜市紅取遺跡、横浜市二ノ丸遺跡(チ3) (仮称)横浜市清水ヶ丘遺跡、横須賀市鴨居上ノ台遺跡、横須賀市長井小学校校庭内遺跡B地点 横浜市三保杉沢遺跡、川崎市下作延日向横穴墓群、平塚市向原遺跡、鎌倉市材木座小谷
第 4 回 1980年6月29日 横浜市開港記念会館	一般国道246号大和・厚木バイパス地域内遺跡、川崎市菅生水沢遺跡、相模原市下溝稻荷遺跡 横浜市神隱丸山遺跡(ル1・2)、横浜市東耕地遺跡、横浜市富士塚遺跡群、平塚市王子台遺跡 横浜市折本西原遺跡、藤沢市石名坂遺跡、横須賀市蓼原遺跡、平塚市諏訪前遺跡 川崎市新作小高台遺跡II区、鎌倉市極楽寺旧境内、小田原市小田原城評定所曲輪跡
第 5 回 1981年7月5日 川崎市中原市民館	国道246号大和バイパス地域・上草柳第3地点遺跡、秦野市平沢同明遺跡、横浜市綱崎山遺跡 綾瀬市早川天神森遺跡、横浜市道高速2号線No.6遺跡、横須賀市内原遺跡、平塚市向原遺跡 小田原市久野下馬下遺跡、川崎市久地西前田横穴墓群、横浜市富士塚地区遺跡群長者原遺跡 海老名市本郷遺跡K O E - I 地区(第9次)、鎌倉市雪ノ下・南御門遺跡 平塚市四之宮下郷・上郷遺跡 【特別講演】古人骨と遺跡調査：森本岩太郎氏(聖マリアンナ医科大学教授)
第 6 回 1982年7月11日 川崎市中原市民館	座間市栗原中丸遺跡、大和市内における縄文草創期遺跡、横浜市師岡貝塚、鎌倉市千葉地遺跡 横須賀市久里浜伝福寺裏遺跡、川崎市麻生区金程向原遺跡群、横浜市緑区受地だいやま遺跡 横浜市大原遺跡(新吉田第7)、横浜市緑区稻荷前16号墳、横浜市虚空藏山遺跡 小田原市諏訪の原古墳群總世寺裏古墳、平塚市四之宮高林寺遺跡、鎌倉市裏八幡西谷遺跡 【特別講演】考古学と造形保存：森山哲和氏(考古造形研究所長)
第 7 回 1983年10月30日 横浜市開港記念会館	海老名市柏ヶ谷ヲサ遺跡、相模原市橋本遺跡、横浜市三の丸遺跡、横浜市帷子峯遺跡 座間市中原・加知久保遺跡、横浜市黒須田・大場第1地区遺跡群、横浜市山王山遺跡 横浜市八千代田遺跡、藤沢市大源太遺跡、藤沢市片瀬大源太遺跡、川崎市影向寺址 鎌倉市蕨屋敷遺跡、綾瀬市宮久保遺跡 【特別講演】遺跡出土の動物遺体：金子浩昌氏(早稲田大学)
第 8 回 1984年7月1日 藤沢市民会館	大和市長堀南遺跡、藤沢市代官山遺跡、横浜市北川貝塚、横浜市能見堂遺跡 厚木市下依知大久根遺跡、伊勢原市比々多第一地区遺跡群、伊勢原市小金塚古墳 横須賀市なたぎり遺跡C・D地点、三浦市海外海蝕洞穴、綾瀬市宮久保遺跡 茅ヶ崎市西久保上ノ町遺跡 【特別講演】歴史考古学の現状私見：服部清道氏
第 9 回 1985年6月2日 大和市中央文化会館	川崎市山口台遺跡群・上台遺跡、横浜市上行寺東やぐら群、横浜市上恩田遺跡群杉山神社遺跡 横浜市殿屋敷遺跡群C地区、横浜市古梅谷遺跡、横須賀市溝尾遺跡第2次 鎌倉市手広八反目遺跡、藤沢市大庭城址公園内遺跡、大和市月見野遺跡群上野遺跡第1地点 平塚市四之宮・真土地区における最近の考古学的成果と墨書き土器、史跡小田原城二の丸中堀 小田原市国府津三ツ俣遺跡 【特別講演】火山灰と考古学：町田 洋氏(東京都立大学)
第 10 回 1986年7月6日 横須賀市文化会館	相模原市中村遺跡、川崎市岡上小学校遺跡、横須賀市泉遺跡、逗子市沼間3丁目遺跡群 鎌倉市長谷小路南遺跡、横浜市釜台町上星川遺跡、伊勢原市坪の内久門寺遺跡 海老名市本郷遺跡G I N - E 地区(第18次)、秦野市草山遺跡、松田町からさわ古窯址群 藤沢市南鍛冶山遺跡第1・2次、鎌倉市今小路周辺遺跡(御成小学校内) 【特別記念講演】私と考古学の思い出：赤星直忠氏(文学博士)

開催日・会場	発表遺跡・講演内容
第 11 回 1987年8月16日 大和市中央文化会館	座間市中丸遺跡、横浜市西之谷大谷遺跡、横浜市西ノ谷貝塚、横浜市三枚町遺跡 秦野市桜土手古墳群第二次、相模原市矢掛・久保遺跡、鎌倉市由比ヶ浜中世集団墓地遺跡 小田原市小田原城三の丸(大蓮寺排水路改良工事)、松田町松田城址、鎌倉市山王堂遺跡 横浜市赤田地区遺跡群No.7・9遺跡、松田町からさわ横穴墓群、横須賀市ひる畠遺跡 秦野市砂田台遺跡、横浜市北川表の上遺跡 (ル14)
第 12 回 1988年9月4日 平塚市中央公民館	平塚市権現堂遺跡、二宮町倉上横穴墓群、小田原城下・欄干橋遺跡 (外郎邸) 厚木市吾妻坂古墳、厚木市宮の里遺跡、海老名市本郷遺跡第20次 (KE区) 藤沢市高倉瀧ノ上遺跡、鎌倉市玉縄城跡、横浜市金沢文庫遺跡、横浜市上台の山遺跡 大和市長堀北遺跡、相模原市下溝遺跡、茅ヶ崎市居村B低湿地遺跡
第 13 回 1989年9月3日 川崎市市民ミュージアム	藤沢市慶應義塾藤沢校地内遺跡、川崎市黒川地区遺跡群・宮添遺跡他 藤沢市ナデッ原遺跡、寒川町県営岡田団地内遺跡、伊勢原市三ノ宮・宮ノ前遺跡 横浜市大棚杉山神社遺跡、厚木市及川遺跡、横浜市上の山遺跡 小田原市三ツ俣遺跡 (F地区)、海老名市大谷向原遺跡 (B地区) 鎌倉市二階堂国指定史跡永福寺跡、史跡小田原城二の丸中堀 【特別講演】考古学調査と物理探査：坂山利彦氏 (応用地質 地盤工学研究所)
第 14 回 1990年9月30日 相模原市民ホール	清川村宮ヶ瀬遺跡群の先土器時代遺跡、相模原市勝坂遺跡第45次、秦野市寺山遺跡 平塚市王子ノ台遺跡(西区)、藤沢市慶應義塾藤沢校地内遺跡、逗子市池子遺跡群 横浜市港北区権田原遺跡、茅ヶ崎市石神遺跡、大磯町北中尾横穴墓群 海老名市相模国分尼寺跡、平塚市新町遺跡、鎌倉市下馬周辺遺跡 小田原市小田原城三の丸堀関連遺跡
第 15 回 1991年9月29日 横浜市教育文化ホール	清川村宮ヶ瀬遺跡群北原 (No.9) 遺跡長福寺址、箱根町元箱根石仏・石塔群 鎌倉市由比ヶ浜中世集団墓地遺跡、茅ヶ崎市浜之郷石原B遺跡、川崎市県史跡馬絹古墳 横浜市上矢部町富士山古墳、綾瀬市神崎遺跡、逗子市池子遺跡群No.1-A地点 相模原市田名塩田原遺跡群、藤沢市柄沢遺跡群1-E・F地点、綾瀬市上土棚遺跡第3次 【特別講演】港北ニュータウンの調査と遺跡群研究：岡本 勇氏 (港北ニュータウン埋蔵文化財調査団長)
第 16 回 1992年9月27日 横浜市開港記念会館	厚木市東町遺跡、鎌倉市今小路西遺跡(御成小学校内)、山北町河村城跡 鎌倉市大蔵幕府周辺遺跡群、海老名市相模国分寺跡・相模国分尼寺跡 逗子市池子遺跡群No.4地点、伊勢原市石田・細屋遺跡 寒川町倉見日本鉱業株新ひかり社宅内遺跡、秦野市東開戸遺跡 小田原市内における関東ローム層、綾瀬市吉岡遺跡群 【記念講演】金海市大成洞古墳の調査：申 敬澈氏 (慶星大学校助教授)
第 17 回 1993年9月19日 秦野市文化会館	藤沢市南葛野遺跡、大井町第一東海自動車道No.35遺跡、小田原市久野2号墳 秦野市太岳院遺跡、海老名市相模国分寺塔跡、三浦市新井城跡、平塚市山王A遺跡 横浜市観福寺北遺跡 (関耕地地区)、横須賀市小荷谷遺跡、清川村宮ヶ瀬遺跡群表の屋敷遺跡 横浜市綱崎山横穴墓群 【記念講演】中世城館遺跡について：石丸 熙氏 (東海大学教授)
第 18 回 1994年9月25日 横浜市開港記念会館	大和市月見野遺跡群上野遺跡第5・6地点、南足柄市塚田遺跡、平塚市原口遺跡 伊勢原市第一東海自動車道No.14 (三ノ宮・下谷戸) 遺跡、茅ヶ崎市居村B・前ノ田遺跡 横須賀市大塚古墳群 (吉井・池田地区遺跡群内)、横浜市大場横穴墓群F・G・H横穴墓群 川崎市下麻生古墳群、海老名市国分尼寺北方遺跡 (第7・8次)、鎌倉市若宮大路周辺遺跡群 小田原市本町・小田原城三の丸堀 【記念講演】南関東テフラから見た天変地異期：上杉 陽氏 (都留文科大学教授)
第 19 回 1995年9月23日 川崎市中原市民館	相模原市横山5丁目遺跡、清川村宮ヶ瀬遺跡群北原 (No.10・11北) 遺跡 横浜市阿久和宮腰遺跡第1次、三浦市油壺遺跡、藤沢市若尾山遺跡、平塚市構之内遺跡 伊勢原市第一東海自動車道No.14 (三ノ宮・下谷戸) 遺跡、川崎市久本横穴墓群 鎌倉市国指定史跡永福寺跡、山北町河村城関連遺跡 小田原市三の丸小学校内遺跡 (小田原城三の丸・藩校集成館跡) 【記念講演】神奈川県の「地震考古学」：上本進二氏 (神奈川県立旭高等学校教諭)
第 20 回 1996年9月23日 茅ヶ崎市民文化会館	本書参照

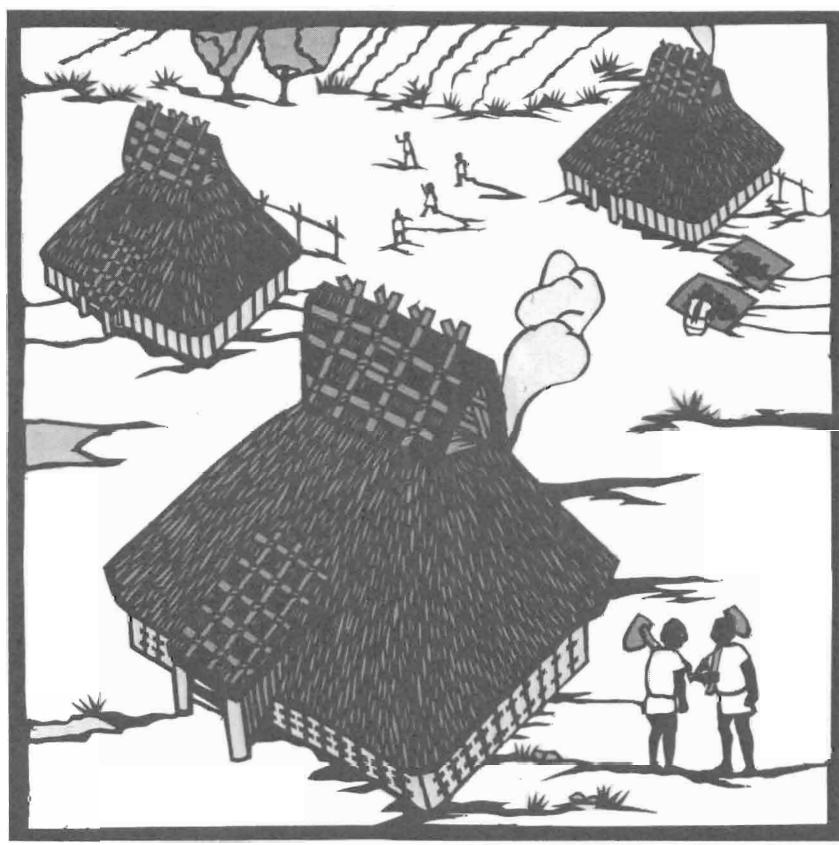
第20回 神奈川県遺跡調査・研究発表会 発表要旨

発 行 神奈川県考古学会

編 集 茅ヶ崎市教育委員会

発行日 1996年9月23日

印 刷 神奈川印刷株式会社



平塚市坪ノ内遺跡

林原利明

1. 所在地 平塚市四之宮652-3、ほか
2. 調査主体 坪ノ内遺跡発掘調査団
3. 調査担当者 林原利明
4. 調査目的 湘南新道橋建設に伴う事前調査
5. 調査期間 1995年6月1日～1996年8月31日
6. 調査面積 3,500m²
7. 遺跡の立地
坪ノ内遺跡は、相模川下流右岸の砂州・砂丘および自然堤防上に立地している。相模國府推定域の東端、古代相模國四之宮である前鳥神社の南面に展開する遺跡である。今回の調査地区は、遺跡の北部に位置し、JR平塚駅から北西約3.2km、相模川から西方0.3km、海岸線からは直線距離で約4.4kmの距離にある。標高は、7～9m前後を測る。

平塚市内の低地では、これまでの発掘調査で古代を主体とした遺構・遺物が濃密な状況で検出されている。とくに坪ノ内遺跡をふくむ四之宮周辺では官衙に関連すると考えられている遺跡群（坪ノ内遺跡、六ノ域遺跡、高林寺遺跡、天神前遺跡、稻荷前A・B遺跡、七ノ域遺跡、山王A・B遺跡、構之内遺跡など）が所在しており、政府などの遺構は未発見であるが、相模國府（大住國府）の推定地と考えられている。また、近年、稻荷前A遺跡から出土した8世紀中葉の「国厨」・「旧跋一」墨書土器は、初期國府の所在地問題に関しても興味深い資料である。

8. 調査の概要

調査は、湘南新道橋建設に伴い1995年6月1日から1996年8月31日までの日程で実施した。

今回の調査地区は平塚市No.189遺跡として周知されている坪ノ内遺跡にあたり、過去5回の調査により古墳時代後期から古代（奈良・平安時代）を主体として弥生時代中期後葉から近世にわたる遺構・遺物が濃密な状況で検出されている。第5地点では官衙関連遺構として柱間が2mを超える総柱の掘立柱建物跡（4間×6間以上）が検出されている（9世紀後半代の所産）。



第1図 遺跡位置図 (S: 1/50000)

今回の調査でも古墳時代後期から古代を主体として、弥生時代後期から近世にわたる遺構・遺物が濃密な状況で検出された。また、調査地区東側では砂州・砂丘地帯（西側）と後背湿地・自然堤防地帯（東側）との境を確認することもできた（27杭列付近）。

【検出された遺構】 竪穴住居跡・竪穴状遺構：21軒（弥生時代後期、古墳時代後期、奈良・平安時代） 掘立柱建物跡：4棟（奈良・平安時代） 錫冶工房跡：3棟（奈良・平安時代） 井戸跡：20基（奈良・平安時代、中世） 溝状遺構：62条（奈良・平安時代、中世） 集石遺構：7基（奈良・平安時代、中世） 不明遺構：多数→粘土採掘坑と考えられるものをふくむ（奈良・平安時代、中世、近世） 土坑・ピット：328基（奈良・平安時代、中世、近世） 敵状遺構：多数（近世）

【検出された遺物】 土器類：弥生土器（弥生時代後期）、土師器、須恵器（古墳時代前・後期、奈良・平安時代）、灰釉陶器、綠釉陶器（平安時代）、青磁、白磁（中世）、磁器染付（近世）、瓦、輪の羽口、埴輪、須恵器甕転用硯（奈良・平安時代）。 金属器：鉄鎌（古墳時代後期）、帶金具→鉄具・鉈尾、錫冶関連遺物→錫塊系遺物・鍛造剥片・鐵達など、釘（奈良・平安時代）、銅錢（古代：「承和昌寶」、中世：渡

来錢)、錐(中世) 石製品:石帶具→丸軸・鉈尾、砥石(奈良・平安時代)、磨石状製品(奈良・平安時代、中世) 木・布製品:柄杓、鳥帽子(中世)、板状製品、棒状製品(奈良・平安時代、中世) 遺物収納コンテナー 350箱

以上のように、出土遺物は多量であるが、現段階では墨書土器などの文字資料は皆無である。今後、確認される可能性はあるが、文字資料の多い四之宮周辺では異色である。

次に、主な遺構について簡単に記す。

豎穴住居跡・豎穴状遺構 7世紀後半から11世紀代のものである。1軒をのぞき他のものはすべて西側の砂州・砂丘上で検出されている。このうち、A区(西側)では、8世紀代の所産と考えられる長軸10mを超えるような長屋状の豎穴住居跡(豎穴状遺構)が3軒検出されている(可能性があるものもふくむ)。いずれもほぼ東西方向に並んでおり、建物群としてとらえることができるかもしれない。しかし、遺構の性格をしめすような遺物の出土はなく、また、2軒にはカマドが付随するなど平面形・規模のほかには特殊性は認められない。

掘立柱建物跡 東西棟2棟、南北棟2棟が検出された。全体を検出できたものは1棟にすぎないが、いずれも3間×4間以上の規模を有する。柱穴は、方形あるいは長方形を呈する。出土遺物は少ないが、重複関係からいざれも8世紀代の所産であると考えている。このうち、B区で検出された2棟の東西棟は、桁行5間であり、柱間は2m以上を測るものである。

鍛冶工房跡 B区で検出された鍛冶工房跡(SI-24)は、砂州・砂丘地帯の東端に位置する。一部調査区外へ展開しているが、東西約12m以上、南北5m以上の長屋状豎穴内に2列に並んだ径40cm前後の円形鍛冶炉が著しい重複を有して約70基検出された。いわゆる連房型の官営鍛冶工房跡と呼ばれるものである。遺構内からは、製品・工具の出土はなかったが、轆の羽口・鉄塊系遺物・鍛造剥片・鉄滓などの鍛冶関連遺物が多量に出土した。出土土器から8世紀末から9世紀初頭を下限と考えている。このような、鍛冶遺構は全国的にみても検出例は限られており、北関東以北の官衙関連の数遺跡で検出されているにすぎない。神奈川県内はもとより、南関東では初発見である。

この他、A区で鍛冶工房跡の可能性がある豎穴状遺構が2軒検出されている。

井戸跡 径3m以上のものが2基あり、いずれも古代の所産であると考えている。このうち、1基(SX-05)からは井戸枠の痕跡が認められた。他のものは、いずれも平面円形を呈し、出土遺物は少ないが、重複関係等から古代から中世の所産であると考えている。このうち、中世の所産と考えているSK-211からは柄杓・鳥帽子・錐が出土している。

9.まとめ

今回の調査地区は、隣接する六ノ域遺跡や高林寺遺跡などと異なり、掘立柱建物跡が少なく、豎穴系の遺構が多い状況であった。これらの遺構は、比較的整然とならんており、時期的な変遷を考慮する必要はあるが、何らかの規制(規則性)をうかがうこともできる。このうち、官営鍛冶工房跡と考えられる遺構が検出されたことは、これまで国府推定域内で鍛冶関連遺物の出土はあるが、明確な鍛冶遺構が検出されていないこととともに、相模国府(大住国府)を考えるうえでも非常に興味深いことである。A区で検出された長屋状の豎穴状遺構群に工房的な機能を考えれば、今回の調査地区付近を国府推定域内での工房エリアと考えることができるかもしれない。文字資料が皆無であることはこのことを反映しているのであろうか。

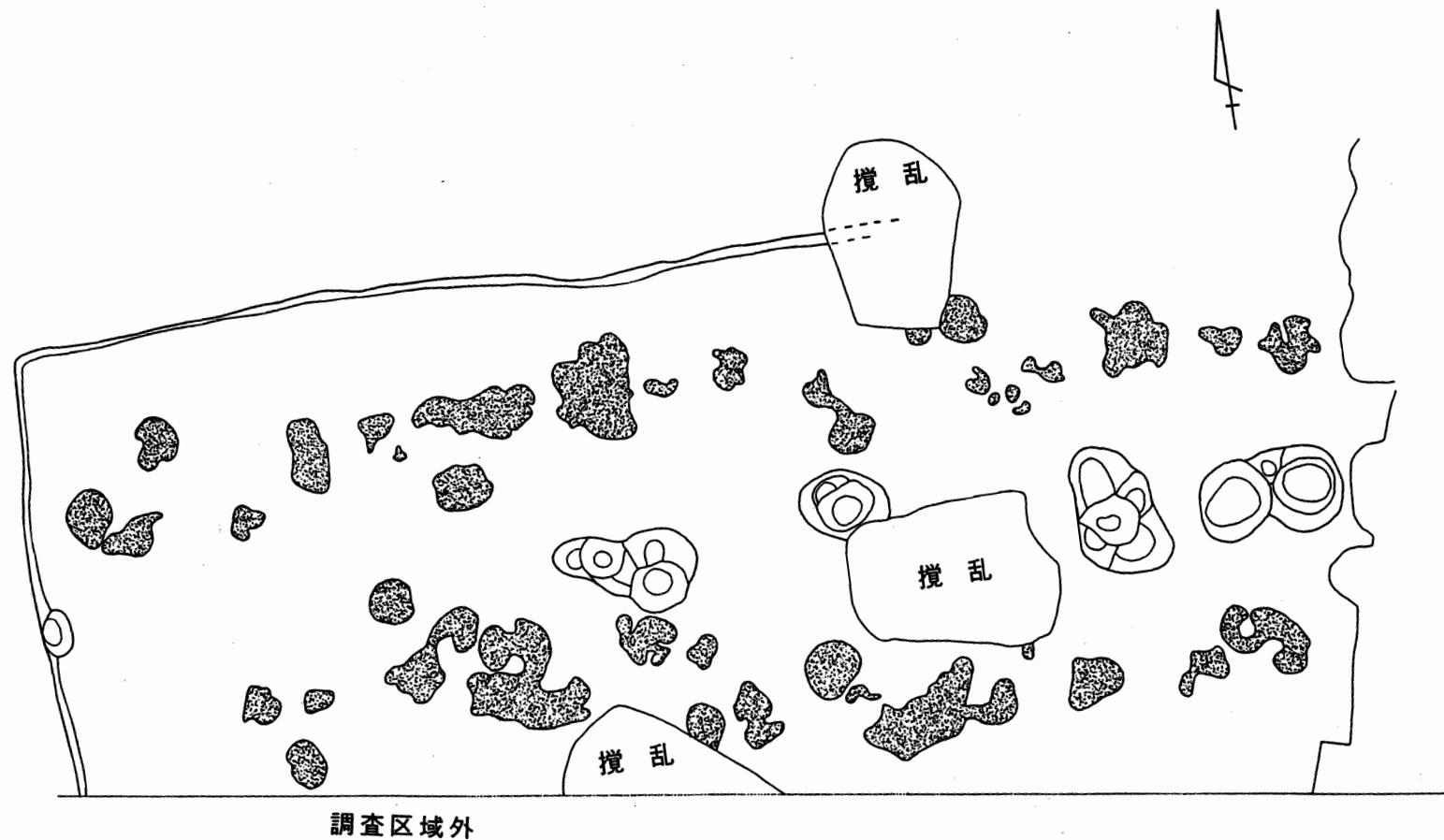
また、東側の後背湿地および自然堤防上でも予想を上回る状況で古代から中世にかけての多くの遺構・遺物を検出することができた。官衙関連遺跡群では初めての成果であり、砂州・砂丘上以外の土地利用についても貴重なデータを得ることができた。

いずれにしても調査は終了したばかりであり、不明確な点も多く、詳細な資料分析はおこなえていないが、今後、慎重に検討を重ねて成果を評価してゆきたいと思っている。



- 竪穴住居跡・竪穴状遺構
- 掘立柱建物跡
- 井戸跡
- 溝状遺構
- 鍛冶工房跡

第2図 調査地区全体図 (S=1/500)



第3図 鍛冶工房跡 (SI-24, S=1/60)
0 2m

居村B遺跡第3号木簡

654321 発見地
神奈川県茅ヶ崎市本村四丁目十七番地市道内
発見日
一九九一年(平成4年)六月八日
調査機関
茅ヶ崎市埋蔵文化財調査会
遺跡の種類
水田址等(遺物散布地)

遺跡の年代

縄文時代晚期、古代、中世

遺跡及び木簡出土遺構の概要

神奈川県南緑の中央付近に位置する茅ヶ崎市は相模湾に面し、その面積の約二分の一が砂がち地形(砂丘、砂州)を主体とする低湿地に占められている。海退にともなう陸地化は市内に多くの砂丘列を形成し、その間に低湿地(砂丘間凹地)を残した。居村B遺跡は現海岸砂丘から数えて第4目の北側に存在する小規模な砂丘間凹地に立地し、現地表の標高は約5m強である。北には居村A遺跡、南には前田遺跡が隣接するが、ともに古代遺構と遺物が極めて濃密に含まれる集落遺跡である。本遺跡の現況は水田を主体とし、一部が盛り土による宅地及び市道となっている。

今回の調査は公共(水道建設)に伴う調査であり、本遺跡と居村A遺跡との境界に現存する市道内の下水管工事部分に限られたものであった。道路幅は約0.6mまでが現代攪乱層(1層)、その下0.4mが中近世層(2層)、それ以下が古層(3層)に分層され、約1.4mで砂層(4層)に至るものであり、中近世層下部より下が低湿地特有の黒色土となり、古層は粘性の強いものであった。この黒色土からは湧水があり、調査時のこの一帯の水位を示すものであるとともに、黒色土堆積以後現在に至るまで、恒常的に地下水が存在したことがわかった。

遺構としては、一部、低湿地と微高地(居村A遺跡)を区画するように掘られた溝が検出された以外、特定するものはないが、遺物は、2層から中世半に属する滑石等の陶磁器破片、かわらけなどが少量出土した他、3層より須恵器・土師器破片が比較的多く出土した。これらの古代遺物の時期は古墳時代後期から平安時代中期にかけてのものであり、層序的細分はできなかつた。また、これらの土器類に相伴して多くの木製遺物が出土したが、古代に属する木製品としては曲げ物の底板が3点、火切り杵と思われる棒状具が1点、詳細不明の板製品破片などの他、桃の種や自然木片などが出土した。

曲げ物底板の1点の外面には、判読はできまいでも明瞭な文字の墨書きと全体に墨書きと同様に國立歴史民俗博物館の平川南教授に解説をお願いする」ととした。この釈文・内容については、平川教授並びに東京大学大学院の三上喜季氏によるものである。

7 木簡の釈文・内容

「居
西
斤」
「居
西
斤」
「居
西
斤」

(径 204×5mm 三分の一欠損 0六一型式)

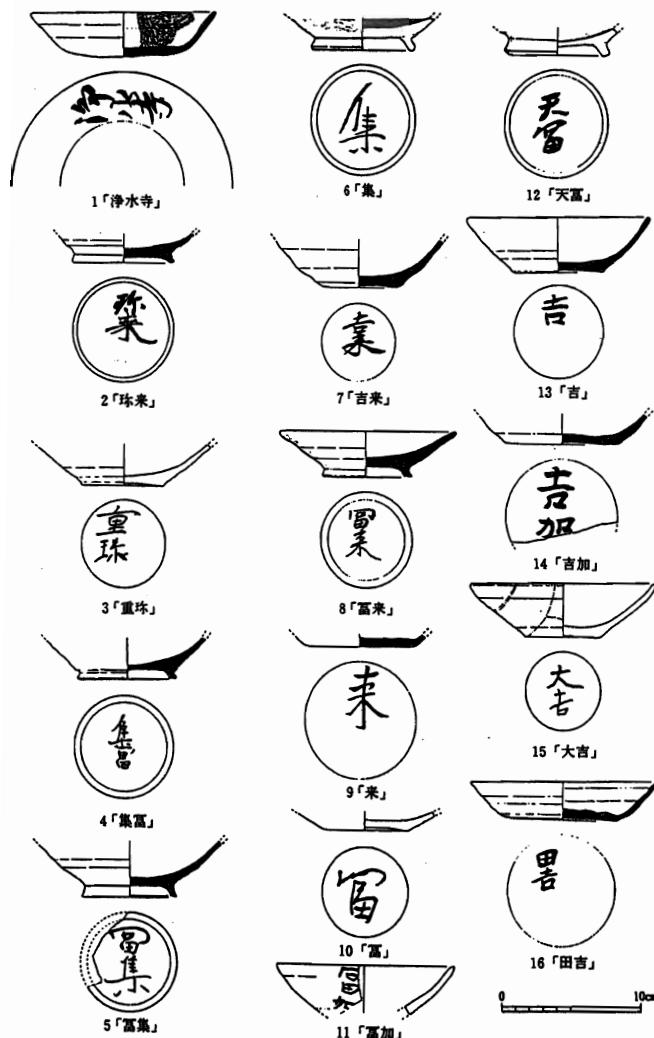
本木簡は凸形曲物容器の底板の半存したもので、外面一面に墨書きがある。「のうか、木目にほぼ直交する方向で「西槽」、それとはやや方向を異にして「炭」「西斤」「壹」
「大」などと書かれた文字が判読できる。他に木目に平行に文字らしきのがいくつかみられるが、判読不明である。

「西」は、「和名抄」に「兼名注云西へ蘇目反、阿如稱可以染絹者也」とあるように、織維製品を緋色に染める際に使われる材料である。「延喜式」(雜職業)には、織維の染色に必要な材料として「西、米、灰、薪などがあげられている。本木簡に「西」とともにみえる「炭」も、染色の際に使われる燃料の意味で書かれた可能性がある。

「西斤」も、「和名抄」のうち、木目にほぼ直交して書かれた「西槽」は、他の文字に比べ、墨書きも濃く、字体も整っていることから、「西槽」とその他の文字とは性格を異なるものと考えるべきである。一方、他の文字は墨書きと考えられる。一方、「西斤」と考えられる可能性が考えられる。一方、「西斤」は一般的に「サカフネ」「フネ」などと読まれる(「新撰字鏡」)が、「延喜式」(木工寮)に「円槽」へ徑 尺、深八寸」というものがあり、「槽」が木製曲物容器を指す場合もあつたようである。そう考えると「西槽」がこの曲物容器の用途と密接に関わる記載である可能性が考えられる。

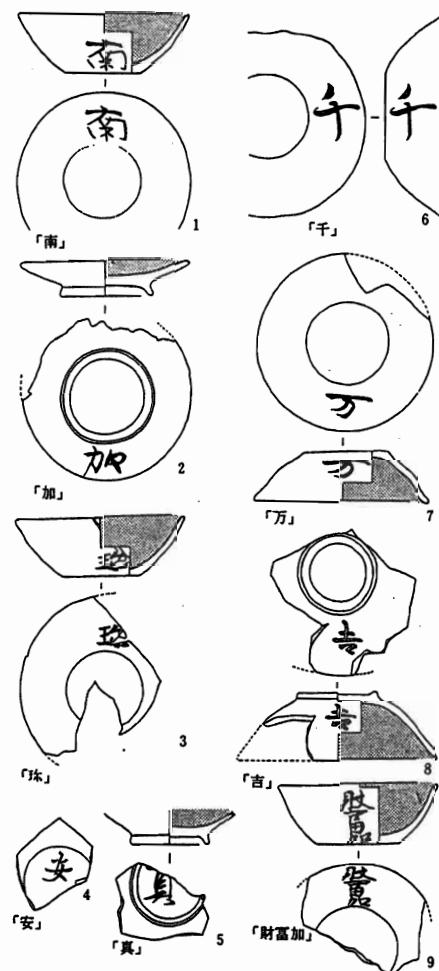
留學「考ふられる文字のうち、注意を引くのは「西斤」という記載である。養老服令一調相應条に、調副物として「西斤」、「延喜式」(主計上)に「中男作物」として「西斤」があげられていることから、「西斤」は相模国の輸すべき中男作物品目として「西」があげられている。なお、「延喜式」(雜職業)にみる「西」がいずれも大方で計量されていることをふまえると、「西斤」の右側に「大」の字が付されているのは、「斤」が大方であることを明記したものと推測できる。

◆石川県 小松市 淨水寺跡



○長野県塩尻市吉田川西遺跡

南, 加, 球, 安, 真, 千, 万, 吉, 財富加



土器に記された文字 “墨書土器”

○福島県石川町達中久保遺跡

南, 加, 朱, 本, 真, 千万, 富, 豊, 豊

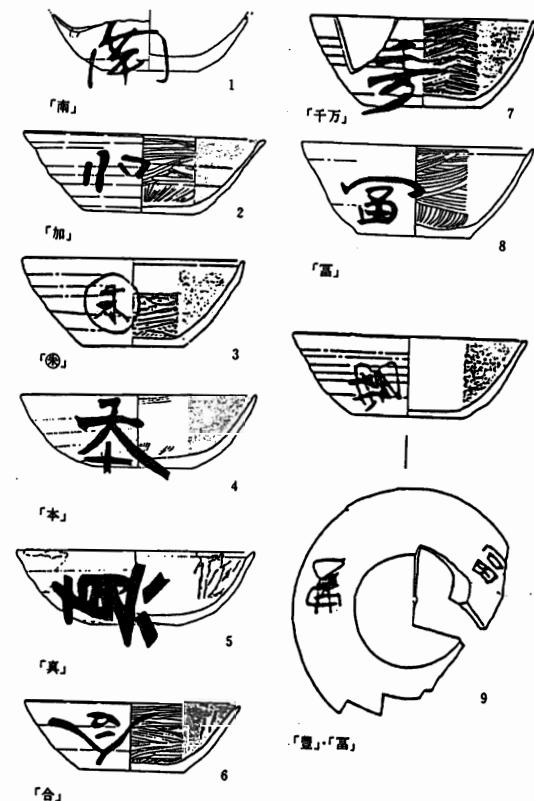


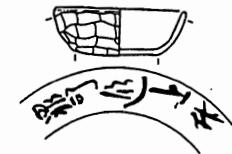
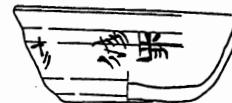
図1-1 石川県淨水寺跡の墨書土器

図1-1 共通文字群 (長野・吉田川西遺跡)

図1-2 共通文字群 (福島・達中久保遺跡)

◆ 千葉県 富里町 久能高野遺跡

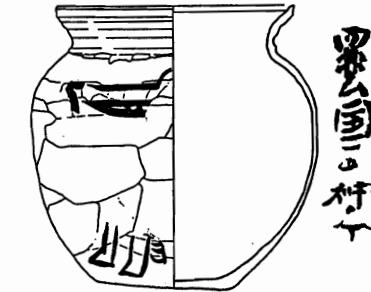
◆ 千葉県 芝山町 庄作遺跡



「罪司」への供献を示す墨書き土器

④. 「——神罪□」(千葉・庄作遺跡)

○富里町久能高野遺跡・土師器坏
外面体部 「罪司進上代」



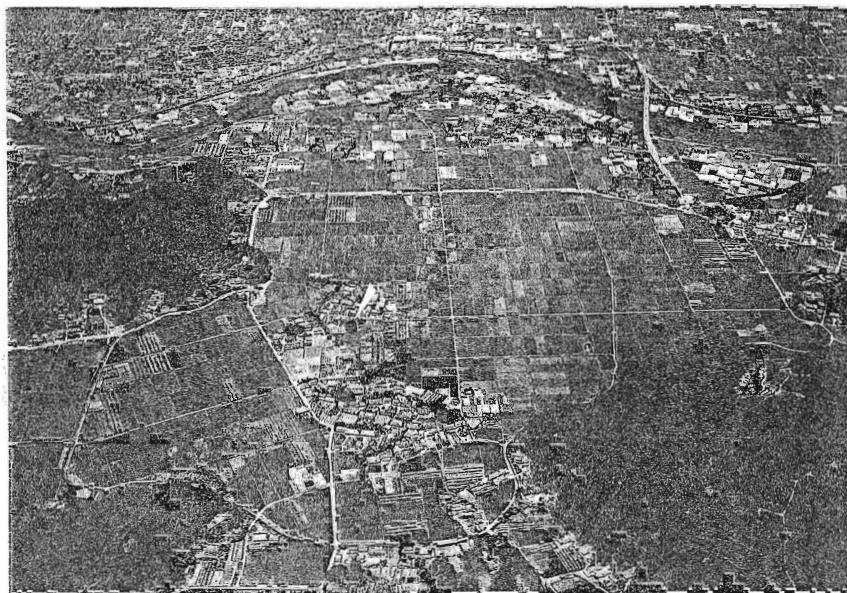
閻羅王の使の鬼、召さる人の賂を得て免す縁 第二十
『日本書紀傳』中卷

捨磐鳴は、諸樂の左京の六條五坊の人なり。大安寺の西の里に居住す。聖武天皇のみ世に、其の大安寺の修多羅分の錢三十貫を借りて、越前の都魯鹿の津に往きて、交易して運び超し、船に載せ家に將ち來たる時に、忽然に病を得、船を留め、單獨家に來むと思ひ、馬を借りて乗り來たる。近江の高鶴の郡の磯鹿の辛前に至りて、曉みれば、三人追ひ来る。後るる程一町許なり。山代の字、治椅に至る時に、近く追ひ附き、共に副ひ往く。磐鳴問ふ、「何に往く人々か」といふ。答へ言ひて曰はく「閻羅王の闘の、捨磐鳴を召しに往く便なり」といふ。磐鳴聞きて問ふ「召さるるは我なり。何の故にか召す」といふ。使の鬼答へて言はく「我等、先に汝が家に往きて問ひしに、答へて曰はく「商に往きて未だ來らず」といふが故に、津に至りて問ひしに、當に相ひて捉へむと欲へば、四王の使有りて、説へて言はく『免す可し。寺の交易の錢を受けて商ひ奉るが故に』といふが故に、暫免しつるのみ。汝を召すに日を累ねて、我は飢ゑ疲れぬ。若し食物有りや」といふ。磐鳴云はく「唯干飯有り」といひ、與へて食は令む。使の鬼云はく「汝、我が氣に病まむが故に、依り近づか不あれ。但忍ること莫がれ」といふ。終に家に望み、食を備けて變す。鬼云はく「我、牛の穴の味を嗜むが故に、牛の穴を變せよ。牛を捕る鬼は我なり」といふ。磐鳴云はく「我が家に斑なる牛二頭有り。以て進らむが故に、唯我を免せ」といふ。鬼言はく「汝は何の年ぞ」といふ。磐鳴答へて云はく「我が年は戊寅なり」といふ。重き罪に入り、鐵杖を持ちて、百段打たる應し。若し汝と同じ年の人有りや」といふ。磐鳴答へて言はく「我部で知ら不」といふ。三の鬼の中に、一の鬼識りて言はく「汝は何の年ぞ」といふ。磐鳴答へて云はく「我が年は戊寅なり」といふ。鬼云はく「吾聞かくは、率川の社の許の相八卦譲にして、汝と同じ年の人有りや」と卷を読み奉れ。「の名は高佐麻呂、二の名は中知麻呂、三の名は越麻呂ぞ」といひて、夜半に出で去る。明日見れば、牛一つ死にたり。磐鳴、大安寺の南塔院に参る入り、沙彌仁羅法師、未だ受戒せざりし時なり。を請けて、金剛般若經百巻を讀み奉らむと欲ふと語る。仁羅、請を受けて、二箇日を經て、金剛般若經百巻を読み乾はりぬ。三箇日を歷て、使の鬼來りて云はく「大乘の力に依りて、百段の罪を脱れ、常の食より復讐一斗を倍して賜ふ。喜し、貴し。今より以後、節毎に、我が爲に修福し供養せよ」といふ。即ち忽然に失せぬ。磐鳴年九十歳にして死にき。

2) 25号住居跡 土師器環
外面網部 墨書き人面・「罪ム國玉神奉」

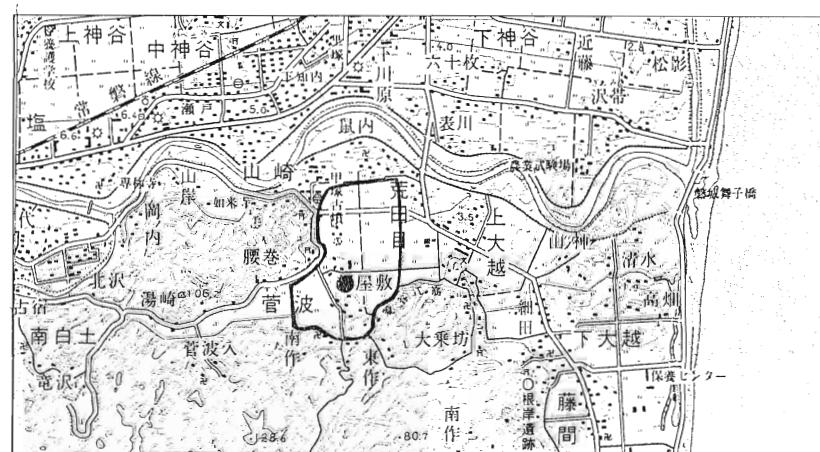


○八千代市権現後遺跡・土師器坏
内面 墨書き人面
外面体部 「村神郷丈部國依甘魚」



1 空から見た荒田目条里遺跡（平成元年撮影）

〔所在地〕 福島県いわき市平音波字笠堂



荒田目条里制遣構(枠)と荒田目条里遺跡(点)の位置

兵庫県氷上郡春日町

山垣遺跡

春部君廣橋 神直与 □ □ □ □ □ 依而
春部麿麻呂 右三人

(來カ) 四月廿五日

基萬侖

619 X 49 X 6

符春部里長等

竹田里六人部

春部君廣橋

神直与

右三人

里長木參出

木參出

其萬侖

足少

新潟県三島郡和彌村

八幡林遺跡

「郡司符 青海郷事少丁高志君大虫 右人其正身事 □」
「虫大郡向參朔告司 □ 幸申賜 符到奉行
火急便高志者五百鶴 九月廿八日主機文部

585 X 34 X 5

郡司符

青海鄉事少丁高志君大虫

右人其正身事 □

九月廿八日幸申賜

虫大郡向參朔告司 □ 幸申賜

行太魚使高志君五弓

九月廿八日幸申賜

「郡符 里刀自 手古丸 黑成 宮澤 安維家 貞馬 天地
真人丸 奥丸 楊丸 痘目丸 胖片 晴馬 貞馬 福種 奥成 得内 宮公 吉惟 勝法 圓隱
毛部福成女 於保五百繩 子槐本家 太青女 真名足 丕 子於足 金井四人」

右田人為以今月三日上面鐵田令植可 □ 發如件

福島県いわき市

荒田目条里遺跡

大領於保臣

奉宣別為如往件 □

以五月一日

594 X 45 X 6

大

傳

傳

傳

傳

傳

傳

傳

傳

傳

傳

傳

傳

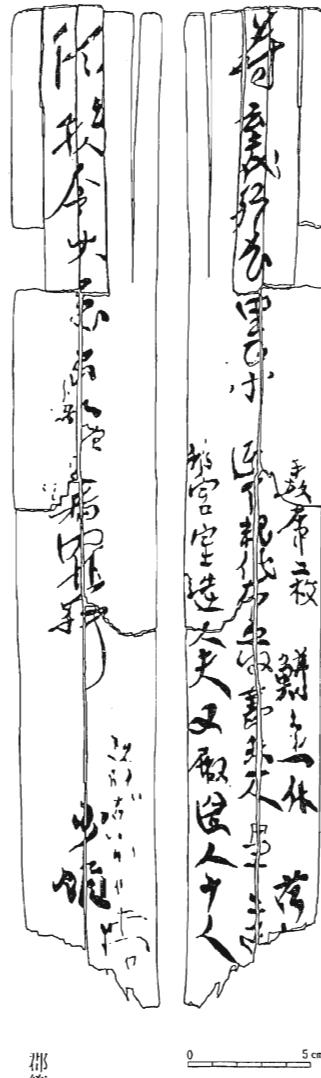


図 71 114 号木簡実測図

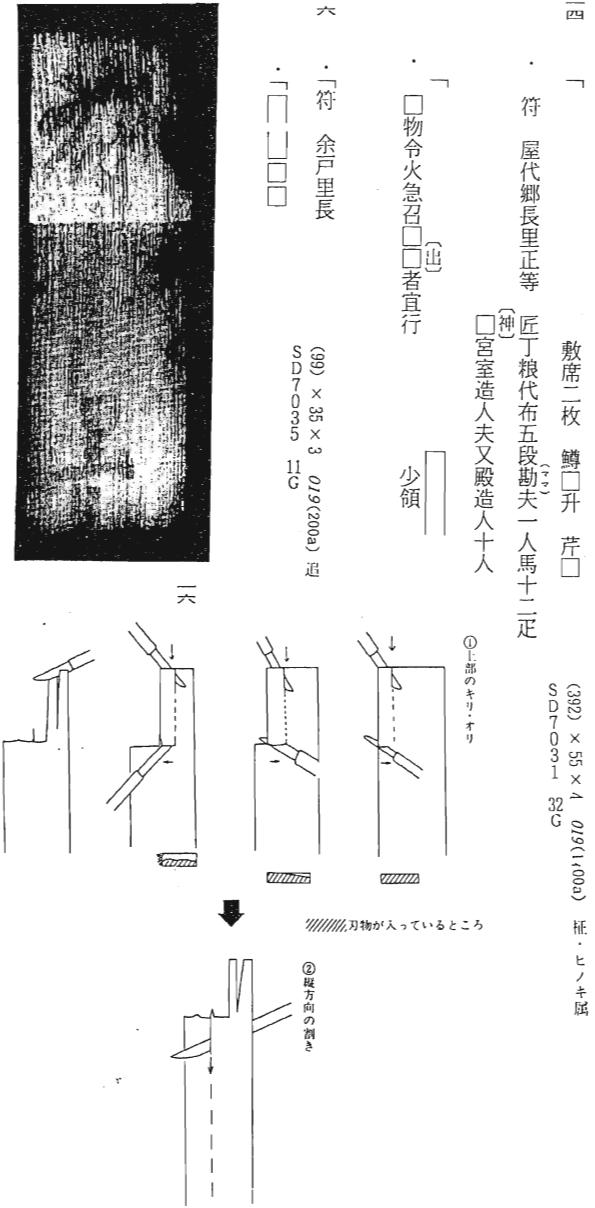


図 61 郡符木簡の廃棄行程

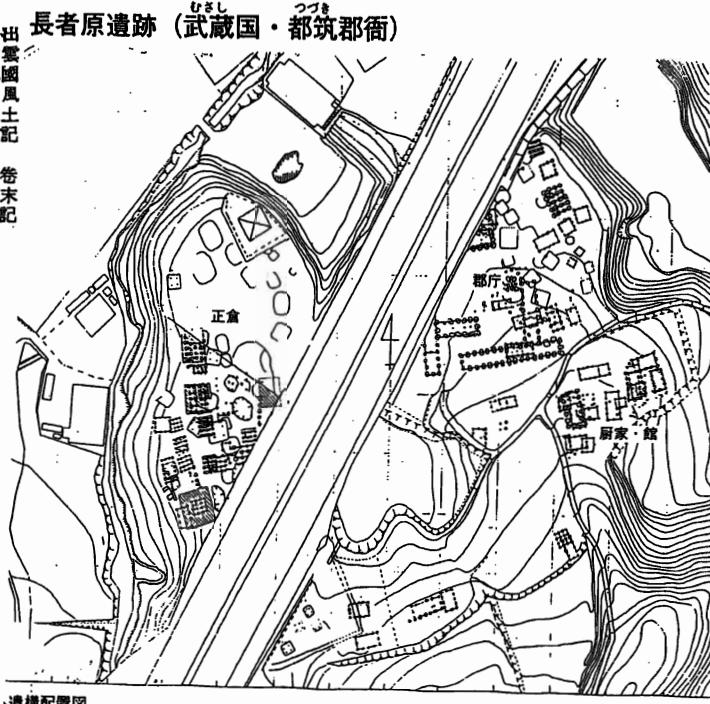
「符更科郡司等可」
「加志^{アシ}郡^{アシ}」
「」
(前半2)(前半1)

10
金刺ア富止布手/
刑ア真^ミ布/^{アシ}酒人^{サケル}^{アシ}布手/
金刺舍入真清布手/」

布手
金刺舍入真清布手/」

KO
・信濃國^{アシ}更科郡^{アシ}正倉^{アシ}
□□人□□萬石□
正倉^{アシ}石田ト□□
□□□

220 × 31 × 8 (011(1001)) 追
0.07-0.03m 82 25G



長者原遺跡(武藏国・都筑郡衙)

出雲國風土記 卷末記

國の東の境より西のかたに去ること井里一百八十歩にして、野城の橋に至る。長
さ卅丈七尺、廣さ二丈六尺なり。飯糸川なり。又、西のかた井一里にして國の廳
意宇の郡家の北の十字の街に至り、即ち、分れて二二の道と爲る。一つは正西の道。
一つは北に在れる道なり。

意宇の軍國 即ち郡家に屬けり。

熊谷の軍國 飯石の郡家の東北のかた廿九里一百八十歩なり。

神門の軍國 郡家の正東七里なり。

出雲國風土記 意宇郡

黒田の驛 郡家と同じき處なり。郡家の西北のかた一里に黒田の村あり。土の
體、色黒し。故、黒田といふ。舊、此處に是の驛あり。即ち號けて黒田の驛といひ
也。今は郡家の東に屬けり。今も猶、舊の黒田の號を追ぐるのみ。

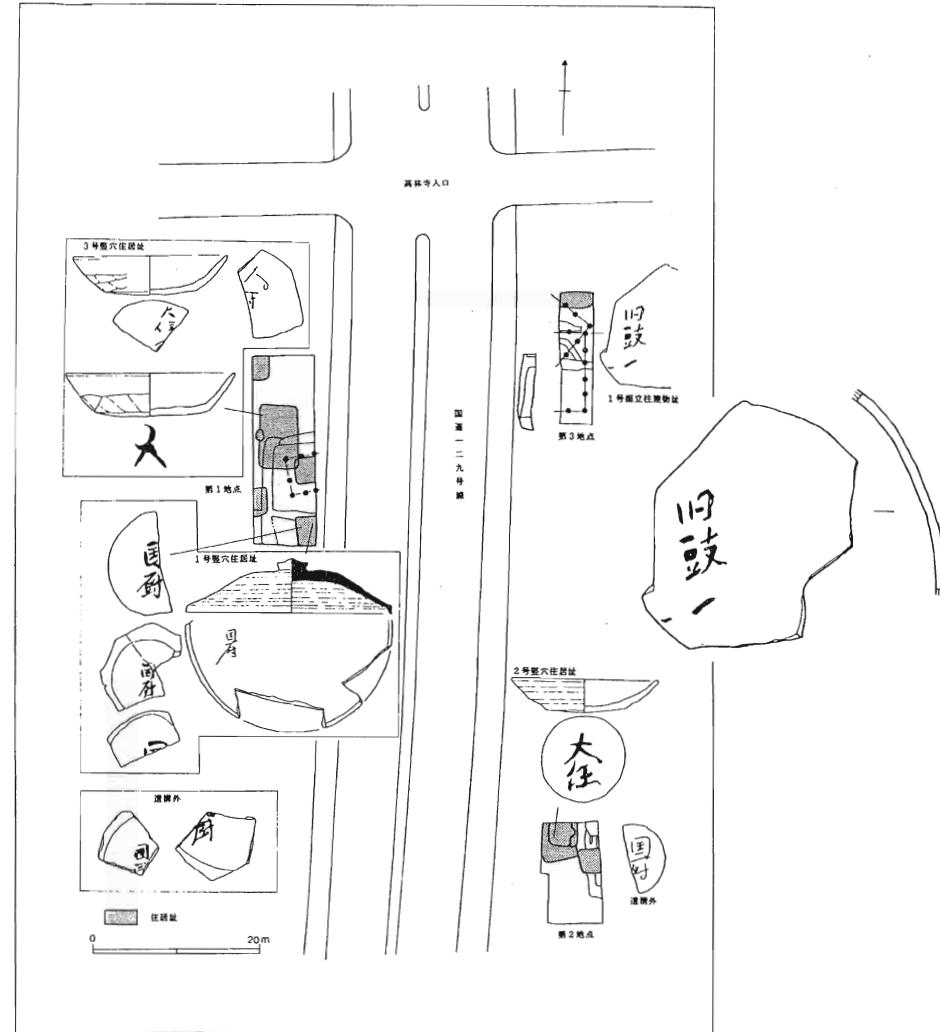


図7 稲荷前A遺跡の調査成果

平塚市博物館研究報告「自然と文化」No19 p.1-22 1996

相模國「國厨家」について

— 平塚市四之宮所在の稲荷前A遺跡の性格について —

明石 新*

豉料。大豆一石六斗六升七合。海藻四斤八兩。得一石。

延喜式卷三十三 大膳下
延喜式卷三十七 典藥寮

相模國卅二種

黃芩十斤五兩。芎藭廿斤。茵陳稬。知母。莢茄。芍藥。黃耆。前胡各一斤。枸杞十八斤。藍漆七斤。紫菀八兩。荳蘆子二斤。防風三斤。橘皮十五斤十兩。瓜蒂二兩。欵冬花九斤。白頭公一斤。麻黃六斤八兩。薯蕷一斗。麥門冬一升。桃仁。胡麻子各三斗。干地黃三升。附子一斗八升。大蛇床子一升。黃芩子一升。桂子二升。夢寐子五合。石硫黃一斗。猪蹄一具。丹參四斤。豉大五斗。

武藏國廿八種

黃芩卅五斤十兩。芎藭五斤。丹參廿五斤。地榆三斤十兩。知母一斤。枸杞十斤。芍藥三斤。桔梗四斤十二兩。細辛廿斤。大黃二斤。土瓜三斤十四兩。當歸十四斤。甘遂一斤。欵冬花十兩。瓜蒂五兩。干地黃五斗七升六合。桃仁四斗。烏頭一斛二斗。附子八斗。決明子。牡荆子。夢寐子各三斗。蛇床子一斗。地膚子一斗五合。荳蔻子二升。蜀椒三斗。麻黃五斤。豉大一斗。

延喜式卷二十三 民部下

相模國 商布六千五百端。鐵二石五斗。鹿皮廿張。鹿角十枚。紫草三千七百斤。布一千五百端。鐵一千五百端。鹿革廿張。鹿皮十二枚。織金一百端。鐵六石五斗。鹿皮廿枚。細質席卅枚。席五百枚。

武藏國 裝五十疋。布一千五百端。鐵六石五斗。鹿革六十張。鹿皮十五張。紫草三千一百斤。木絲四百七十斤。編子四合。席五百枚。

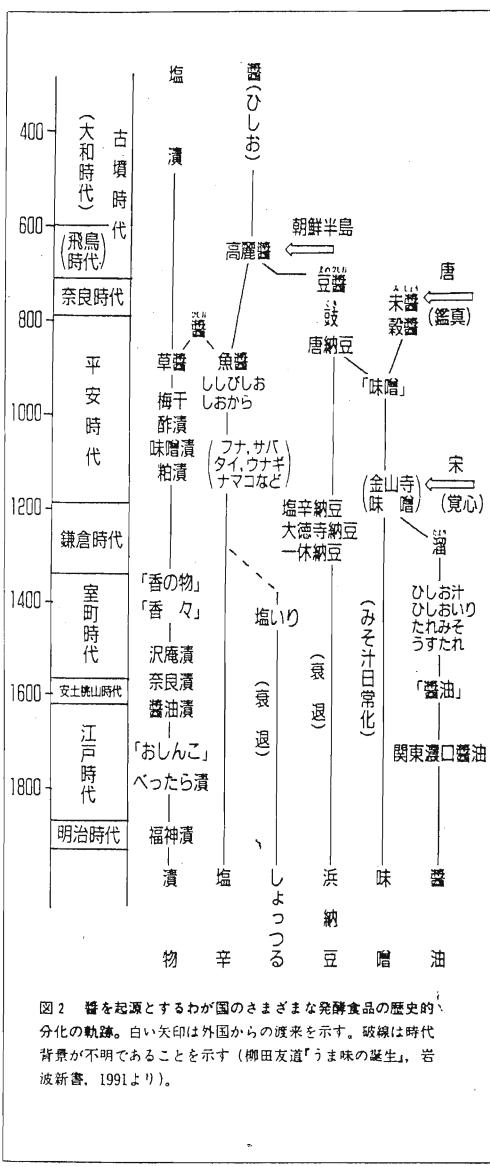


図2 番を起源とするわが国のさまざまな発酵食品の歴史的分化の軌跡。白い矢印は外国からの渡来を示す。破線は時代背景が不明であることを示す（柳田友道「うま味の誕生」、岩波新書、1991より）。

正嘉國吳公之孫餽月旦大寶頭一疋天平十八年十一月

180×24×6 6032

404

清國史館卷之三
光緒甲子年夏月

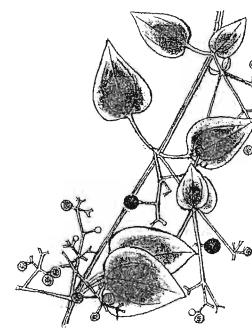
中男作物。麻五百斤。紙木綿紅花茜。
延喜式卷三十四 木工寮

中男作物。紙。熟麻。紅花。茜。短鯪。堅魚。海藻。
庸。輸。布。

餘緜綯布。調一窠綾五疋。二窠綾三疋。三窠綾五疋。七窠綾五疋。橡帛十三疋。黃帛八十疋。紺布六十端。縹布卅端。自

相摸國行程上廿五日。
下十三日。

相摸國行程上廿五日。
下十三日。



アカネ [西草]

学名 *Rubia cordifolia* 英名 *Madde*

別名：赤根[あかね] 赤根萬[あかねかばら] 生漢名：萬草[あかね] 萝根[あかれこん]